ただ、推しを愛でたいだけ。

maybear

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワールドトリガーの世界に元陰キャのオタクが転生。

うひょー。うまぴょいっ！うまぴょいっ！フッフー!!となった、オリ主、神風みらい。

彼女は第二の人生を推しを愛でることに捧げることを誓う。

そんな彼女の備忘録。

シリアスは少しありますが、楽しくほのぼのしていきます。

面白くなるのは、第一次大規模侵攻から。そこまでは、多分つまんないかも。

目　次

はじまりはじまり
はじめましてこんにちわこんばんわ ―― 1
周辺話 ―― 3
天羽月彦 ―― 8
お泊り会センセーション ―― 12
神風しゅうと風間蒼也 ―― 19
聖地巡礼！お好み焼きかげうら ―― 23
神風かなたと三輪秀次 ―― 28
第一次大規模侵攻
永訣の雨　幕開け ―― 32
永訣の雨　浮説のよう。 ―― 35
永訣の雨　覚醒天雨 ―― 40
永訣の雨　マリー・マイドール ―― 44
永訣の雨　終幕（上） ―― 49
永訣の雨　終幕（中） ―― 53
永訣の雨　終幕（下） ―― 57
ボーダーへ行こうよ！トリガーだって持ってるもん。トリオンだって持ってるもん。あ。
ボーダーへ行こう！　準備編 ―― 63
ボーダーへ行こう！　準備編　その2 ―― 72
ボーダーに行こう！　準備編　その3 ―― 75
今日から私は!! ―― 82
今日から私は!!　え…？これ、テンプレのやつですか？ ―― 88
神風しゅうの暗躍 ―― 96

境界防衛機関
入隊式　壱 ―― 100
入隊式　弐 ―― 106
入隊式　参 ―― 112
入隊式　肆 ―― 118
贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ．迅悠一＋中和編　ｉ ―― 125
贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ．迅悠一＋中和編　ii ―― 130
贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ．風間蒼也　ｉ ―― 135
贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ．風間蒼也　ii ―― 140
天の羽衣と弾馬鹿族襲来 ―― 144
パーフェクトって、そっちの道もはいるんですか!? ―― 150
パーフェクトって、そっちの道もはいるんですか!?? ―― 156
「俺、今日から狙撃手になるわ！」「「!?」」 ―― 166
忍田本部長の計略 ―― 175
Ｃ級によらないＣ級のためのエキシビジョンマッチ　① ―― 184
やりたいからやるんだ番外編！：バッ　バッ　バグ　トリガーバク!!! ―― 197

はじまりはじまり
はじめましてこんにちわこんばんわ

彼女の名前は神風みらい。
最近流行りの転生者。
転生した世界は、ワールドトリガー。
彼女は、無双できると思っていた。

自分が前世大好きだった作品へ転生。ありがたいことに、記憶もある。

常日頃ぼやいていた、〝今記憶を持ったまま転生したら、天才として、降臨し、人生イージーモード何じゃないか。娯楽に浸れるのではないか。転生ボーナスで、チートキャラで思いのまま…。

なんて、目がぼっやぼっやで、ひまでひまでしょうがない時のんきにそんなことを思っていた。

でも・・・ 現実問題、赤ちゃん生活は、転生者にはつらいものだ。

あ〝〜。辛。誰だよ。転生したら、天才で無双できるって言ったやつ。Ｂａｂｙ生活辛すぎ。あれだよ。一番つらいのは、首が座らない時。ぐらんぐらんなるし、生後１〜２ヶ月くらいみたいに意識ぼやぼやじゃないし。

「あー（はあぁ〜。しんどい。）。」

にこ。あ。反射微笑。
まあ。こんなつまんないＢａｂｙ期は、スキップしましょう。スキップ。スキップ。
時が流れるのは早いことで。私は、小学３年生になりました。や～。色々あったな～。とにかく、色々あって、前世より英才教育だったのは確か。転生者ってことは、バレてなかったけど、人の子より頭が良いってことは母に感づかれて、恐ろしいことになった。
そして、ですね！なんとですね！転生先の世界がようやくわかったんですよ！５歳くらいに。嗚呼！使ってしまった！倒置法!!!
ふふふ。聞いて驚きなよ・・・。この世界なんと、ワールドトリガーだったのだ。ふえええ!!!だったよね～気づいたときは。嗚呼。また、使ったしまったよ。倒置法。二次元創作で好きになった彼のチャームポイント。そして、転生ボーナスを私はちゃんともらっていた。

トリオン操作

その能力はその名の通り、トリオンを自由自在に操れるという能力。戦闘以外だったら、トリオン能力によるステータス表示。スカウトとかに使えそうな能力である。でも、私は引きこもってたい。や・・・ 隠岐くんとか、イコさん、スカウト組をスカウトしたい…。いや、私人を見る目ないからな…。前世は陽キャは敵。友達贔屓なんて当たり前。そんなんだったからな～。戦闘面はどうだって？まあ。それは、ボーダー入ったときにでもね。追々語りますとも。
キーンコーンカーンコーン。
終了の合図が鳴る。ガタガタザワザワと、皆が帰る。もうそろそろ私も帰りますか。と思い、席から立ち、出入り口に向かう。
きぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!
なっ。なにごとだっ！

周辺話

きぁぁぁぁぁぁ!!!

うっ。ウルサイ。

「みらいっ！」

教室を出た瞬間、私の名前が呼ばれた。

わっぁぁぁぁ…。

黄色い歓声の正体は、２人。片方は…お前か。シスコン(かなたお兄ちゃん)。

「ん！お兄ちゃんって呼ばれた気がする！」

え。キモチワル。数１０メートル離れてるんですけど。声絶対出てないんですけど。エスパーなのか、私の兄は。斉木○雄???それか、サイドエフェクトなんですか？妹過剰溺愛症候群(シスコン)????病気???

「あぁ！今度はけなされた！お兄ちゃん悲しい。」

しょぼんと露骨に悲しい顔をするシスコン。また一つ歓声が起こる。

…。…。…。…。…。

絶句。

シスコンは、崇拝相手と脳内で会話できるようになったのか。私がそんなことを思っていると、隣の男の子が、シスコンに向かってこういった。

「何を言っているんだ。かなた。そりゃ、女兄弟が素晴らしいのは分かるが、流石に気持ち悪いぞ。」

「嫌だ！秀次が辛辣っ！」

秀次、そうフルネームは三輪秀次。ワールドトリガーのネイバー許さないマンである。しかし、そんな彼は、此処にはいない。大規模侵攻が起こる前なので、大好きな姉も生きている状態。流石にそんな中で、闇落ちネイバーバーサーカー状態になってはいない。なっていたとしたら…意味不明である。

原作と異なるところを言われたら、三輪秀次のシスコンが私の兄のせいで、加速したことくらいである。
「みらい~早く来いよ~。お兄ちゃん寂しい~早く帰ろうよ~」
「わかったよ。ちょっとまって。」
教室の方に体を向け、〝彼〟に向かって、さようならをする。
「じゃあね。天羽くん。」
そう。クラスメイトには、あの天羽月彦がいる。
さようならに彼は、ニコッと微笑んで手を振り返してくれた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
帰り道。
右には兄。左には三輪秀次。両方ともまじイケメン。いや~。良い世界に転生したものだ。でも…二人共中身が…残念なんだよな~。だいたい聞こえてくる会話が姉や妹の可愛さしか語ってないんだもの…。いや。分かるよ?前世に可愛い弟がいたからさ?でも…やっぱり…
「本人の前で語らないでくれる????」
「え~。いいじゃん。可愛いものを可愛いって言って、愛でて何が悪いんだよ~みらい~」
「ウルサイ。シスコン。正論言うんじゃない!」
「じゃあ。本人の前でなければいいのか?」
「秀次くん…。いや、そうじゃなくて…。」
「???ならこの思いをどうすれば???」
やばい。バカのせいで…推しが…ポンコツになってる…しょうがない。話題を変えよう。こういう時は、王道のこの質問!
「もぉ…。え~じゃあ、クラスで、気になることかいないの?」
「「は?」」
二人の声がハモった。
そして、その質問をした途端、兄は上を向き、秀次くんと肩を寄せ合い何か話して…なんだ。ムカつくな…秀次くんは、何故か涙目になって、兄と肩を寄せ合っている。ええ~?なんかミスった?まっ!まさか…まさかね…

「秀次くん…まさか…心愛ちゃんが好きなの???」
「「は？」」
本日二度目。えぇ～？また私ミスったこと言ったの？
心愛ちゃん？誰だそれ？と思ったそこの貴方！こk…
「「心愛？誰？」」
「え？知らないの？４年生の転校生マドンナっ！かわいいって、噂だよ？」
「知らないな。」
てか、知らんのかい。まぁ～心愛ちゃんって、転校してそんな経ってないのに悪い噂聞くから、ちょっと不安だったから、良かったけど。
「え～？あ。着いた。じゃね！秀次くん！」
「悪い秀次。みらいは…こういうやつなんだ。鈍さもかわいいだろ？」
「あぁ。あぁ。いや。みらいは…何も悪くないよ。」
???かなたお兄ちゃんどうしたの？鈍い…???なんのこと？」
「帰ろうか。みらい。」
???わけがわからん。

―――――――――――――――――――――

「ただいま～。」
「お帰りなさい～。さっ。早く宿題したら、習い事行ってらっしゃい。後…予習もしっかりすること。そしたら、自由時間だから！」
「「は～い」」
ふう。この世界のお母さんは英才教育だな。まぁ。やることをやったら、自由時間の考えは、嫌いじゃないけど。

…フッ。
小３の宿題など、秒で終わってしまうわ！転生者ボーナスさいっこう!!!早く終わったし、ゲームしよ。かなたお兄ちゃんが羨ましそうに見ている。いや、頑張れば秒でしょうよ。
「みらいっ！今回の宿題は無駄な途中式を書かなきゃいけないんだ！手伝ってくれよ～」

いやいや。そんぐらい自分で…え!?かっ。かなたお兄ちゃんホントに崇拝相手と脳内会話できるように…
「いや、みらい。みらいは顔に出やすいから、推測してるだけだよ。」
「え〟?まじ?そんな顔に出やすい??」
「まじ。」
え…。そんなに?と顔に手を当て、ぶにーとする。ぶにー。

パシャ。シャシャシャ。
「うん。かわいい。」
「何した?シスコン?」
「え?」
「え?」

「え…?」
「ただいまぁ←。」
かなたお兄ちゃんと私の沈黙を破るように帰ってきた、神風家の長男、中学2年神風しゅうだった。
「「おかえり。しゅうお兄いちゃん。」」
「ただーま。お。ゲームしてんじゃん。まぜろっ!そして、今日こそは勝つ!」
「ふふふ。今日も負けフラグを立てたね。しゅうお兄ちゃん。手加減は一切しないよ。」
「望むところだ。みらい。今日こそは絶対に…!あっ!」
「しゅうお兄ちゃん~ゲームじゃなくて勉強教えてよ~」
「ちょっと待て!かなた!あぁ!みらい!それ反則技!!!」
「いやこれ、ガード不能技なだけだから。」
「痛い!」
「いや、しゅうお兄ちゃんは痛くない…。」
「追撃っ!それ!!!ワハハハッ!!!」
「まっ。負けた。」
「じゃあ次は僕…。てえ!?あれ?しゅうお兄ちゃん次僕!!!」

「かなたお兄ちゃん、しゅうお兄ちゃんくらいまた、ストレートで倒しておくよ。」
「え～！それは…見たいけど…しゅうお兄ちゃんっ!!!早く貸して!!!」
「え～え～え…」
「も～。早く～。」
「どっちてもいいから、早く殺りたい。Ｌｖ．９のＣＰとヤろ。」
このバトルは、習い事が終わり、爆速で帰ってきたのが７：００で、しゅうお兄ちゃんの帰宅が７：３０だから…４時間弱ぶっ続けで、プレイしたことになる。
我が神風家はこんな家族です。

天羽月彦

天羽月彦。それが僕の名。
僕の見えている世界は他の人と少し違うようだ。
お母さんに話すとこう言われた。
「月彦。その能力は神様からもらった、月彦だけの大切なプレゼントなのよ。
そして、力あるものには、その力を誰かのために使う責務があり、月彦が、人生
をかけて行わなければならない、任務が伴っているの。
それから、その力は、信頼できるひとだけに話しなさい。無闇やたらに、誰それ
構わず話してはいけません。その力を月彦が知らないうちに悪い方へ使われては絶対にい
けません。
分かりましたか？」
コクコクと、首を動かし、わかったとお母さんに示す。

でも、一回喋ってしまったんだ。ポロッと。

「月彦遊ぼうぜ！」
「いいよ。何して遊ぶ？」
「ええっとね…」
彼とは仲が良かった。僕もだいぶ気を許していたと思うんだ。だから…
「…×
×くんは、きれいな色してるよね。なんか、黄色とオレンジが混ざったような、元気な色してる。」
「???どういうこと???」
「僕はね。その人のほんしつ？みたいな色が分かるんだ。×
×くんはきれいな色してる。」
「ふ～ん。よくわからないけど、嬉しい。ありがとな！」

今なら言えること。幼い頃は皆きれいな色していて、この力についても純粋に受け取ってくれたこと。でも、少し知識が入り、成長すると、〝異端〟は、嫌い排除しようとすること。

「お前。ほんしつ？みたいな色が分かるらしいな。××から聞いた。」

「うん。そうだけど。何？」

「なら、俺が何色か教えろｙ「灰色。つまんない色。」」

「!?」

僕は良くも悪くも素直だった。その時の僕からしてみれば、教えてと言ったことを教えただけだし、まさか、つまんないと言う言葉が蛇足なんて、思いもしなかった。

キーンコーンカーンコーン

タイミングよく授業開始チャイムがなった。

その後の空気は悪かった。不自然に皆が距離を開けているのがわかった。その中に、××くんも入っていた。

仕方ないことだと思った。だって、この能力を喋ったのだから。

どうせ、良かった。つまんない色してる奴となんて、居たくない。

それから、僕はよく一人だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

三年生になった。相変わらず、つまんない色ばっかだった。彼女を見るまでは。

「綺麗…。」

「え？」

初めて見る色。今まで、なんで見逃していたのか不思議なくらいきれいな色だった。

「おーい。おーい。」

なんとも言えない色。虹色？のような…。

「綺麗な色だね」

「おう。不思議ちゃん系なのかな????」

「僕の名前は、天羽月彦。君の名は？」

「わ～。まさかの不思議ちゃんプラスマイペースときたか。小3で、キャラ濃いね～。って、え!?天羽月彦!?え?あの???」
彼女は早口で、僕のことを喋っていた。けなしているのか褒めているのかわからない。
「あっ。ごめん。えっとね…私の名前は、神風みらい。よろしくね。月彦くん。」
「よろしく。みらいちゃん。」
「みらいちゃん!?わあああ。ありがとうございます。わ～やばい。あぁ!私のことは、みらいで、いいよ。」
「わかった。みらい。」
「うん。うん。ありがと。」
キャラが濃いってみらいは言ったけど、みらいも濃いと思う。
「月彦くん。私のこと、綺麗って言ったくれたじゃん。それって、どういう意味?」
「あぁ。僕はね、人の本質的なこと?を色で認識できるんだ。」
そのせいで、皆から距離を置かれてる気がするんだけど…。
「へ～。凄いね!私綺麗な色なのかふふふ。うれし～な～。」
ニヤニヤしてる…。でも、どうせまた…
「ねえ。他の子は?どんな色?あっ。あの子は?あの子、初めて同じクラスになった子でね、初対面の私に、優しくしてくれて、いろんなこと教えてくれたんだ。このクラスで、初めてお友達になった子。」
「ふ～ん。つまんない色。」
「!」
「まじか!え～いい子なのに～?」
「…怒んないの?」
「え?」
「だって、友達をつまんない色だって…。」
「ん～。つまんない色って、月彦くんの捉え方次第だし、つまんないからって、必ず悪いとは、限らないじゃん?つまらないって、面白くなったり、綺麗になったり…ともかく、まだまだ、伸びしろがあるってことだ!って、私は、捉える!」

長い沈黙が続く。

「え…？なんか私悪いこ「みらいは面白いね。」」
「そっか…そんな考え方はなかった。つまんないの伸びしろ…。」
「？？？？」
それから、僕の学校生活は、１８０。変わる。前につまんない色と言ってしまったガキ大将みたいな子にもちゃんとごめんなさいをして…

今日もみらいの隣で、楽しく学校生活を送っている。

お泊り会センセーション

「じゃ。行ってくるわね～」
「「は～い」」
「はっ！後…しゅう、絶対に問題は起こさないように。食事は全てみらいに任せなさい。家のキッチンを壊滅状態にしてはだめよ。かなた、人を呼ぶのは良いけど、節度は守りなさい。そして、きちんと人を呼んでも勉強はすること。最終日にまとめてするのは意味がないから。わかったわね。みらい、貴方も節度はわきまえること。親しい中にも礼儀ありよ。わかった？あと、きちんと、生活リズムを崩さないこと。早寝早起きに努めなさい。しゅう、かなた、みらいを絶対に甘やかすことなく、起こしなさい。３人ともわかったわね？」
わーお。まさかの出発前のマシンガントークをされるとは…そして、内容が心が痛い。
兄弟３人共心が…って顔してます。
ええ。お母さんがいなくなったら楽園だ！と思っていたら…まさかの出発前図星…。
「わかってますよ。いや～。しっかし、相変わらずですね。お母さんの超能力、未来視は。」
「謙遜はよしなさい。しゅう。私のお母さん、あなた達のおばあちゃんの方が私なんて比じゃないくらいすごかったわ。…あら？ふふふ。良い未来が見えた～！帰ってきてから楽しみね!!」
お母さん…。大きなフラグを立てるのはやめてください。あ…行っちゃった…。
「あっ。秀次から返事来てたわ。お邪魔させて頂きまーす。だって、しゅうお兄ちゃん。」
「お～了解～じゃ、お昼ごろ呼ぶか。」
「いや。もう来ていいよって打っちゃった！ぺへぺロ♪」
「は…？」
「あははっ。阿呆だ～かなたお兄ちゃん～。まぁいんじゃない？家

まあまあそこそこ綺麗だし。」
「・・・・・まあいっか。」

神風しゅう。
彼は、放任主義者だった。

ーーーーーーーーーーーーー
数時間後・・・
ぴーんぽんぽんぽん。ぽーーーん。ぽーーーん。

「どうにかならないのか。あのインターホン。明らかに音かおかしいぞ。・・・近所の人から変な目で見られた。」
来てそうそう、文句かね。秀次くん…まぁわからないこともないけど…。
「しゅーじーそんなこと言うなよ～あれお父さん作なんだ。面白いからいいじゃん?」
「そっ。そうなのか。こっ個性的なお父さんだな。」
秀次くん…突っ込むことを諦めたな…。かなたお兄ちゃんって、米屋くんに近いとこあるからな～。やっぱ、真面目くんにはゆる～いのがやって来る運命なのかな…。ご愁傷様です。
心のなかで祈っておきました。
秀次くんがやってきたので、取り敢えず、今日のノルマ分の勉強をすることになりました。
私は知らなかった。まさか…あんなことが起きるなんて…。

サラサラ。カキカキ。
順調に勉強が進んで…進んで…いません。
兄がダル絡みしてきます。ダァル。半崎くんのダル…。ですよ。マジで…。
「「みらい～ゲームしようぜ～」」
「この前、俺をボコボコにしたろ?その借りを今返してやんぜ。」

「ぶざけんな。しゅうお兄ちゃん。凡才の私とド変態のしゅうお兄ちゃんと一緒にしないでくれる？」
「じゃ。僕とはどうだい？みらい～お兄ちゃんにみらいのハメ技見せて～コンボ技みらいなら、５５％の確率で行けるよ～だって…みらいの最近のプレイで、コンボ技、３５０／６００くらいの確率だったろう？ハメ技はみらいの間合いに入って、しまえば、型が決まって、成功確率１００％。大丈夫。みらいなら２回すれば、飲み込みが良いからできるはずだよ。この前、試しに新キャラを使った時、一回はボコボコにしゅうお兄ちゃんにされてしまったけど、２回戦目には逆にボコボコに仕返していたよね。え？なんでそんなことわかるんだって？え～だって、みらいの癖は、プレイのログ２万回は、見たんだもん。そうそう、癖の話しだと、相変わらずの人たらしなんたね。天羽月彦だっけ？ちょーっとみらいとお喋りしただけで、熱い目で僕の生きがいであるみらいを見やがって。それであいつ・・・・以下略。」
・・・・わーこわーいー。シスコンがこわーい。だずげで～秀次エモ～ん!!!!
「しゅ！秀次くん!!!なんか２割増しで、お兄ちゃんが怖いんだけどっ!!!」
「・・・・」
「秀次くん…？」
「しゅ…しゅうさん???」
あれ・・・？まさか…秀次くんバグってます!?
しゅうお兄ちゃんって、秀次くんの前では、いつもカッコつけてたから…？まさかの！処理落ち!?
「しゅう仲間が…。ああ…。」
やばい。家の中が収集つかなくなってきてるよ…。とにかく、兄は一旦放置！軽症の秀次くんを救います！
「ねこだましっ！」
パンッ！と秀次くんの目の前で叩きます！おりゃ！
「しゅうさん…はっ！あ…ありがとう。みらい…正気に戻れたよ。こら、かなた。みらいが困っているぞ。」

コツンと秀次くんが頭を叩くと、永遠のブツブツマシンガントークをしていたかなたお兄ちゃんが正気に戻る。しゅうお兄ちゃんの方を見るとケロッと正気に戻っていた。何なんだ。この阿呆兄達は…。

「も～。ちゃんと勉強するぞ。わかんないことあったら教えてやるから。」

お？どの口が言ってるんだ？阿呆しゅうお兄ちゃん…？お母さんがいなくなって、ネジが飛んだと思ったら、ケロって戻りやがって…。

「はい！しゅうさん!!!」

秀次くん・・・しゅうお兄ちゃんが戻って良かったね。

勉強再開っ！

カキカキ、サラサラ。

「ね～。しゅうお兄ちゃんこの問題なんだけど…。」

質問した問題は、3年生の問題ではない。中学3年生の問題。うちの勉強方針はおかしい。

小1までにほぼ、小学校の内容を終わらせ、小1→中1、小2→中2な感じで、勉強が進んでいき…小学校卒業には、高校の範囲は終わっている。という計算になる。

初めて聞いてときは、絶句した。

転生者の私ならまだしも…勉学的変態天才を量産するきか。

しかし、現実とは

〝凄いやつは凄い〟

のだ！

さっきから残念な部分しか見えて無いこの兄達は、転生者じゃないのにこなしている。

変態デス。

「しゅうさんはすごいですよね！もう高校の範囲ができるなんて！」

「そんなことはないぞ。秀次。や、もっと褒めろ。秀次。俺凄いだろう。」

なんなんだ、アンタ。マジで何なんだ、アンタ。（・ー・）ドヤ～って顔かますんじゃないよ。

「いやでも、みらいの方が凄くない？5歳から8歳まで留学してたから、三年分遅れてるはずなのに、全然中学の範囲余裕でできちゃうんだから。ま。みらい可愛いから当たり前だけど…。」
「いや～。だって、私転生者だ・・・か・・・ら・・・。」
「「え？」」
「いや！あ！ウソウソ！ごめんごめん。」
「・・・やっ。そうだよな！」
「流石に冗談きついよ！みらい！」

「「「・・・」」」

「マジ・・・？」
「・・・黙秘権ありますかね…。」
「いや。無いだろ。」
いっ言ってしまった・・・。いや。ばれるはやくない？もーちょっとあっても良かったよね!?あー!!!私の阿っ呆!!!や…待てよ。最近の医学で、記憶には打撲療法がいいって…。
「・・・」
「まっ。良いんじゃねーの？」
「「!?」」
どっ。どうした！放任主義者！放任主義が過激になったのか？
「まあ。転生者に罪はない。転生してしまったものはしょうがない。小説で転生ってのは、意図してないものが多いしな。」
「放任主義者（しゅうお兄ちゃん）・・・。」
「そっそうですね！しゅうさん！みらいが何者でであろうと、みらいはみらいです！」
「秀次くん・・・。」
「僕も同感。みらいが転生者であろうが、僕の可愛い妹であることには変わりない！」
「シスコン（かなたお兄ちゃん）・・・。」
「3人とも・・・。ありがとう。」

「うんうん。よかったな～みらい。で、一つ確認があるんだが…。」
「何？しゅうお兄ちゃん？」
「死んだ時、前世のご家族は生きていたか？」
「多分、生きてたと思う。」
「・・・そうか。なら言わなくては。俺は毎回転生モノの小説を見て思うんだ。転生した当本人はその世界で生きるので必死だから考えないと思うが、置いていってしまった者の気持ちは？俺は転生に伴うリスクは前世の家族を置いてきてしまうことだと思う。残したもの者は残された、置いていかれた者の気持ちは解かれない。みらいこのことを考えたことはあったか？」
「…なかったかもしれない。」
「みらいに悲しい思いをさせたかったわけじゃない。ただ、こういう考えもある。ということだけ考えてほしかったんだ。そして、転生したからには絶対前世より長生き…みらいに生きてほしい。と俺は、思うよ。」
「わかった。しゅうお兄ちゃん。今世は、生きる。」

「もうそろそろ、ご飯だな！今日は、何食べたい？」
「オムライス。」
「なんでも良いです。」
「肉しか勝たん。」
かなた→秀次くん→私の順番で言いました。方向性的には、オムライスなのかな…？
「じゃあ…方向性的にはオムライスなのかな？てか…しゅうお兄ちゃんが作る気なの…？」
「そうだが・・・？」
「「え!?」」
しゅうお兄ちゃんは、ももかっぱちゃんシステムでゲテモノを作る、ワールドトリガー屈指のゲテモノ創作者、加古望と同レベルの創作者なのだ。

※ももかっぱちゃんシステム：見た目はとても美味しそうなのに、味が壊滅的である料理を指す。

「しゅうお兄ちゃん・・・。お母さんに言われてたでしょ？料理はしちゃ絶対に駄目だって。今日は私が腕によりをかけて振る舞うから。」

「えっ。でも、今日は出来そうな気が・・・。」

「かなたお兄ちゃんっっっ！」

「わかった！しゅうお兄ちゃん！秀次がまだまだ話聞きたいって！しゅうお兄ちゃんのえら～いお話！」

かなたお兄ちゃんグッジョブ！

今回のお泊り会は転生者騒動があったけど、いつもと対応が何一つ変わらなかったので、翌日解散して終わりました。うん。ホントに何もない。風呂の時にちょっと真っ裸の私と秀次くんがばったり会うなんてお約束もあったけど、お泊り会はなんともなく終わりました。

神風しゅうと風間蒼也

俺の名前は、風間蒼也。誕生日９月２４日、星座みかづき座、血液型はＢ型。好きなものは、カツカレーと牛乳・・・え？そういうことじゃない？じゃあ。どういうことなんだ。

え？神風しゅう？

あぁ。

あいつは変態放任主義者だな。

え？もっと真剣に？ふむ。俺としゅうは小学校からの仲で、席が前後ろだったんだ。そこから、腐れ縁ってやつだな。しゅうと初めてあったしゅうの第一声は「こんにちわ。ちびやくん。」だったな。飛び蹴りをしゅうにくらわしてやったな。「はは～。いい飛び蹴りだね～」とかわされてしまったが。

で？次はなんだ。しゅうの性格？あぁ。それこそ、変態放任主義だな。何故変態だと？それはだな…しゅうは優秀な方だろ？それは、しゅうが目に見える成長が好きだからだ。例えば？なんでも良いと思うぞ。自身の身長の成長とか、空手の帯の色が変わるとか。それであいつは、変化をニマニマしながら、２～３時間平気でその結果を見てるぞ。伸び悩んだときは？ずーと四六時中その事を考えて、必ず成長してくるぞ。そこがしゅうのいいところと言えるな。放任主義者のところか？それは、逆に聞くがうちは、何かと生徒会からのアンケートが多いだろ？全てしゅうの発案だ。しゅうは、他人のことを自分で考えたりはあまりしない。他人に委ね、相手の事をそのアンケートから汲み取って、大衆性の高い、皆が納得するような答えを導き出して行動しているからな。後は…大雑把な目標を決めて、良い方に皆を陰ながら誘導しているな。ま。こんなかんじだ。

次はしゅうの好きなものか…これは、本人に聞いたほうが良いんじゃないか？傍から見て？ん～。好きな食べ物は…小籠包だな。好きなことはさっき言った成長だな。後は、ノートを綺麗に書くことなんかがあるな。

しゅうの意外なとこ？あぁ～しゅうは、ああ見えて、結構家族の事

が大好きだな。二人になると、よく兄弟の素晴らしさと可愛さを論理建てて、説明してくる。その時のしゅうは、とっても嬉しそうだな。フッ。

最後に、神風しゅうとは？か？

それは・・・俺の一番大切な親友であり・・・変態放任主義者だな。

ーーーーーーーーーーー

「いや。イイ話じゃん!!!」

「嫌でも！何勝手に話してんだよ！俺の秘密!!!」

「あれ秘密だったのか？」

「この～!!!くそちびや!!!」

「は？」

「はァァァ？」

喧嘩勃発。

・・・ことの発端は、三門市立中学校の校内新聞で、生徒会長であるしゅうお兄ちゃんの事を紹介しようと、新聞部がしゅうお兄ちゃんと1番仲が良い蒼也くんにインタビューをした。そして、発行された新聞の内容がしゅうお兄ちゃん的には恥ずかしい内容だったらしい。いや。でも、言ってることも書いてあることも事実といえば、事実であるのだけれど…。

「だいたい、なんで言ちゃうんだよ！ニマニマしてるとことかさぁ～!!!めちゃくちゃ恥ずかしいじゃん！絶対変人だと思われた～!!!!あ～!!!」

乙女かっ！変態天才も人だったか。

「まぁ。しゅうお兄ちゃん。大丈夫だよ。別にそう変なことじゃないよ！ニマニマしてるとこは、そう大きく書かれてないし、ほらここ。必ず成長してくるとか、良いことのほうが沢山書かれてるよ！」

「そうだぞ。しゅう。みらいの言う通りだ。」

なでなでで。蒼也くんが頭を撫でてくれました。贅沢だな～あの風間さんに頭を！それに、蒼也くん撫でるの上手なんだよな～気持ちいい～って、ありゃ？なんで撫でてくれるのをやめ・・・あ。

「蒼也さん。僕の可愛いみらいに触れるのをやめていただけません

か？」
「？本人も気持ちよさそうだったから良いじゃないか。それよりかなた、そろそろ妹離れしたらどうだ？もう、５年生だろう。」
「大切な妹からそう簡単に離れてなるものですか。僕は離れる気はさらさらありませんよ。それに…悪い虫がついたら大変ですもん。」
目にライトがない状態で二人共喋っている。こっこわい…。いっつもこうなんだよね～二人って。はじめてあった時だって・・・
「こっちが、弟のかなたで、こっちが…って、前あったことあるよな。妹のみらいだよ。蒼也。」
「よろしく。俺は風間蒼也だ。」
「よろしくおねがいします。蒼也さん。初めに言っておきますが、妹は渡しません。あと、僕の可愛いみらいの頭を撫でないでいただけますか？」
「別に本人は嫌がってないから良いだろう。」
「そういう問題ではないです。」
え？私は、どうだったかって？心の中で、めちゃくちゃ喜んでたし、感動してた。緑川さんって、言いたい口を頑張って言わないようにしてたのを必死に堪えてた。～じゃ。とか、一人称がわしになれば・・・いけない。いけない。違う世界線を持ってきてはいけない。
「みらい？何か困ったことはないか？」
は！ポケ～としてたら、蒼也くんに大丈夫か？的なことを言われてしまった。
「特にないよ！そういえば、もうそろそろ受験の時期だけど、やっぱり、蒼也くんは六頴館にするの？まぁ。しゅうお兄ちゃんもそうだけど。」
「そうだな。六頴館を受験する。」
「頑張ってね！蒼也くん！」
「ああ。ありがとう。」
頭をナデナデ。
「あ〜!!!近いです！蒼也さん!!!」

「てかなんで、かなたお兄ちゃんは蒼也くんのこと蒼也さんっていうの？」

聖地巡礼！お好み焼きかげうら

「お好み焼き～お好み焼き～ふふふんふ～ん」

気分爆上がりのみらいちゃん。

５月２０日。今日はみらいちゃんの誕生日。みらいちゃんは、誕生日にお好み焼きを食べたい。と駄々をこね、ワールドトリガーの世界に来たら絶対行きたい人が多いであろう、お好み焼き〝かげうら〟に足を運ぶ事になった。

わ～!!!!お好み焼きかげうらが～!!!!目の前に!!!!あ～元の世界に戻ったら、Ｔｗｉｔｔｅｒに載せたい。来たぞ！かげうら!!!!な感じで!!!!

あ！今年は何もらえるかな？去年はお人形だったからなぁ～。楽しみ～!!!!

テンション爆上がり過ぎて、家族が引いてるよ。でも、かなたは嬉しそうだよ。みらいちゃん。

ーーーーーーーーーーーー

かげうら店内

ドン。

ものすごいでかい何かが刺さった。チクチクとするけれど何故かこしょばゆい。あ～。と頭を掻きながら彼はまた、チッと舌打ちをする。彼は影浦雅人。お好み焼きかげうらの次男坊で、生まれた頃から特殊な能力がある少年。特殊の能力のせいで、ひねくれ者になってしまった彼は、スタスタと歩きお手伝い従業員見習いとして、店に出る。この未だに刺さってくる何かの正体を確かめる為に。

ーーーーーーーーーーーー

店内に入っちゃったよ・・・。わー!!!!アニメで見た通りだ!!!!目がキラキラしちゃうね!!!!

「かわいいな。みらい、何食べる？沢山の種類食べたいなら、僕とシェアしよっか～」

「わ～!!!!良いの？かなたお兄ちゃん！なら、豚肉増量お好み焼きと、３種チーズインお好み焼きがいい！」

「わかったよ～！定員さーん。」

ーーーーーーーーーーー

チクチク。未だに刺さるこしょばゆい忌々しい感情。その正体は、2つ結びの可愛らしい女からだった。チッ。イライラする。何故こんなにもどでかい感情を向けて来るのか、何故それがこんなにもこしょばゆいものなのか。意味がわからない、不明なものにどうしようもない苛立ちが立つ。

そして・・・その原因である女を見ていると、兄（？）だろうか？その人物から恐ろしい殺気の感情が刺さってくる。今にも俺を殺してきそうな勢いである。そんな殺気に耐えながら、俺はオーダーを受け取る。

「ご注文お決まりになりましたでしょうか。」

「はい。～～～～と～～～～ください。」

「了解いたします。ご注文を繰り返します。～～～と～～」

うおっ！近づくと2人から凄い刺さってくる。女の方が尊敬・期待・お腹が空いた等など…ん。よく読み取ったら、女は感情がクソでかいだけで、害はない感情ばかりだ。男の方は、

何見てんだボケぶっ殺すぞ。僕の可愛いみらいを見るんじゃない。

!!!背中が凍るような殺気。何者なんだ。これは、感情か？

「いっ以上でよろしいでしょうか。ご注文頂きありがとうございます。」

まじで、何者なんだ。

ーーーーーーーーー

なんか、カゲ先輩…怯えてた気がする。何故???あんなにボーダーでは、バトルジャンキーで、怖いもの知らずだったのに？根付さんを殴った前科付きの…。

「楽しみだねぇ～。みらい。」

「そうだね!!!かなたお兄ちゃん!!!」

「今日はテンション高いな！みらい。そんなにお好み焼き好きだったのか？」

「うん。私結構好きだよ！しゅうお兄ちゃん。たこ焼きとかたい焼

きとかの粉もの。あっ。ちょっとトイレ行ってくるね！」
あ。トイレタイル式だ。ちょっと古め～でもちゃんと掃除行き届いてて、綺麗～好感度爆上がり!!!
ーーーーーーーーーー
「あ。キャベツ切れてやがる。チッ。店裏に取りに行かなくちゃ行けねーじゃねーか。」
店の保冷室の冷蔵庫へ向かう。そこには、あの二つ結び女がいた。
「あ。こんばんわ。」
「チッ。」
あ〝～。また刺さって来やがる。なんで、尊敬と愛と興味なんだ。兄弟揃って異常じゃねーか。
「やっば。カゲ先輩カッコよ!!!生舌打ちもらっちゃったよ。誰かに刺されないかな・・・。」
「おい。」
「はっ！はい！ナンデショウカ!!」
「お前。さっきから、なんて感情俺にぶつけてんだ！」
「へ？」
「お前。初めて店に来るよな。それに、あったのも今さっきだ。なのに・・・なんで！俺に尊敬とか、愛とかぶつけるんだ!!!」
俺は真っ赤になりながら、初対面の相手に初めて声を張り上げた。
ーーーーーーーーーーーー
たったいへんです。推しに推し愛がバレました。わわわ!!!おっ落ち着きなさい！みらい！推しの照れ顔…。貴方の精神年齢は、今日で１０＋１８で、２８なのよ!!!と同時に推しのショタ…。落ち着くのよ!!!ふ～。今成すべきことは、〝ぶつける〟ということに反応すること。だって、初対面なら、感情受信体のことは知らないはず！
「え…えっと…ぶっぶつけるとは…？」
「はぁ〝？あ〝～。すまねえ。よくわからなかったよな。俺は、何故か人の思ってること…感情が刺さってくるんだ。チッ。ムカつくぜ。」
「はっはぁ～。なかなか苦労してるご様子なんですね。」

「ケッ。で?なんで、あんな感情ぶつけてくんだよ。恐ろしい殺気まで刺さって来やがるし…。」

あ。ちょっと顔が照れてる。尊敬とか愛ぶつけられるの恥ずかしかったのかな?もしや…家族以外でそういうの初めて刺さったのか…?え。そんなに顔がいいのに???

「えっと…それは・・・初めてここのかげうらに来て嬉しかったのと・・・」

まさか、推しに推しを語る日が来るなんて…。

「店に入って、私と大体おんなじような歳の子が居て、店手伝ってるの偉いな~っていう尊敬と・・・」

「と?」

「金色の瞳が綺麗でかっこいいなって。」

「あ゛?」

「だから・・・金色の瞳が綺麗でかっこいいなっていう・・・愛っ!!!」

正確には推し愛ですけど!!!

「はぁ。・・・はぁぁ!?」

犬の遠吠えみたいに響いた。

ーーーーーーーーーー

はぁ?はぁぁぁぁぁあ????意味わかんねえこの二つ結び女!!!

「あっ。あの…ちなみにいっ。いたくないんですか?その…刺さるとか、ぶつけられるの。」

「あ゛?ま~痛…くわねえな。お前のは…なんかこしょばゆいし…。」

「へ~。なら良かったです!」

ニコッと笑う二つ結び女。…クッソったれ。なんか調子狂う…

「おい。二つ結び。お前名前は…「み~ら~い~♡どうして、ずっとこんなところにいるのかな~」」

あ。やべえ。あのヤベぇ奴だ。

「ふっ!二つ結び!?あだ名!?光栄すぎる…。あ。かなたお兄ちゃん!もしかしてもうご飯来た?」

「いや~。まだだけど~で、なんでずぅ~とこんなところに居て、何

してたのかな～？」
「ん？あ～この人と喋ってたの。」
「へぇ～。ふう～ん。」
「うっうっす。」
ゾワァ…。背筋が凍る。怖い。まじなにもんだ？はっ早いことキャベツ持っていって居なくなろう…。
「じゃ。失礼します。」
「いやいや。なんで、行っちゃうの。あ。でも、今は何故か忙しそうだな～あ！そうだ。後で、お喋りしようか。影浦雅人さん。」
「!?」
「お母様から聞きましたよ～影浦さん。明日の学校で集合しましょう。僕からクラスに行きますよ～それじゃあ、みらい行こうか～もうそろそろお好み焼き来るんじゃないかな～」
・・・おっかない奴がこの世に居たもんだ。

そして、そいつに学校で会い、年下だと知って驚いたり、お喋りがめちゃめちゃ怖かったのは、別の話。

神風かなたと三輪秀次

「おはようございます！皆さん！」
「おはよ～ございます！水沼先生っ！」
此処は、三門保育園のみかん組。本をよく読むという教育理念を掲げており、年少になると小学校です行う内容を先取り学習させるというカリキュラムが組まれている少し変わった保育園。そのおかげで評判はよく、三門市の約半数の子供が通っている。

この物語は、神風かなたと三輪秀次の出会いの物語。

「ぼっ僕のなっ名前は…みっみわぁ…しゅうじ。よろしく…。」
「みっ三輪秀次・・・!?あっ。えっあぃ!!!わっ私は、神風みらい。きっ・・・君を助けるから！」
「え？」「は？」

僕の名前は神風かなた。僕は、激怒している。なぜなら、僕も言われたことがない言葉を、三輪秀次というヤローは、初対面でもらっている。悪い虫は取り除いてやらないといけない。心に決めた。
神風みらい。
僕の生きる糧であり、僕の天使的な可愛さを持つ妹。彼女の可愛さを語るには、僕の語彙では、足りず、現代の言葉でも言い表し切れない愛おしさと可愛さを持ち合わせている。そう。僕の妹はかわいい。最近、また敵が増えたというのに、まだ増える気なのか。・・・いや。

当たり前か。だって、僕の可愛い妹だぞ?歳を重ねればみらいのコミュニティの広がる。広がった分だけみらいの可愛さも広がる。そして、僕の敵も増える。自然の摂理なのか・・・ならば、しょうがない。でも、やはりみらいの兄としては・・・以下省略。

※彼は、現在5歳です。

話がずれてしまった。話を戻そう。みらいからあんな素晴らしい言葉が出た原因は、年下の子と仲良くなろうの会（通称ペア活動）である。ぶっちゃけ僕は、みらいのクラスのいちご組以外は、心底どうでもいい。ていうか・・・みらいがいちご組・・・。ヤヴァイ。合いすぎる…!?やっぱり可愛いものは…以下省略。で、そこでついに待望であったみらいが属しているいちご組とのペア活動の日になったのだ。

ペア活動は、最初五歳児3名、四歳児3名でチームを作り、プチ交流会をする。そこで、あの忌々しき三輪秀次とみらいがグループになって喋っていたのだ。そこで最初自己紹介をしていて、三輪秀次と言う名を聞いた瞬間、みらいのあの言葉…冒頭の言葉を言ったのだ。

※彼は、自分のグループの会話を堂々聞き流しながら、他のグループを聞くという小生意気な事をしていますが、現在五歳です。

何故そんな事を言ったか、理解ができないのが苦しい。それに、面倒な視線を感じる。はぁぁぁ。むっ!またみらいが喋り始めた。なっ何!三輪秀次と1対1だと・・・!?むぅ。こりゃ。盗み聞き案件だな。

ーーーーーーーーーーーーーー

僕、三輪秀次は、初対面の年下の女の子に、変わったことを言われ、とても困ってた。それに、僕、初対面の子の会話するの少し苦手だから、困ったことが沢山重なって、プチパニックが起こっていた。それに、気が付いたのか、さっきの女の子…確か神風みらいだっけ?その子が気を使ってくれたらしい。その子と、一対一で、話すことになってしまった。助けて…。お姉ちゃん…。

「さっさっきはごめんね。あんな事言っちゃって。困ったよね。」

「あ。いや・・・大丈夫。」

「・・・秀次くんは好きなものとかあるの？ほら、先生が自己紹介しろって。あ～あの分かれたのは、秀次くん話すのが苦手そうだから、一対一の方がいいかなって思ってそうなってもらったんだけど。」
「…ありがとう。えっと…僕が好きなものは、お姉ちゃんが作ってくれるクッキーとお刺身かな。」
「へえ～！そうなんだ！手作りクッキーって、美味しいよね！私のも大好き！私のことは、みらいって言ってね！」
ニパッ！と笑う。今ちゃんと顔を見た。とっても可愛い。かぁ～と頬が赤くなりそう。
「あ！私はね～・・・」
・・・なんか居心地が良い。無理に喋らなくていいし、僕が喋ろうとすると、ちゃんとニコニコして待ってくれる。初めてあったのに・・・
「みらいっ！もう自由時間だ！一緒に遊ぼうよ～!!!」
はっ！同じ組のかなた君。
ギロっ。
かなた君がとっても怖い。
「あ。かなたお兄ちゃん。もう自由時間？じゃあまたね。秀次くん。」
「じゃ…じゃあね。みらい。」
ーーーーーーーーーーーーーー
そして、翌日。
「ねえ。君。三輪秀次君だっけ？昨日みらいと喋ってたよね。ちょっとお話したいな。」
ニヤッと笑う同学年とは思えぬ、かなた君。
怖いお兄ちゃんがやってきた。

ーー「なんだ～。秀次いいやつじゃん。」ーー

「誤解して悪かったな～」
「いやいや。いいよ。かなた君がみらいちゃんをどれだけ大切にし

てるかわかったよ。僕もお姉ちゃんにそんな感じだから、よく分かる。」
「ありがとな～で、僕のことはかなたって呼べよ。後、ケイゴ？禁止!!!」
「わかった。かなた。」
それから、僕と秀次は、親友になった。
そこから、ずぅーと秀次と一緒にいて、たのしい日々になることを、この時の僕は、まだ知らない。

第一次大規模侵攻
永訣の雨　幕開け

ざーざーざーと、雨が降る。
「行かないで。最上さん、進さん。俺を置いていかないで・・・。」
このワールドトリガーの世界にも慣れてきて、第二の人生を謳歌し、身近にいる推しを愛でていた。
「まったくもう。〝油断大敵〟よ。しっかりしなさいな。
・・・みらいで、出会う人を救済しなさい。」
忘れていたのだ。この世界での、雨の日の意味を。
「助けて!!姉さんが・・・!!姉さんが死んじゃう!!」
ワールドトリガーのキャラの闇落ちの原因である、
第一次大規模侵攻が
「愛してるよ。君に大いなる力を。」
起こることを。
「え?何あれ?」「黒い球体・・?」「何か出てきてる!?」「きぁぁぁぁぁ!!!ばっ化け物!!!」「逃げろ。どこでもいいからにげるんだ!!!!」「ついに来たな。」「うあぁぁぁぁぁ!!!!来るなくるな!!」「貴方だけでも逃げて!!!」「ヤダヤダヤダ。まだ死ねないっ!」「葉子!葉子!葉子!」「あんた。私のギセイになりなさいよ。」「タスケテ。」「くっ食われるぅ〜!!!!」「心を空っぽに。」「あっ足が…足が…」「押すな押すなよっっっっ!!!!」
「あれはなんだ?お父さん、お母さん、かなた、みらいは?皆は?」
「何だこれ!?みらいは無事なのか!?チッ。なんで、僕は、近くに居ないんだっ!」
「あ・・・始まった。始まった・・・!あっ・・・!」
永訣の雨　幕が上がる。

「ふぁ〜おはよ〜。」
今日は、6月×日。梅雨のシーズンだからか、最近雨の日が多い。
雨の日は、私の髪のアホ毛が大変なことになるし、肌がペタペタする

ので、前世から嫌いなものの一つである。まぁ、今は、優秀なお兄ちゃんが整えてくれるんだけどね！めっちゃ楽っ！

「お兄ちゃん～髪やって～って！え！お父さん!?」

「やあみらい～久しぶりに帰ってきたよ～ようやく休みが取れたんだ。おやおや、髪が大変なことになってるね。お兄ちゃんの代わりにお父さんがやってあげよう。」

「やった～ありがと～!!あれ？かなたお兄ちゃんもしゅうお兄ちゃんもいない～どうしたの？」

「しゅうは、高校だよ。かなたは、図書館に行ってる。」

「そっか～。」

私のお父さんは、ＫＡＭＩＫＡＺＥＩＴの社長を務めている。本社が愛知にあり、東京に日本支部本部がある会社のため、そこの２つの間を行き来してる。そのため、大忙し。ＫＡＭＩＫＡＺＥＩＴは、私の母方のＩＴ会社で、結婚前当時優秀な幹部クラスの社員だった、お父さん。お母さんとは、会社と全く関係のないところで知り合い、意気投合。しかし、シスコンのお母さんの弟、おじさんが、お母さんの両親より高い壁となって、２人に立ちはだかった。だが、お父さんの高い交渉能力と、お母さんの説得により（お母さんの説得が９割くらいだったらしい。）二人は結婚した。それで、お父さんの実家がある、三門市に、結婚報告で来たところ、お母さんが気に入ってしまい、そのまま三門市に、永住。それを恨んだおじさんが、お父さんを、色々なところに引っ張りだこにしているらしい。可哀想。でも、おじさんは、いい人。だって、甥っ子姪っ子の私達三兄弟をめちゃめちゃ可愛がってくれる。特に、お母さん似の私には、甘い。なんかアイドルに貢ぐ人みたいである。

「できたよ～みらい～。相変わらずのくせっ毛だよね。ふふ。俺そっくり。」

「・・・。お父さんって・・・ホントに嬉しそうに笑うね～」

「ん？だって、嬉しい時に笑っておかなきゃいけないだろ？その時の感情は、その時にめいいっぱい楽しまなくちゃ。」

「その考え方は私の一緒～性格は、お父さん似だ～」

「嬉しいな～」
「だたいま～え？なにこのお花畑空間」
「？」
お母さんが帰ってきました。こんな平和でほのぼの日常。ずっーと続けばいいのに・・・
ビチビチビチッ!!!
黒いなにかが出現すると、同時に薄暗かっただけの空に蒼鉛色の空が広がり、薄く赤い陰惨な雲が、空を覆う。
最初に異変に気づいたのは、母だった。
「ヤバそうね。早く逃げましょう。」
臆することなく、母は言った。

永訣の雨　浮説のよう。

「ヤバそうね。逃げましょう。」
母は臆することなく言った。
「「うん」」
三人で、飛び出るようにうちを出た。
・・・。絶句ものだ。平和ボケした日本じゃ見ないような、家の崩壊、足がちぎれた、瓦礫に潰された、絶対曲がるはずのない方に曲がった。血、血、血。
それとは、対象的にビュンビュン進んでいく私達三人。あれだ、テストとかの問題で、出る、一定時間ずーと同じ速度で走れる超人Ａくんだ。え？こんな時にふざけるな？いや、シリアスだから、軽減させようと思って～
「あ。行き止まりだね。」
「どうしましょう。」
「はぁ。はぁ。あ・・・始まった。始まった・・・！あっ・・・！」
よく見たら、背後からモールモットが忍び寄ってきていた。あ。ふざけていたからかもしれん。お父さんが終わった・・・。みたいな顔をしている。うん。共感できる。やっぱり、似てるね！私、お父さん似だ。いやそんな事言ってる場合じゃあないんだ。
「みらい。逃げなさい。ここは、私達でなんとかするわ。」
「そうだね。病めるときも健やかなるときも死ぬときも一緒にいるって、誓い合ったからね。死ぬときも君とともに。」
「貴方・・・！」
嘘だろ。この夫婦。こんな絶対絶命の時に惚気けやがった！
でも、ごめん。この状態の攻略法を私は、知っている。舐めんなよ！一体どれだけのワールドトリガーの二次元創作見てきたと思ってるんだ！
「チョット惚気けてるとこ悪いけど、この状況の攻略法を知ってるの。だから、私に任せて！」
「「え？みらい？」」

棒は何かないかな?あっ。あった。
「ふ。モールモッド。私に会ったが運の尽きね。せーのっ!」
ササッと、モールモッドの側に近寄って、棒を使い、テコの原理で…!
ゴロン。
ここで会ったのが運の尽きね。なんて、かっこいいセリフをかましたけれど、やったことは、モールモッドを転がしただけ。ただ。そんだけ。
「ふ~。なんとかなった。てか!お母さんの未来視で見えたんじゃないの?」
「え?あ。バレた?や~でも、お父さんのあの言葉を聞きたくて!」
「はぇ?」
「そうだったのか!なら、いつも言ってくれれば、何回だって君のための言葉を言うのに!」
「いや。あの緊張感で言われることが1番グッと来るのよ!緊急事態で、焦ってる状況の言葉って、真実味が高いじゃない?」
「!そんな事を思わせてしまうくらい、僕は、君に愛を伝えていなかったのかい?すまない。君の為なら、何度でも。愛してるよ。」
「!違うの!ただ…いつもと違うギャップ?を感じたかっただけなの!」
「そうだったのかい?可愛いなぁ~」
「貴方…。」
「君は言ってくれないのかい?」
「へ?」
「ア・イ・シ・テ・ル って。」
「ふぇ~!!!はっ恥ずかしい…。」
「え~言ってくれないのかい~?」
なんだ。このバカップル。娘の前ですることか???此処、一応戦場なんですよ~
ビチビチビチッ!!!
わっ!バカップルのせいかわからないけど、超至近距離で、ゲート

開いたんですけど。
「よっと。おっ！良い値で売れそうな奴だな！」
人型ネイバーだ！んて…
「初めの言葉がそれなんかい！」
突っ込んじゃった…。初めてじゃない？初対面のネイバーに突っ込んだ人。あ。ネイバーもえ？え？わぁ？わぁわぁ…E？ってなってる。よく、某ＳＮＳアプリで見るやつだ。リアルでしてる人はじめて見た。
「はっ！おっお前ら三人!!!よく聞け！「いいです。」」
「!?」
「いやだから…「いいです。」」
「あれでしょ。どうせ、勧誘でしょう？スカウトでしょう??」
「理解があるミデン人だな。」
「へっへっへ。それほどでも。」
「褒めてねーよ!!!」
おお～この会話をネイバーとできるとは・・・やっぱり、おんなじ人なんだな～
「てかっっ!!なんで、俺様を怖がらないんだ!!!」
「だってね～」
転生者でいいネイバーもいるって、ちょこーっと前に身を持って知ってるし～と、思いながら、両親の方を見ると…
「言ってくれないのかい？」
「だってっっっっ！」
「ふふふ。恥ずかしがってる君も最ッ高に可愛いねぇ。」
「／／／／／」
あんたら、まだしてたのか。こら、お父さん。お母さんをいじめない。
「おっお前ら・・・!!!!!」
そう言いながら、ゲートから一歩踏み出す。あ。ゲートって浮いてるんだよ。そんな前も見ないで、一歩踏み出したら…
「ブベフッ!!」

ああ～こけちゃったよ。え？なんでって？こんな辱め…許さぬ。ミデン…!!!うぅ～。いや。全て、貴方が勝手にやったんですけど…。てか、敵地の戦場で、マジ泣き？

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃぁぁぁぁあん!!!」

そっ！それは、鬼○の刃の堕○!!!このネイバーＣＶ沢○みゆき!?ええ声や～と、言うことは、出てくるお兄ちゃんの声は…

「どうしたんだぁ～？」

逢坂○太!?わっ!!声がいい!!!ハ○キューで、虜になったんだよな～もっかい見直すか！や～バーベキューのあのシーン・・・

「おい。弟を泣かしたのは、誰だぁ？」

「勝手に自分で、ドジ踏んで泣きました。」

「あ゛？」

「ホントです！あと、声がいいですね！」

「はぁ？変なやつだな。お前。」

「よく言われません！」

「そーかよ。で、忘れてね―か？今戦争してんだぜ。」

バンッ!!

え？

銃を打ったネイバー。

「「みらい!!」」

グチャッ!!

両親が私の前に立つ。

ビチャ!!

目の前で、両親が打たれ、その返り血が私に降りかかる。

「ふふふあはははは!!!

ざまーねぇーな!!!クソ雑魚ミデン人がよおおおお!!!」

「は？あ゛ぁ？」

バキっ！……カチッ。

私の切れてはいけない所が切れた。

「みっみらい・・・まったくもう。〝油断大敵〟よ。しっかりしなさいな。

・・・みらいで、出会う人を救済しなさい。」

死にかけであるお母さんが喋った。油断大敵…今とっても身に染みるよ。

「愛してるよ。君に大いなる力を。」

お父さん。最後の言葉が愛してるよなんて、イケメンすぎる。

・・・お父さん。大いなる力って何？マジで何？言葉足らずすぎるよ。

サラ～

え？

？個体名：神風由緒と神風史（元忍田史）のブラックトリガー化が始まりました。？

永訣の雨　覚醒天雨

？個体名：神風由緒（かみかぜゆい）と神風史（かみかぜふみ）（元忍田史）のブラックトリガー化が始まりました。？

キーン。

心地の良い声が脳内に響き渡る。

理解したくない。何故言語化されてしまっているのか。あああああ!!!理解したくないっ！脳が理解したくとも心がそれを否定する。あああああああ!!!わからない。わからない。何故両親がブラックトリガー化を知っているのか。私は、知らないことだらけだっ！

？ブラックトリガーの実体化生成中・・・失敗しました。ブラックトリガーの実体化生成中・・・失敗しました。原因不解明。・・・エンドレス（永久）。別の案を採用します。血を媒体に主の髪（マスター）を依代とします。・・・・成功しました。ブラックトリガー生成完了。・・・・!?報告があります。体内バランスの著しい乱れが発生しました。・・・生贄（代償）が必要です。何にしますか??

・・・いやぁ。何にしますか？じゃねえよっっっっ!!!!!は？何なの？え？え？え？・・・・レイセイになった。冷静になった。・・・ならいいや。この悲しみでいい。この悲しみを生贄（捧げ物）にするよ。悲しみからくる怒りのパワーは、計り知れないから。それに…体内バランスの著しい乱れってガイストと同じ状態ってことだ。あ～冷静になって、頭回ってきた。ガイスト状態ってことは、ずっとこのままだと、５分くらいで人生の強制脱出（ベイルアウト）することになるんだろう。そんなのゴメンだ。あー。両親の死によって、チートに柄杓がかかるのか。ああ。あれのおかげで、冷静になったら、人の死が受け入れるようになった。

？悲しみという感情でよろしいんですね??

はい。いいよ。両親がせっかく助けてくれたこの命捨てるわけにもいかない。お母さんが言っていた、みらいで出会う人を救済しなさい。それも叶えなくてはいけないからね。私は、前世から、ママっ子だからね。お母さんの意志は継がなくては。

？了解しました。それでは、悲しみの感情を生贄(代償)に体内バランスの安定を図ります。・・・成功しました。それに伴い、進化が発生しました。演算機能↓思念体へ。トリオン急激上昇・・・？

ねえ。君は誰なの？

？サイドエフェクト最適化・・・私は、思念体です。？

待っまさか…!?て〇すらのあれなのか・・・？

？・・・まあ。そんなとこです。？

!!!!!!まじか。ん～なら最初に…無理は絶対しちゃだめ。約束ね！

??りょ了解しました。？

ならば良し。あ。チート具合は、後で、報告よろしく。今は、やらなくちゃいけないことがあるからね。ふふふ。私は、怒ったらそれなりに怖いらしいから。

？主(マスター)の仰せのままに。？

ーーーーーーーーーーーー

あっありえない。俺はなんて体験をしてるんだ。目の前で、ブラックトリガーらしきものが２つ作られた。そして、そのブラックトリガーは、トリガーにも、物にもならず、少女の髪に融合したように見えた。クソがっ！俺がしたことは、ただ、二人殺しただけ。本国では、当たり前のことをしたまで。敵を殺した。そんだけだ。敵を殺せば英雄…なのに・・・！何故俺は動けないい!!!思考は回っている。なのに体がピクリとも動かない!!は！なんだ?今気付いた。雨が降っているのに晴れている。辺りは薄暗い。でも、殺し損ねた少女のところだけ晴れている。不気味だ。早く逃げる、逃げなければと本能が告げている。少女が目覚める前に!!!

「おはよう。」

あ。俺は、自分の死を覚悟した。少女は、呑気にふわぁ～とあくびを一つこぼす。

「私ね。いつもにこにこしてるの。だってその方が楽しいでしょう?

私ね、今とても怒っているの。だけど、悲しいという感情は残念ながら持ち合わせていないの。それ捨てちゃったから。

あ。未来確定。貴方、人を殺したのよね。なら・・・殺されても仕方ないっていうか、殺される覚悟くらいあるわよね。」

スパッ

え?

解かれない。解せない。俺は、トリオン体のはずだ。なのに、何故換装がもう解けていて、生身で首をチョンパされた。

「ねえ。ネイバーさん知ってる?人が死んでから、７秒は思考ならできるみたいなの。おかしいよねぇ。なんで、換装解けて、死んでるんだろうねぇ～?ふふふ。考えてみなよ。」

解らない。解らない。わからないぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!

プツン。

ーーーーーーーーーーーーー

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ。」

あっ頭が・・・

？副作用ですね。別のものに変更できないか、実験を行います。そして、主(マスター)お疲れさまです。交代いたします。何かしておくことはありますか??

秀次を助けて。お姉さんを救ってあげて。

？了解いたしました。？

プツン。

私の意識も切れた。

ーーーーーーーーーーーーー

シュルシュルと変わる主(マスター)の姿。トリオン色の髪に三編みになっている。目は金色で、服は、赤と黒のゴスロリ。主(マスター)と違うのはツリ目くらいでしょうか。

「今ワタクシは、最高の気分です！主(マスター)!!!」

眠っている主(マスター)、みらい様に向かって語りかける。おや。何やら、ネゴトを仰っていますね。なになに？マリー？ああ。あの人形の名ですね。そう思えば、今の容姿も似ていますね。まさか！ワタクシに名を!!!感服いたしました！

「ふふふあはははは!!!嬉しいです！ワタクシの名は、マリー。マリー・マイドールです!!!」

おっといけない。嬉しい気持ちを収めて、ワタクシは、主(マスター)の願いを叶えなければ！とにかく、三輪秀次の元へ！いざゆかん!!!

永訣の雨　マリー・マイドール

すうすう。寝ている間にもずっと、秀次くんのことを考えていた。夢にまで出てきた。だいじょうぶか・・・フガッ！

ーーーーーーーーーーーーーー

スタッ。

ふう。面倒デス。主のためになるんだとしても・・・いや。逆に捉えましょう。今ワタクシは、実績も信頼も持っていません。ならば!!ここで、証明すれば良いのです！そういうことならば、とばさなくては、いけませんね！

？個体名：三輪秀次の座標検索・・・。発見。トリオンを消費し、三輪秀次の座標まで、飛びます。1・2・3…？

ーーーーーーーーーーーーーーー

「助けて!!姉さんが……!!姉さんが死んじゃう!!」

必死に叫び、誰かに助けを求める。

でも、皆自分の事で、必死で、誰も助けてくれない。さっき通っていった、変な髪の男も、僕を見て何処かへ行ってしまった。やっぱり、他人に縋っちゃだめなん・・・

「ふう。ようやくこれました。あらあら。そちらの女性、死にかけではありませんか。それに、死体も沢山。あ。貴方が、個体名：三輪秀次であってますか？」

「みらい…？・・・そうだよ。ねぇ！助けて!!誰か知らないけど、助けて!!助けてください!!姉さんが……!!優良姉さんが死んじゃう!!」

「貴方なんですね。分かりました。ワタクシは、正確には、みらい様ではありません。でぇ、嘘ついてたら、殺しますよ。はぁ、主より、貴方を救って、助けて。と言う、命が出ています。個体名：三輪秀次。貴方の願いは？」

「・・姉さんを救って。優良姉さんを…助けてください。」

傍から見たらおかしいと僕は思う。名前も知らないちょっと物騒な少女に助けを求めている。でも、姉さんが助かるなら、それでいい。

「分かりました。はぁぁぁあ。個体名：三輪秀次の願いを叶えま

す。」
「トリオンリフレクター　展開。」
フワッと謎のみらい似の少女から中心に目に見えない何かが、広がる。
ガクッと。少女は、下を向いて、止まってしまった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
？個体名：三輪優良の救済最適解検索・・・発見。？
？トリオンリフレクター展開を推奨。承諾しました。実行します。？
この2つを導き出し、トリオンリフレクターを展開した。本来、普通のシールドより頑丈で敵を閉じ込める役割を持つ、トリオンリフレクターだが、今回は、トリオン操作で改造し、魂だけを閉じ込める機能に全振りをし、更に、透明化をさせた。それにより、このトリオンリフレクターの中には、とんでもない数の魂がはいっている。
さあ。この中から、三輪優良の魂を見つけ出す。・・・見つけた。未練だらけのどろどろしい魂の中に、弟を救えたという気持ちで溢れた、清い魂があり、とてもわかり易かった。そうだ。このどろどろしい魂たちを有効活用してやりましょう。この魂たちは、今とても〝生〟に強い未練が有る。有効活用できるでしょう。ふふふ。目的の為ならば手段を選ばない。っていう言葉がありましたね。今にぴったりです。どうせ、死んだ命。普通の人間ならば、扱えないでしょう。ならば、有効活用したって、なんの問題もありませんね。
？個体名：三輪優良の魂を生に未練が有る魂を利用して、本体に統合します。・・・成功しました。トリオンによる、負傷部分の補充を補強を推奨。承諾しました。実行します。脈の正常を確認。体温上昇。強制睡眠・・・様態の安定を確認。？
？成功デス。？
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
すうすうすう。と、寝息が優良姉さんから、聞こえてくる。
「お姉さん。生き返り（？）ましたよ。あ、ぁ～疲れました。これが、疲れるなんですね。文面上より、厄介ですね。」

「助かったの？」
「ええ。助かった。あ〜あ〜疲れました。ホントに…。なんか・・・体が糖分を欲してる！個体名：三輪秀次！何か持ってませんか？」
「え？あ。飴なら…「よこしなさい」」
「はい。」
「あ〜。体にしみるぅ〜これがカラダにシミル・・・新しい発見ばかり！これでまた主（マスター）のお役に立てる判断材料が増えます！」
ニコニコ笑う、僕の恩人。なんか・・・笑った顔は、みらいとすごく似ている。だって、ずっと見てきたあの愛らしい笑顔だ。間違えるはずない。だけど、正確にはみらいでは、ないって、言ってたけど…。
「あの…。」
「なんですか？」
「君は誰なの？僕の恩人さん。」
「…説明が面倒ですが・・・ワタクシは、みらい様の思念体なのです。ワタクシは、元々、ただの自我を持たない演算機能でした。それが、なんやかんやあり…なんやかんやは、みらい様のお口から、お伝えされたほうが良いでしょう？演算機能から、思念体へ進化、まあ。簡単に言えば、自我を持ち始めたのです。なので、ワタクシは、つい先程誕生しましたね。あれですよ、みらい様の二重人格なんかでは、ありません。ワタクシは、みらい様の精神的補佐官なのデス！」
「・・・。」
「？わかったのですか？いや。わからないでしょうね〜ふふふ。主（マスター）とだけの理解・・・ふふふ。」
「・・・」
「なっなんですか。別に良いじゃありませんか！むぅ。」
「あ！思い出しました！姉を助けた代償を、いただかなければ！」
「代償？」
「そうです。願いを叶えるには、何かしらの犠牲とよべる代償が必要でしょう？ふむ、そうですね。じゃあ２つ。一つは、みらい様を守る騎士となること。もう一つは、個体名：三輪秀次。貴方を私の軽ーい支配下に置くこと。いいですね。」

「??」
「理解の悪いことですね。みらい様の騎士になることは、例えば、ワタクシがみらい様を助けることができない場面が多々出てくる可能性があるでしょう?その時にみらい様をサポートしなさい。ということ。支配下に置くことは、そう怖いことでは、ありません。だだ、この先起こりそうな緊急事態に備えて、緊急時のみ、一時的に貴方の体を操作する。ということです。貴方に拒否権はないので、承諾してください。」
「え…?あっはい。」
「血を譲渡します。」
ポタッと血を僕に垂らす。そして心の中で、承諾という。
?承諾確認。血を媒介に、個体名:三輪秀次の役目、みらいの騎士の称号を授与します。さらに、個体名:三輪秀次の精神干渉を行います。脳波周期同期…成功。個体名:三輪秀次の身体操作が可能になりました。?
脳内に流れてくる。ちょっと物騒だけど…良かった。姉さんが生き返った(?)。良かった。
「うぇ?なんで泣いてるんですか?」
「?」
本当だ。泣いてる。ポロポロと流れる温かい涙。ようやく実感して、グッときた。
「嬉しいという感情からの涙ですね。美しいと思います。あ。でも、まだ安心して寝てはだめですよ。まだやることがあるんですから。」
「何をするの?」
「救うと未来、主(マスター)に恩恵をもたらす人を救いにいくのですよ。もう、ワタクシは、だた命令されたことをする演算機能では、ありません!己で考えて、主のために行動しなければ!!なので、ちょっと行ってきます。三輪秀次貴方は、此処で待ちなさい。・・・トリオンリフレクター分解&再構築。簡易ですが、結界っぽいものを作成しました。これで、命の保証はされるでしょう。じゃ。」

「え…はい。頑張って…あ。君の名前は？」
「！よくぞ聞いて聞いてくれました!!!ワタクシの名前は、マリー・マイドール!!!三輪秀次っっっっっ!!!覚えておくのよ!!」
胸を張り、そう宣言する、マリー。よく似てる…。あ。もういなくなった。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
ミッション　コンプリート!!デス!!!
よし。これから、助ける価値のある人を助けにいきますか。
ボーダー関係者１００人くらい助けた。

永訣の雨　終幕（上）

ぐらっ…。

あ。やばい。丁度１００人目でこうなった。胸のボタン、ピコンピコン状態。３分以上動いてますがね・・・！主（マスター）こういうネタ好きですよね。たくさん覚えなければ。

「大丈夫か!!俺の命の恩人!!」

キラッキラしてる…。めちゃめちゃ善のオーラ振りまいてる…。疲れた今は、辛いですね…。

「ダイジョーブです。」

「そうか!それは、良かった!俺は、嵐山准!!君の名は?」

「ワタクシは、名乗るようなものでは、ないです。それでは。」

フッ。ちゃんと、お約束も決めた。

「あ!待ってくれ!!」

シュンッと（キラキラオーラから）逃げるように、三輪秀次の元へ座標移動した。

ーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ。キラッキラオーラにやられて、死ぬとこでした…。」

「何が会ったの・・・?マリーさん・・・。」

「無自覚キラッキラヤローに疲れてるところをクリーンヒットされ、倒れそうでした。マリーさん…なんか嫌ですね。ワタクシのことは、マリーと呼ぶことを許可します。特別ですよ?」

「わかった。マリー。」

「あで・・もうそろそろ・・・体が・・・やばいので・・なんとかして・・あ・・もうそろそろ・・かなた様・が・・来るので・・・よろしく・・・おねが・・・」

ドーン。

マリーがぶっ倒れた。あ。顔がみらいに戻ってる。・・・すやすや寝てる。可愛い。…黒く染まった２つメッシュ入りの髪があどけない顔に目立つ・・・。

パリーンッ!

とりおんりふれくたー?が割れた音がした。
「あっ!秀次!無事だったか!!」
「あ。かなた!かなたも無事か!良かった。」
「もってことは、みらいは…無事なんだな。」
「うん。ついさっきまで起きてたけど、プツンって切れちゃった。この通り。寝てるよ。」
「そっか。そうか。あれ?髪が?でも、・・・はぁぁ本当に良かった。・・・秀次が助けてくれたのか?」
「違う。逆にぼっ…俺は、助けられたんだ。」
「?どういうことだ???」
「詳しくは、みらいしか知らないからな…目覚めたら聞こう。」
「そうか。まず、安全な所へ移動が最優先だな。僕は、みらいを。秀次は、お姉さんを。」
「うん。」

ーーーーーーーーーーーー

?み~ら~い~さ~ま~?
むにゃむにゃ。
?お~き~て~く~だ~さ~い~!!?
はぁ~い~・・・後、5分…5分だけ…そして…それは…トトロ…だ…な…。前世で…友達に…よくやってた…。
?お~き~て~く~だ~さ~い~?
むむむ~何故起きなければ、ならぬ!!何もしてないのに体痛いし、疲れてるんだぞ~私を癒せ~
?あ。いや。なんでもないですよ?みらい様の体になってはしゃいじゃったとかでは、全く無いですよ??
それ、全部言ってるじゃん。イコさんじゃん。出オチ。
?そんなことは、置いといてですね、主(マスター)。?
そんなことぉ~?絶対ちゃうよな!!置いてけない案件じゃないよね!!
?主(マスター)のためデス!!主(マスター)のために行ったので、問題なしです!それで!それで!そんーなことより!!トリオン能力の統合や、整理が終わり

ました！マッハで終わらせました!!!?
うん。うっうん。わぁかった。わーかった。見せて。チート具合を見せ給え!!
？はい！今、表示します!!?

個体名：神風みらい（１２歳現在）
トリオン：∞（ＭＡＸ　１５０）
攻撃：??　↓トリガー使わずに攻撃したので、判定不可。
防御・援護：??　↓したことがないので、判定不可。
機動：??　↓瞬間移動はどうなるのでしょう、判定不可。
技術：??　↓トリオン操作の技術は、最高峰ですが…？判定不可。
射程：??　↓座標検索で、何処までもいけます！何処までもとんでいきます！判定不可っ！
指揮：??　↓これまた、してないので、判定不可。
特殊戦術：??　↓トリガー使わない戦闘や、瞬間移動など特殊な戦術しか使ってません。判定不可。
サイドエフェクト：トリオン操作
↓トリオンを自由自在に操ることができる。使い方沢山。ＥＸ：ステータス確認等。
⇒代償）糖分多量摂取
未来予知　《神風由緒からの恩恵》（※家系能力ともいえるため、サイドエフェクトか怪しい）
↓確定した未来を見ることができる。
⇒代償）特になし。
超六感感覚　《神風史からの恩恵》
↓勘がとてもいい。そのため、瞬発力がすごい。
⇒代償）頭痛がくる。
ブラックトリガー：創造　《神風史のブラックトリガー》
↓トリガーの改造や新しい技を作ることができます。トリオン操作と合わせることにより、より、複雑な技や改

造が可能になりました。

破壊《神風由緒のブラックトリガー》

↓トリオンを含むものならなんでも破壊ができる。

・・・・わぁお。

永訣の雨　終幕（中）

ふぁぁぁあ・・・。すっすごい・・・。どこぞのラノベの異世界転生人か・・・？

トリオン∞って・・・小学生ですか～????

？正確には、無限ではありません。１５０しか、貯められませんしね！でも、トリオン操作にて、即座に補充ができるから、無限って言うことですね!!流石、主(マスター)です!!?

はあああ。お父さんの大いなる力って・・・大いなる力すぎるでしょう・・・。

？そうですね！主(マスター)!!そして、主(マスター)!!ワタクシのことを名付けしてくださったことは、覚えていらしゃるでしょうか??

なんのこと??

？ふぇ？嘘でしょう??え??ワタクシの名、マリー・マイドール!!?

とっっっっ!!!

そんなことあった？まぁ。でも…いい名前なんじゃない？

？そうですか!!主(マスター)!!なんか、適当にあしらわれた気がしますが・・！ありがとうございます!!?

うん。イイと思う！・・・！ちょ待って・・・あれじゃん。俺のサイドエフェクトとブラックトリガーの相性が良すぎるんだ。が言えちゃう・・・！えええ。いつ言おうかな～!!あ！ボーダー!!いつ入ろう!!誰と同期が良いかな～？まず、かなたお兄ちゃんが許してくれるかな？入れたら、パーフェクトオールラウンダーに・・・

？（主(マスター)・・・しゅう様とかなた様に何があったか伝えることを故意に避けようとしていらっしゃる？これ、あれなんじゃないんですか？そういう事を伝える作戦会議んなのでは??そのために起こしたんですよ!!頼ってもらえると・・・でもなんか・・・雰囲気が・・・）？

ランク戦の戦術とか・・！根付さんと鬼怒田さんとか・・・迅さんとか!!推しに会える・・・！そっか！そうだよね！えへ！えへへ・・・・・・。・・・やだな。怖い。・・・悲しいってより、嫌で、怖い気持ちが勝つんだ。あの事を伝えるってなると、嫌なんだ。どう

思われるかな？不安で。本当なら、悲しみから、そんなことも考えないはずなんだ。これは、悲しいを捨てた代償なのかな？そのせいにしていいかな・・・？

？主（マスター）・・・。（どうしたら良いんでしょう？大体はっきり言った方がその人のためには、なります。でも・・！主（マスター）の心は？気持ちへの配慮は？どうしたら！嗚呼！解らない！・・・だから、はっきり言う方は、迷うのでしょうか？言うべきだけれど、言わないほうが、言った相手は、傷つかずにすむ。でも、それでは、前には、絶対進めない。）？

わかってるんだ。あの時と一緒。両親が目の前で死んだ時。そう・・・あの時。脳では、理解してるんだ。でもっ・・・！心が・・・分かりたくないんだ。理解したくない。って、拒絶する。そのことに私は、何も思わない。思えないんだ。嫌だなぁ～。悲しみというたった一つの感情がなくなっただけで、こんなにも人間味って消えちゃうの？これも、悲しみを伴わない、ただの疑問。悲しみが発生するのは、わかるけど・・・わかるだけなんだ。本来ならって、そう思うだけ。はは。あはは。笑えてくるね。

？（やばい。駄目です。そっちに主（マスター）が言ってしまえば、しゅう様もかなた様も、そちらへ堕ちる！今、絶対に避けなければいけない!!）

主（マスター）・・・。!?何者かの侵入を察知しました。抵抗・・・失敗しました。・・・エンドレス。抵抗不可。抵抗不可。？

え？マリー??どうしたの??

『阿っ呆！みらい!!!なぁんぃ落ち込んでんの!!』

ふぇ？えっ！おっお母さん??

『そうよ！貴方の第二のお母様っ！

なに、沈んでんのよ！たぁく。そんなんで、私が残した遺言を達成できるの？貴方が闇落ちしちゃあ、救うものも救えないでしょうがっ！

言っておくけど、私の辞書に〝後悔〟の2文字は、ないわ。それは、あの人も同じ。

で？貴方のすることは？何？私は、貴方に何を遺したの？』

大いなる力と未来予知の力。そして、未来で、合う人の救済。その

ために、ちゃんと話すこと。・・・知ってたんだね。私が転生者だってこと。

『うん。知ってた。舐めんじゃないわよ！未来視の能力者。他人への干渉なんて、ちょちょいのちょいなのよ！

それに、わかってるじゃない。貴方が今何をすべきか。

見てるわ。あの人と一緒に。楽しませてちょうだい。私の愛しい娘・・・・愛してるわ。』

？主（マスター）！主（マスター）！大丈夫でしたか？急なエラー的な事が起こって、ワタクシ大パニックでした!?

大丈夫だったよ。もう。大丈夫。

??（？主（マスター）の雰囲気が良く？）？

心配かけてごめん。もう、私は大丈夫。

（両親から最後の時に愛してるをもらうなんて贅沢な第二の人生だな・・・。）

私、ちゃんと話すよ。二人なら大丈夫。もし駄目でも、救済するし、私は、独りじゃない。マリーがいるから。無敵だよ！

？マ〝ズダ〜!!!!分かりました！心象世界から、出ていかれるのですね！・・・主（マスター）が、心象世界から、退出いたしました。？

きれいな声で、響く。

？主（マスター）。いつでも、いらしてください。ワタクシは、いつでも待っています。いつでも、主（マスター）の味方です。ワタクシは、主のモノ。・・・・主（マスター）と共に。主の仰せのままに。？

スッーと目覚めていく。

さぁ。私のするべきことをしよう。

永訣の雨　終幕（下）

シアトリカルに。
この物語は、ようやくスタートラインを踏み込んだ。

スッーと目覚める。
体が痛くない。あれ？こういうのって痛いもんじゃないの？
「あっ！みらいが起きた！しゅうお兄ちゃんっ！秀次！起きたよ!!!」
目の前がまだ、ぽや～っとするが、なんとなく、目の下が黒いかなたお兄ちゃんが私に抱きついている。
「おお！みらい！起きたんだね！おはよう。ここは、救護テントだよ。案外起きるのが早かったね。」
「起きたか！みらい！良かった…。」
あ。しゅうおにいちゃん…。秀次くん。しゅうコンビ・・・。
ん？案外早かった？ん？どういう・・・？
「え？しゅうお兄ちゃん。私、何日寝てた？」
「ん？一日だよ？」
・・・・い？ち？に？ち？・・・・え？大体、何日も眠るもんでしょ!?オッサムだって、一週間も寝てたんだよ？私・・・色々あったよ・・・？体の中にブラックトリガーできて・・・？サイドエフェクトもなんか3つになって・・？チートに柄杓がかかって・・・？えええええ???んんん～。まぁ。終わってしまったことは、しょうがない。私には、することがある。
「・・・ねえ。しゅうお兄ちゃん、かなたお兄ちゃん、秀次くん。お話があるの。」
私は、話した。
「その時、私が油断してて、そこに、お父さんとお母さんが、かばって・・・それから・・・」

全部。後悔しないように。
「で、お母さんとお父さんがこの黒いメッシュ髪になって・・・」
話していてもなお、悲しみの感情が湧き上がらない自分に嫌気が差しながら、
「そこで、バランスが悪い問題が起こって、そのために・・・」
ありのまま。包み隠さず。
「それで、お姉さんを救って、後は、限界まで人助けを・・・」
自分自身がするべきだと思うことを。

・・・・。
お通夜のようなシーンとした空気が流れる。うううこの空気好きじゃないな・・・。耐えられない。
「そうか。わかった。取り敢えず今は、みらいが無事で本当に良かった。」
意外にもこの重苦しい沈黙を破ったのは、かなたお兄ちゃんだった。
「そうだね。本当に良かった。」
「ああ。」
二人もあとに続く。
「みらいは、もう少し寝ていなさい。俺たちは・・・俺は、少し一人になりたい。それでいいか？」
「「うん。」」
「あ。秀次くん、お姉さんまだ、目覚めてない？」
「うん。」
「だよね。良かった。マリー曰く、一週間くらい寝たままらしいの。逆に、起きたらそれは・・・何かしらの障害が残るって。」
「わかった。・・・みらい。本当に姉さんを救ってくれてありがとう。」
「助けたのは、マリーだよ。」
「ううん。違うよ。みらいだよ。マリーが言ってたから、主の命だって。ってことは、みらいが言わなかったらやってないって、捉え

られる。だからね、みらいのおかげなんだよ。今は、休んでね。みらい。」
「うん。」
うん。取り敢えず。寝ましょう。スースースー。
ーーーーーーーーーーーーーー
スースースー。・・・・はっ!!せかいいちのぱーふぇくとおーるらうんだーにおれはなる!むにゃむにゃ・・・。スースースー。チョコ・・・チョコ・・・
「相変わらず、良く寝るなぁ～。みらいは。ふふふ。かーわい。まだ寝かせてあげたいけど・・・起きて～みらい～」
スースースー。ぼーだー・・・おしかつ・・・むにゃむにゃ・・・。
「ボーダー・・・。なんでみらいが・・・。って、起こさなきゃ。みらい～起きて～」
むにゃむにゃ・・・。はっ!!!
「はっ!!!!ん～?何?誰～?どしたの～?」
「ま～だ。寝ぼけてる・・・。起きてみらい。しゅうだよ。」
「んん～?あ～しゅうお兄ちゃんだ～どうしたの～?」
「ようやく、起きたね～あれから、3?4?日くらい経ってるんだよ～。そしてね、みらい。今から、少し大切な話をしたい。」
「え?そんなに寝てたの???あ。うん。わかった。」
「うん。でね、端的に言うと、俺は、ボーダーに入ることになった。」
「ん?」
「あれ?ボーダーなんかあたっけ?って顔してるぞ。みらいが寝ている間に記者会見があったんだ。まぁ。俺は前から知ってたけど。蒼也伝だけど。」
「あ。そうだったんだ。じゃあ、大規模侵攻の時は・・・?やっぱり?」
「多分みらいの予想通り、ボーダーで、ちょっと手伝ってた。」
「そっか。まぁ。しゅうお兄ちゃんが無事なら何でもいいよ。」
「ありがとう。まぁボーダーに入るって決めるまで、なんやかんやあったんだけど・・・今からは、その事を話すよ。よく聞いて。」

「はい！」
「良い返事だね。まずね・・・みらいが起きて、俺は一人で今後のことを考えてたんだ。そしたら・・・」
しゅうお兄ちゃんの話を要約するとこうだ。
・しゅうお兄ちゃんが考え事してる。
←
・叔父さんから、電話がかかってきる。
←
・三門が危ないから、名古屋に帰っておいでと言われる。
←
・三門市に俺は、ボーダーに入りたいから、残りたいと言う。
←
・当たり前の如く、反対される。
←
・話し合いで解決しないので、強制的に電話をブッチした。
以上！
「・・・・え？普通に不味くない？ってか、そんな状況でボーダー入るってよく決めれたな!!!」
兄に向かって何という口の聞き方か。と言いたくなるような乱暴な口調になってしまった。結構一人だとこの口調になってしまうのだが・・・。
「まった。そんな状況で3日4日スルーしたの????え？叔父さん乗り込んできそうじゃん。阿呆なん???いつものかっこいいお兄ちゃんは何処へ行ったの??」
「ははは。電話ブッチした日からかな？多分叔父さんの休憩時間中であろう時間、着信音が止まらないんだ。」
「いやっ！ははは。じゃないじゃん！・・・で、私にどうしてほしいの？」
「さっすが、みらい～わかってる～。叔父さんがみらいにゲロ甘なのは、周知の事実だ。」
「え？そうだったの？」

「うん。そう。みらい、気付いてなかったの？ええ～？まっ、だから・・・」
「私が、叔父さんを説得するってことね？ふ～ん。まぁ。わかった。それに・・・私が何か策が有るって気付いてるんでしょ？」
「ふーふーふー。」
「謎のドラえもん・・・。はいはい。わかった。やりますよ～。次何かコールあったら、すぐ来て。」
「りょーかい。」
ーーーーーーーーー
「みらい～!!!!きた～!!」
「はーい。もしもし～？叔父さん？」
？あっ!!!!しゅ～う～!!ようやく出たって！って！みらい!?どうして？あ！体調は大丈夫???
「あ～。叔父さん落ち着いて。私は、大丈夫だから。」
？そっか。よかった。叔父さん心配してたんだからな～??
「ごめんね。叔父さん。あのね、私もボーダーに？駄目？はやっっ!!」
？何言ってるんだ！みらい！そんなに可愛い可愛いみらいが危険な場所に行くなんて！叔父さん許さないぞ!?
「いや、でも～！」
？しゅうもかなたもだ!!自ら危険な場所に行くなんて!!それに…姉さんに任されたんだ。姉さんの大切な大切な子をな守らないと!!?
「叔父さん・・・。でもね、私お母さんに言われたの、未来で会う人を救済しなさいって。だから、ボーダーに入りたいの。」
？うううう～んんん。でも・・・？
「おねがいっ!!!!」
？うっっっ!!!!
説明しよう!!!!叔父たんは、みらいのおねがいにくそ弱い！弱すぎる！のだ！
？なっなら・・・「それに、叔父さんにもメリットあるよ？」話を聞いて！みらい!?

「しゅうお兄ちゃんのお友達ボーダーの上層部と仲が良い友だちがいるの。その子経由で、支援金の伝ができるよ。」
？・・・困ってたけど…！国内への何か支援金しないと批判がやばいから困ってたけど!!!そんな事で、みらい達を売りたくないよう!!?
「ね！おねがい!!!」
？・・・わかった。降参だよ。そこまで、策を練っていては、何も言えないねぇ～。それに・・・姉さんの意思が1番効いたよ～そう言われちゃあ何も僕は言えないからな～でも！みらいがボーダーに入ることは、かなたと要相談だからな！わかった!!?
「はっはい。？」

これにて、第一次大規模侵攻終幕!!!

ボーダーへ行こうよ！トリガーだって持ってるもん。
トリオンだって持ってるもん。あ。
ボーダーへ行こう！　準備編

「みらい・・・審議の結果・・・ボーダーに入ってもいいが・・・」
「・・・いいが？」
「・・・男装しなさい。」
「は？」
ーーーーーーーーーーー
???何を言っているんだろう・・・？これこそ、あれか！はにゃ？ってやつか！いや・・・気持ち的には、は？なんだが…。
「え？ｄｙｋｔ???」
「ん～。そのまんまの意味なんだけど、ん～。説明しなきゃ駄目？」
「可愛く言っても駄目！ちゃーんと説明して!!!」

「その説明！僕が引き受けよう！」

携帯から、ビデオ通話を使い、しっかり顔が見えた状態で、マジむかつく顔でそう言い放った・・・叔父がいた。

「ん～？むくれてるみらいの顔も可愛いな～。姉さんそっくり～!!」
「む～!!じゃなくて！何故男装しなければならんのだ!!」
？それはだね・・・ボーダーってのは、境界防衛機関…戦争するってことだ。そんな場所にみらい達を送り出すのめちゃ嫌なんだよ？だけど…どうしてもって言うから・・・ん～まぁ。戦争するってことにおいて、〝女〟ということは、大変な重荷になる。女というだけで、もしかしたら…人質にされたり、舐められたりするかもしれない。そんなことは絶対にあってはいけない・・・。それに・・・ボーダーはどちらかといえば、軍事系に当たる。軍事系は、大体男ばっかだ！そ

んなとこに…可愛い可愛いみらいおけない！をということなのだよ!?
「はぁぁ～？」
？絶対納得してないな！も～!!叔父さん怒っちゃうぞ!!?
「ん～。まあ良いや。わかったよ。男装に別に抵抗があるわけがないし。」
？わ～なんで、抵抗ないのか気になる～。？
「ふーふーふー。」
急なドラえもん～ぼかすぜ～
「まっ。みらいそういうことになるからね！じゃね～叔父さん～ポチッとな。」
？あああ～？
ピロン。
「はい。じゃ、話は父方のやんちゃボーイ真史叔父さんの方に通しておくから～。」
「はーい。」
「その関係で、ボーダー入隊時期がちょうど皆ずれる気がするんだよな～蒼也と入隊する俺。秀次と入隊するかなた。で、その後入隊する、みらい。二人共の入隊式バッチリお兄ちゃん見るからな～」
「ええ～。別にいいよ。」
「冷たいこと言うなよ～かなた～。」
「ちょうど、皆ずれるかもしれないんだね。そっか。お兄ちゃん達はボーダーの先輩だね！」
「そうだぞ～!!みらい!!一足先に入隊したお兄ちゃんを頼ってな～!!」
「かなた・・・俺とみらいで温度差ひどくない!?」
「気のせいじゃない？」
ーーーーーーーーー
数日後・・・
「みらい～明日、ボーダーに来てくれない？」
「え？」

「打ち合わせだよ～真史叔父さんには、話は通したからボーダーに入るために色々ね！例えば、トリガーを換装してみて、見た目を変えるためにとかね！そのためにエンジニアのマニュアル昨日全部覚えたから～大丈夫。ふぁ～。眠い・・・。」
「そうなんだ～了解!!」
「いいとこのお土産も持ってかなきゃね～」

ーーーーーーーーーー

翌日
「みらい。ようこそ。まだ、全然人がいないけど、ここが、境界防衛機関、ボーダーだよ。」
・・・ようやく来た。この世界に転生して、早１２年。そして、原作まで、４年。まだ、私は、入っていないけれど、ようやくこの世界のスタートに立ったと言えよう。・・・なんて、かっこいいことを言っているが・・・
ジーン。
超感動ものだよ～!!!夢にまで見たボーダー本部。初期だからかまだ、原作みたいではないけど・・・ぼーだーほんぶっ！
「さ。みらい。こっちだよ。」
＝　トリガー認証　＝
「さっ。みらいこっちへ。まだ少ないけど、他の入隊生に見つかったらめんどいからね。それに、みらいって可愛いから目立つと覚えられちゃうよ。」
「や・・・。別に私可愛くないよ。」
「まあまあ。取り敢えずこっちこっち～。」
私はボーダーの中に入り、会議室？的なところにまずは入った。
「久しぶりだな。みらい！」
「あっ！真史叔父さん!!!」
「私は嬉しいぞ～みらいがボーダーに入ってくれるなんて！」
「お母さんの方の叔父さんには大反対されたけどね。」
「私もその気持ちは大いにわかる。可愛い可愛いみらいに戦場に立

たせるなんて…。私だって本当は嫌だよ。だけど…みらいがそれを望むなら、私は応援するしかないからな～。こんな事かなたに言ったら激怒されそうだけど・・・。」
「ははは。もう!皆過保護なんだから…。」
「まあまあ。積もる話もあるかもだけど、トリガー調整初めますよ～鬼怒田さんが待ってますから～。」
「はーい。」
会議室から、研究室のラボのような場所に移動した。まだ、建設途中と言う感じの内装でそんな時のボーダーを見れるなんて貴重だな～とまたジーンとなった。
「遅いぞ!しゅう!!」
「ごめんごめん。鬼怒田さん。」
「まったく・・・。昨日トリオン体のいじり方を教えてくれって頼みよって!わしをなんだと思っとる!?開発室は、便利屋じゃないんだぞ!」
「遅くなって、ごめんって～。また、システム作るの手伝うから～それに・・・いいとこのお土産。ほら、みらい。」
「あっこんにちわ。これ…つまらないものですが、どっどうぞ。」
「ああ。ありがと・・・!?」

「・・・・・」

「この子か!例のみらいって子は!すっすごいな綺麗というか・・・。あっ。こんな事言ったらセクハラか?」
「そうだよ～俺の妹～鬼怒田さん大丈夫。セクハラではないと思うよ。」
「かわいいだろう!鬼怒田開発室長!自慢のかわいい姪っ子だ!」
「真史叔父さん恥ずかしいよ・・・!もう!早くトリガー調整しようよ!」
（かわいい・・・!）
三人の心の声がハモった。

「鬼怒田開発室長っ！少しよろしいですか！」
「なんじゃ！すまんな。しゅう。みらいちゃん。わしは少し席を外すぞい。」
「忍田本部長！緊急の確認をお願いしたいのですが!!」
「わかった。行こう。すまない。私も席を外すよ。本当は、立ち会いたかったのだが。」
「皆忙しいみたいだね。」
「そうだね～つくりたての組織だから～じゃあ、気を取り直して、トリガー換装してみようか！」
「うん。　トリガーオンッ！」
＝　トリガー認証　スキャン　トリオン体生成　トリガー機動
＝
下から上へトリオン体に換装されていく。そして、鏡を見ると白髪に双方に黒のメッシュが入った女の子がいた。
「!?」
「しゅうお兄ちゃん。これどういう事？」
本来の私の髪は、クリーム焦げ茶色のはずだ。お母さんそっくりのミルキーな感じの髪だったのに。
「ん～。おかしいな。今は、何もいじってないはずだから・・・とにかく後でちょっと調べるね。それに、みらいの体については、あの子に聞いたほうが良い。今は、調整を急ごう。」
「はーい。」
「じゃあ、何処をイジる？髪？身長？取り敢えず、見た目を男の子っぽくするね～。」
「はーい。もうよくわかんないから、お兄ちゃんに任せる。」
「了解～！」
「よ～し。頑張っちゃうぞ～。まずは、髪。白髪はそのままで、短くして、目はそのままで良し。胸はぺったんこに。体型は変わると戦闘に影響しちゃうから・・・めんどいな。そのままにしよう。身長も同様に変えず、声も男らしいみらいの声なんて聞きたくないからそのまま。うん。こんな感じ。」

「そんな変わってなくない？」
「まぁ。髪の色と性別変わったらバレないでしょ。大丈夫大丈夫～。」
「はぁ。」
「信頼してないな～。バレたらバレたでなんとでもなるよ～最悪、記憶処理しちゃえばいい。」
・・・・。
なんか、不穏なことが聞こえたような・・・。
・・・。それに、忘れてた！しゅうお兄ちゃんって、放任主義者だった!!!
「次は、打ち合わせいくよ～!!!年齢はどうする？」
「一つ上の設定にする。」
「了解～。じゃあ、間柄は？」
「それは・・・」
こんな感じでゆるっと決まった男装設定。
名前：風神ライ
性別：男
間柄：神風家の少し遠い親戚
年齢：１３歳（実際現在年齢：１２歳）
学校：六頴館中等学校、中等部１年生、通信教育科
「ふむふむ。こんな感じじゃない？」
「いいね。では…偽りのことをするには、それなりに仕掛け人がいるよ。誰にする？まぁ。俺とかなたはもう知ってるから、前提絶対条件として・・・後は？」
「んん～取り敢えず秀次くんと蒼也くんは、確定じゃない？私の事よく知ってるし、口固そうだし、フォロー役は、家族意外にも絶対いるから。そして、それからは、ん～。私が信頼できる人には喋るかな。別にバレたら終わりってわけじゃないし。こっちが都合よくするための設定なだけだから。」
「そうだね～。じゃあみらい。上層部の人間は？」
「いや。そこは、伝えるでしょ。こういう人間がいることは、組織側

は理解していたほうがフォロー役に回ってくれたり、組織的にも把握しておいたほうが良いから言うよ～。それに、もう真史叔父さんと鬼怒田さんは知ってるわけだし。それに、母方の叔父さんの方の約束で用意してもらった、ボーダー的メリットもあるからね。」

「流石みらいだねぇ～。よ～く考えてる。こんな素晴らしい妹を持ったが故に俺は、放任主義者になってしまったんだな～。」

「・・・・」

「ゴホンッ。では・・・・

入隊準備期間ですることをしよっか！」

「!!!

!!」

「それは・・・トリガーについてだったり、トリオン量を測ったりするよ～!!事前の体力検査なんかは、スカウトの形で入ったから、みらいはスキップされるからね。」

「お～ついに!!」

わくわくっ！

「みらい、目が輝いてるね～!それでは、しゅうおにいちゃんのよくわかるボーダー説明～」

「わ～。」

「それでは、行こう！

これが、トリガーホルダー。中は、こんな感じ。トリガーの集積回路がある。ここにトリオンチップを入れる様になってる。トリオンチップは、８種類入れれるようになっているよ～。

それでは、各種トリガー。

・攻撃手のトリガー：弧月　攻撃力が馬鹿強い！耐久力ある。しかし、強い代償か…とても重い。

今俺が使ってるトリガーだ。真史叔父さんが師匠でな。これが超ースパルタ。弧月がモノにできたら、みらいにも教えてやんよ！重さは…慣れれば重くない。トリオン体だし・・・大丈夫だ。多分。

・銃手のトリガー：アステロイド〔普通弾〕　応用がすごくきくと言われている、玉トリガー。弾速の調整ができる！

ハウンド〔誘導弾〕　目標の自動追尾ができ

る！トリオン反応を追う、「探知誘導」と、視覚による、より正確に追尾する「視覚誘導」がある！

バイパー〔変化弾〕　弾道を設定して飛ばせる特殊弾。「ハウンド」より、複雑な動きの弾道を引くことが可能。相手を翻弄する変則的な攻撃ができるぞ！

今俺使ってないから、使い勝手とかはよくわからん。でも、みらいに向いてそうだな。ちょっと感覚派だけど、理詰めでいけなくはないし、駆け引きとかやりやすそうなトリガーってイメージだな～。

それに、銃手は、射手と銃手に分かれるぞ～！射手は、そのまま玉ドーンで、銃手は、銃でバンバンバンだね！

・狙撃手のトリガー：イーグレット〔射程距離重視型・標準型〕

威力もあり、射程と弾速の機能も高い。

狙撃だな！弧月がモノにできたらやりたいと思っているトリガーだね！

今、狙撃手は攻撃手や、銃手に比べてとても少ないな！東さんって人が一生懸命頑張って確立してる最中だ！だから、まだ未完成のトリガーとも言える～

此処だけの秘密だが、攻撃手トリガーと狙撃手トリガーは、これから増える予定らしい。まぁ。こんな感じ～。」

「沢山あるんだね～。」

まあ知ってるけど。知ってますけど。もっとたくさんの種類知ってますけど！

どれを選ぶかは、もう決めていた。

「どれにする？」

「しゅうお兄ちゃん私パーフェクトオールラウンダーになりたい！でも、最初は・・・射手かな！」

「お～大きくでたし、トリオン量が心配するとこ選んだな～・・・トリオン量測るか。」

「忘れてたでしょ。」

「うん。」

「・・・」
「はーい。これに、手を握って～」
「・・・はーい。」
ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピピピピッピ!!
「はーい。計測完了。トリオン量は・・・えっ!?１５!!!」

ボーダーへ行こう！　準備編　その２

「・・・え⁉・・・１５!!」

俺は神風しゅう。チョット前に両親を失い、本来ならば、落ち込んで死の淵にでも立っているバズだった。しかし、今は、妹のトリオン量について驚いていた。このことについてもあの子に聞かなくては。思考にふける。本来…俺はラノベ小説に出てくる、激重過去を持つみたいな男になるはずだったが、優秀な母によって、そんな事をしている場合ではないと嫌ほど思い知らされてしまった。

「終焉で、ひっくりがえしなさい。

終焉まで、あの子達を見守りなさい。」

これが母の遺書だった。遺書の在処は大規模侵攻の日の朝伝えられた。

「何かあったら、あの場所へ行きなさい！」

未来視を持つ母が出かける前に言うものだから、何かあるとは思ったけど…事前に言ってくれても良かったよね⁉と今更ながら文句を言える。俺もようやく本当の意味で落ち着けたようだ。

みらいが１日経って目を覚まし、そこからまた、３・４日寝た間。俺は色々準備をしていた。家は壊れてしまったので、三門にある別家を本家にする手続きや、他諸々。大学生になったら一人暮らしをする予定だったので、方法は知っていた。それでも、やることは他に一杯で、悲しむ暇なんてぶっちゃけなかった。それに、俺も目を背けていた。一段落ついた頃、ふと、母の最後の言葉を思い出した。ああ。あの場所に行ってみよう。

あの場所に着いた。

そこには、一つの大きな木がある、小さな丘。三門市にたくさんある神風家が所有する、土地の一つ。母と父の三人だけのあの場所といえば、ここしかない。

「イテッ。」

鍵とでかい木箱が落ちてきた。どうやら、鍵が頭に当たったよう

だ。よかった～。木箱が当たらなくて。当たってたら死んでた。

約束は果たしたぞ。お転婆娘・・・

???何か聞こえたか？
この鍵で開けるのか。
!!!
その中には、通帳と…保険書…等など…生活に必要な書類が入っていた。後は…あ。手紙・・・じゃなかった。遺書だ。母よ。こんなフォントで遺書の字を書くか？普通・・・。書道の筆のフォントじゃないの??

「ふふ。あはは。お母さんは・・・相変わらずだなあ。」
ポロポロと流れる涙。あはは。おかしいな。まだ、遺書開ける前だぞ？ずるいなぁ～母というのは。フォント一つで、高2をボロボロに泣かせて…。かなたやみらいの前では、泣けなかった。みらいの話を聞いた後は、もっとみらいの前で、泣けなくなった。泣きたいという気持ちは、常にあったが、泣けなくなった子の前では、泣くことを本能が恐れた。理性がブレーキをかけた。その、ブレーキは今、母によって、ボロボロにされてしまった。
ビスッビスッと、俺は、半泣き状態で遺書の封を開ける。いつも、そう泣くことがないから、疲れちゃった。
「終焉で、ひっくりがえしなさい。
終焉まで、あの子達を見守りなさい。」
泣いていた涙がスッと引いていくのが感覚ではなく、しっかりと肌でわかる。感じる。
「お母さんには、お見通しなのか。・・・かなわないなぁ。」
スッと立ち上がった。

俺は、ここに誓う。
母が遺した使命を全うし、みらいがしたように自分がすべき事を。
ただ、まっすぐに。

「もしもし。蒼也？俺、しゅうだよ。なぁ。お願いがあるんだけど。」

ボーダーに行こう！　準備編　その３

「トリオン量・・・１５!?えぐいな!!!」
あはは。と笑う、しゅうお兄ちゃん。うん。それ三回目だね。
２回目と三回目の間はすごかったね。とても長かった。１４００文字くらいの間があったね。
「そんなに驚いてるけど、しゅうお兄ちゃんはトリオン量いくつなの？」
トリオン量１２の二宮さんですら、驚かれたのだから、１５は、普通は多いのだろう。（本当は、その１０倍あるよ、なんて口が裂けてもいえないなけど…。）しかし、このワールドトリガーの世界を知らないという設定で通っているから「え？これ多いの？」的な、二次元創作あるあるのことを言わなければならない。
「あ～俺？俺は１０だな。恥ずいなぁ～。この量で多いってちょっと調子乗ってたのに～恥ず。」
いや、多いや～ん。兄…。とっとりまフォローや。フォロー。
「ん～？指標がないからよくわかんないな～平均いくらぐらいなの？」
「５～６。」
!!なら、しゅうお兄ちゃん多いじゃん!!すごい!!!」
「・・・そっそう？」
「そうだよ！しゅうお兄ちゃんすごいよ!!」
「そ～お～???・・・やっぱりぃ～？」
なんとか、曲がったへそを戻せたようだ。良かった～。でも、しゅうお兄ちゃん、チョッッっロ!!!
「ふふふ。そっか～俺すごい・・・蒼也に話しちゃお～!!よし、みらいこれで、大雑把な説明は終わった。また細かいことは、入隊式の時に、と追々な！警戒区域外まで、地下通路で、サックっと帰っちゃおう！」
「リョーカイ！」

ーーーーーーーーーー

ｉｎ　ＨＯＵＳＥ

「あ！みらいおかえり～今日はボーダーに行ってきたんだって？どうだった？」

「優しいたぬき…ゴホンッ鬼怒田さんと真史叔父さんにあったよ～後は、しゅうお兄ちゃんからトリガーについて教えたもらった～」

「そっかそっか～良かったね～」

「あ！でも、トリオン体で髪が白くなっちゃって～」

「そうそうで、その事を今から、マリー先生に聞こうかなって～」

「あ。また、マリーを表に出すのに気を失わないと駄目なのかな？」

「ラノベのお約束は、大体、分身して、人格を表に出すんだけど・・・。」

？できますよ!?

「わ！マリー先生！」

「マリー」

「僕は、なんて呼べばいいのかな？」

？かなた様、マリーで良いですよ！しゅう様もですぅ～!!?

「じゃあ、僕は、みらいと同じマリーと呼ぼうかな。」

「俺は、マリー先生の方が面白いから、マリー先生と呼ぶ！」

？わかりました！しゅう様!!其の名に恥じぬよう精一杯主（マスター）のサポートを致します!!!?

「で、本題に戻って、なんでトリオン体で、髪が白くなったのか教えてくれる？」

？はい！主（マスター）!!今、主の体は悲しみの感情エネルギーを使って体内バランストリオンを正常に保っていますよね。でも、神風家の体質なのか、髪にトリオンが高密度で集まってしまっているんです。？

「ああ。あれかな？髪は女の命的な？」

？はい。かなた様。その言葉の影響を深くありそうな推察は当たってると思います。？

「あ～。そうかも。神風家は、鎌倉時代から続く巫女の一族だからね～詳しいことは、婆様の方が良く知っているけどね～」

？説明を続けます。主（マスター）の髪は、先程も申した通り、トリオンが高密

度に集まっています。なので、トリオン体生成時には、髪の高濃度トリオンから生成したほうが良いとワタクシが判断し、いたしました。？

「普通とどれくらい違うの？」

？約1．5倍程度、トリオン体の強度や、伝達スピード、機動が生身の2倍程度異なります。？

「「わ～。みらいすごーい。」」

？すごいと言っておられますが、お二人共ＳＦ持ちではありませんか??

「「え???」」

「特に検査には引っかからなかったけど。」

「僕も。」

？まだ精度が甘いんですね。お二人には、主（マスター）の新しい能力獲得に伴ってギフトが送られているはずです。？

「急に異世界転生っぽいな!!!」

？システム的には、それに近いですね！では、ボーダーでは、わからないと思われますので、ワタクシが説明いたします。

神風　しゅう：精密脳髄操作　並列思考、並列処理等、身体精密操作など、要は、脳の機能がコンピューターレベル。

神風　かなた：廣作　技、技術のコピーが視覚的情報によって可能。要は、見様見真似がとっても上手にできる。

こんな感じですね。？

「「お～」」

「流石、私のお兄ちゃん達だね！」

「「みっ！みらい～～～!!!!!!」」

兄号泣。

？ダイブ話がそれてしまいましたよ！皆様!!!?

「あ～そうだった。ごめんごめん。え～っと？なんの話だっけ？」

「みらいの髪が白くなった話は…終わったから、次は、分身できる話じゃないの？しゅうお兄ちゃん。」

「そううだった！」

「「も～しゅうお兄ちゃん～」」
しゅうお兄ちゃんは時々ぬけてる。本当にびっくりするくらい。
？それでは、お話させていただきます。ワタクシの言う分身は、いわばワタクシがトリオンを固めて作ったトリオン体をブラックトリガーを使って作成し、作るんです。？
「「？」」
？ちょっと説明が難しいのですが、まず、トリガーを使用して、トリオン体を作る場合は、トリガーホルダーに入った集積回路のプログラムからトリオン体を生成しています。？
「ふむ。」
「そうなんだ。」
「？」
？しかし、ワタクシが其の方法でもし作ったとすると、トリオン兵と同じ動きしかできないんですよ。？
「それは、何故??」
？それは、ワタクシは元々はただの演算機能なんです。？
「ただの演算機能なんてふつうないよね。」
「うん。そうだと思う。」
「???」
？まあ。そこは、置いといてください。主の転生ボーナスってやつですから。話を戻しますよ。ワタクシは、ただの演算機能なので、ボーダーで、行っている方法でやると、ある程度しか操作ができないのですよ。それに、タイムラグまでありますし。そうなると、そこらへんに湧いてくるトリオン兵となんらわかりがなくなっちゃうんですよ。ちょーっと規則性がないだけの。格ゲーをしてるのと同じですね。応用もあまり利かないようになってますし。ボーダーのやり方では。？
「ああ。それは、しょうがない。鬼怒田さんが作ったのは、汎用型。玉狛支部みたいに特注品じゃないからな～。」
「玉狛支部？なにそれ？かなたお兄ちゃん。」
「！」

「支部の一つだよ。警戒区域の境目にある、ボーダーの支部。そこの支部は特別で、ネイバーの技術を使って特注品のトリガーを作る予定らしい。まだ完成してないって玉狛支部の人が言ってたんだ。」
？へ～そのシステムを使えば、なんとかなりそうですが、今は、よくわかんないのでワタクシが組み立てた最適解の方法で行いますね。せえのっ!?
ボフッと言う音とともに現れた美女。
「ふー。できましたね。この姿では、初めてのご挨拶となります。ワタクシは、マリー・マイドール。我が主、みらい様の忠実なる下僕。そして、みらい様のサポートを担う者デス。どうぞよろしくお願いいたいます。」
やっヤベぇ。
「どストライク。」
「「え？」」
「かぁ～わぁ～い～い～!!!!」
「わ～まさかの～。」
「え!?可愛い！可愛い!!金色の瞳に、可愛い三編みのおさげ。服は、赤いゴスロリに、首には、赤いチョーカー!!!!極めつけは、超美少女!!!ヤバぁ～!!やばぁ～!!マジどストライクぅ～!!!」
「へぇ～みらいの女の子のタイプってこんな感じなんだ。ふ～ん。」
「みっみらい様…!!!恥ずかしいデス…。そっそれに…言いづらいのですが、この容姿は、みらい様をトレースしたもので…違うのは、ツリ目ぐらいで・・・そうたいして変わりが…」
「・・・！ちがうよ。マリー。私は、可愛くない。それにね、人の容姿ってのは、なにか足りないから可愛くないんだ。後少し鼻が高ければ。もう少し整っていれば・・・とかね。」
「みらい様は、思ったことはあるんですか？」
「いや。ないよ。前世より全然素晴らしい容姿だからね。でも、人ってのは貪欲でね。好みの顔ってのがあるんだ。」
「いやまて。みらいはかわいい！」
「かなたお兄ちゃん黙って。私は可愛くない。兄二人は、こんなに

かっこいいのにねぇ～。」
「「みらい～!!!」」
「そうでね、人は、貪欲で、好みがある。例え自分に近くても好きなものは好きなんだよ。マリー」
「みらい様!!!でもっ…あの…恥ずかしいことにはっ代わりはないです!!!」
「好きなものは好きってなんで、言っちゃいけないんだい？マリーが嫌ならやめるよ？」
「嫌じゃないです!!!でも…!!」
「なら良いだろう？」
「!!!」
「!!!」
「なんだこのカレカノみたいな会話。」
「みらいが…僕の事かっこいいって…かっこいい…」
「あ…かなた…駄目だこりゃ。」

―――――――――――

「話がダイブまたそれたけど、取り敢えず、マリーにライとして行動してもらえば、だいぶ高確率でバレなさそうだね！」
「それでは、ライとしての人格をインストールしておきます。」
「任せた！」
「みらいが…僕のこと…かっこいい…記念日だ…取り敢えず秀次に…かっこいい…」
「かなたはほかっておこうか。」
「はい。」「うん。」

―――――――――――

その夜。
「なあなあ！蒼也!!聞いて聞いて!!!」
「ぐう。むにゃむにゃ・・・。なんだぁ…。しゅう…。」
「今日みらいがさ～俺のことすごいって言ってくれて～!!!」
「またいつもの変態か。」
「なっ！友人を変態呼ばわりって!!酷い奴!!!」
「３時間も語られたら普通堪える。」

「はぁ？何いってんだ。そんなの当たり前だろ～？家族は最高なんだから。優秀な母に心優しい父素晴らしい…」
「まて、何時間する予定だ？」
「５」
「は？ぶざけるな。」
「いや。蒼也。考えてみろみらいからかっこいいの文字が出たんだぞ？」
「・・・それは、本当か？」
「マジもんなんだな～」
「・・・詳しく聞かせろ。」
「任せろよ。」
結局１０時間話した。

今日から私は!!

「ねぇねぇきいた?」

第一次大規模侵攻の日から、半年。三門市は、ちょこっとずつでは、なく、ボーダーのお陰か急速に前の生活に戻れるよう復興が進んでいました。

「え〜なにそれ?」

しかし。三門市の人の心は心做しかまだ、元気では、ありません。周辺では、かなたお兄ちゃんと秀次くんが該当します。逆に最近はしゅうお兄ちゃんは、前より無理に笑っているような気がします。

「しらないの?さいきんここらで不良が増えてるんだよ。」

私は、不思議です。なんで秀次くんが元気がないんでしょうか?秀次くんの闇落ちの原因である、お姉さんは助かったのに。

「あ。それ知ってる。警察が忙しいからそのスキを狙ってらしいよ。」

ああ。そう。秀次くんのお姉さん。由緒さんは、一週間後、眠りの森の美女が目覚めるみたいに綺麗に目覚めました。特に後遺症は無く、今は、元気に生活しているそうです。良かった。

「そうそう。力だけの不良の癖に中々考えたことするよね。凄いグループ派閥とか出来てるらしいよ。」

そして、由緒さんには、包み隠さず教えました。いきなり蘇った訳ですから、ちゃんと説明しないといけないと私が判断したんです。そうしたら、案の定、泣いてしまわれました。私にもう悲しいという感情はありませんから、美女の泣き顔も素晴らしいな。流石三輪兄弟。両方美しいというくらいにしか感じられませんでした。もう、悲しみがないという状況にも慣れてしまった私がいたからです。

「うわぁそれは嫌だな。関わらんとこ～。」

話は戻りますが、ついこの前、秀次くんとかなたお兄ちゃんがボーダーへ入隊しました。二人共ネイバー絶許主義絶対殺すマンになってしまったようで、毎日ボーダーに通っては技術を磨いているそうです。最近、彼らの隈が気になるところなので、強制的にもうそろそろ寝かせましょう。

「でも知ってる？不良の中でも王子様みたいな爽やかイケメンがいるんだって～」

彼らは、頑張りすぎです。今度、きつく叱ってやろうと思います。でも、彼らはちゃんとご飯の時間には、帰ってきてくれるのであまり怒れないのが現状です。悔しい…。私がボーダーに入ったら私がきっちり管理してやります!!ふん！・・・私が入るまでの2・3ヶ月…見逃すのはその間だけですよ…ふふふ。

「なにそれ～えっ。会ってみたい～でも、不良なんでしょ。」

さっきから…間に突っかかってくる陽キャの会話。陽キャの間で、流れている噂。第一次大規模侵攻のせいで、治安が悪くなった結果だ。まぁ。当然と言えよう。オッサムだってクラスの三馬鹿不良に絡まれてたし。大規模侵攻後なんて、もっと荒れていたと予想される。フッ。予想どーり！キラッ!!

「そうだよ～危ないよ～」

「だね～」

「でさ～そのこのトレードマークみたいのが変なマスコットらしいの～」

「まじ？危なそう～」

私も同感です。あ～見事に陰キャムーブをかましてるぜ。陽キャの会話を心の中で、返事する。陰キャの極み!!!ああ。そうそう。私は、大規模侵攻後、見た目を地味にしました。何故なら、黒メッシュがめちゃめちゃ目立つ!!それで、教師からめをつけられている・・・

のもあるし、ボーダーは、風神ライとして入るのだから、神風みらいは、目立ってはいけない。そう。メダッテハイケナイ・・・。

ーーーーーーーーーーーー

帰り道

ふう。今日も陰キャムーブを綺麗に決められたぜ。前世のまんまの行動だったけど。努力もなにもないけど。

「イッテ。」

あ。やっばぁ。フラグをたてたつもりはなかったが、あの噂に触れたからか、見事に変なマスコットつけてる不良とぶつかった。嫌でも、流石に女の子には…

「いっって～あ～骨折れたわ～完全に折れたわ～こりゃ、慰謝料がいるわ～」

まじか～テンプレを女の子の身で聞くとは…。

「取り敢えず、１０万。払えよ。」

１０万!?ふざけるなよ!!１０万あったら、グッズいくつ買えると思ってるんだ!てかなんだ!お前!今、折れたっていう腕差し出したろ!!動くってことは、折れてないじゃん!!!でも、ここは大人になって、菩薩心で、刺激せず…

「イマ、１０マンモッテナイヨ～」

必殺!カタカナ戦法!!優しく言えば、もっと効果バツグン!!

「は?払えないってこと?へ～じゃあ。あそこで、お話しよっか。」

路地裏を指さしながら言う不良さん。あ・・・。これ逃げれないやつや。と、ごく普通の少女なら思うでしょう。でも・・・私は、前世から、変人、サイコパス、阿呆の名をほしいままにしてきた女！　！

そーだ。イイコト思いついた!!ちょーっと実験に付き合ってもらおうかな。

「うん。いいよ。」

「!?」

わはははは。不良がびっくりしてやがんぜ。

テクテクテク。路地裏に入っていきます。

「で?お嬢ちゃん。どーやって払ってくれるのかな?体かな?でも

…あんまり可愛くないから、払えるかな～？」
やば。完璧な陰キャになってるってことじゃん。嬉しい。じゃないない。そういう事を突っ込むとこじゃない。
「・・・小学生にはアウトだと思う。普通。」
「え？小学生だったの？まじＷＷ!?でも、ダイジョブだよ。小学生でも需要あるから。」
「・・・ドクズね。」
「は？今、何つった？」
「ふふふ。はい。怒った～怒っちゃいました～私、怒っちゃった～」
「何いってんだこいつ！怒ったのはこっちの方だっての!!おりゃ!!!」
全力パンチをしてきた、不良。それを、さっと避けます。そしたら、更に怒ってブンブンしてきます！恐ろしい子や～我、小学生ぞ？
？主どうされるんですか？ワタクシは半殺しの刑に処したいのデスガ。？
物騒だな～そんなことは、しないよ～ただ・・・
？ただ・・・??
いや。まだ決まったわけじゃないから。
???
ーこの間１秒!!ー
「はぁ？なんで、避けれんだ！」
「なんでだろうねぇ～？」
煽る。
「チッ！ふざけんな!!ようやく、あそこに入ったんだぞ!!この俺がこんなガキに!!!」
「お口が悪いよ～不良さん～それにね、女の子に〝ガキ〟は、いただけないなあ～」
いくよ。マリー。フォーメーションＷだ！
？はい！主、レベル５程度で良いですか??
気絶させない程度なら。
？了解です!?

「さっ。こんな人気のない所まで、連れてきてくれたんだし、一発はお見舞いしないとね！」
？部位トリオン補強を行います。？
「おりゃ！」
ドンっ!!
強い一撃をお見舞いしてやったぜ!!
「ガハッ!!」
不良は、ダウンした!!
「さぁ～てぇ～聞こうか。不良さん。さっき、あそこに入ったって、言ってたよね？何処のことかな？」
「はぁはぁ。言うか。ボケ。」
「まだそんな事言える立場だと思ってるんだ。」
「はぁはぁ。その事を言ったら、半殺しにされる決まりなんだ。俺は、半殺しにされたくないんでね。」
「いや。私が半殺しにしたらどうすんねん。不良さんって阿呆？さっきだって、骨折した～って言ってたど、その手で、お金要求してたし。」
「・・・」
「自覚はあるんですね。」
？主!!もう5時近くです!!もうそろそろ、帰らないと、かなた様激怒ですよ!!夕食の準備もありますし!?
「時間切れか…。しょうがない。でも、多分確信した。不良さん、貴方が最近入ったのって、噂の不良グループですね？」
「！」
「反応からして、ビンゴですか～わかりやす！本当の阿呆ですね～救いようがない。でも、最近入ったってことは、下っ端ですよね～ん～取り敢えず今は、放置って感じで行こうかな。では、さようなら～」
ーーーーーーーーーーーーー
数時間後…
「あ！やあ、スタリヴァ。こんなところで、座ってどうしたの？」
「女のガキにやられました。」

「へ～。女の子に…。どう？強かった？」
「人間離れしてました。」
「ふ～ん。随分スタリヴァもやられたようだ。女の子なのが気が引けるけど、頭は駄目だけど、喧嘩は強いスタリヴァよりも、強いなら遠慮はいらないかな？そ・れ・に！もらった借りはきちんと返さなきゃ。」
「はい。」
「頭座である、僕が出張ってしまっては、イケナイから、そうだねぇ～お仲間連れて、借りを返しにいきなよ！スタリヴァ！」
「うっす。」

今日から私は!!　え…？これ、テンプレのやつですか？

あのちょっとした不良事件から一週間。特に何もなく過ごせてます。ある噂が流れ始めるまでは。

「ねぇ知ってる？あの噂。例の不良がある女の子を探してるんだって～」

それを聞いた瞬間、私は・・・来るまで待とう。ホトトギスになりました。だって、怯えても無駄。前世でしっかり学んでいます。そして、毎回噂を話している陽キャの君。貴様は、何者なんだ・・・！

ーーーーーーーーーー

また、帰り道。

ねぇ。マリー。今日さ、また例の不良に会いそうだよね。

？そうですね。前回同様、噂を聞けば、現れるって感じぽいです。あれですか？噂をすれば・・・？

「はぁはぁはぁ！ようやく見つけたぞ！お前!!」

？的な？・・・あ。？

マリー上空待機。

？了解。？

「ものすごい息が上がってますね。どうかされましたか？」

「ひゅーひゅー。おばえに・・・ひゅーひゅー。復讐するために・・・ひゅーひゅー。」

「何故そんな息が上がってるかめちゃ気になるのですが、呼吸を整えましょうか。はい、すってー」

「す～」

「吐いて～」

「は～」

「・・・もう大丈夫ですか？」

「おう。・・・お前に復讐するために仲間を集め「行きましょう！」」

「は？」

「だから、一対大勢のとても卑劣な戦いを私に挑ませようとしてきたのでしょう?テンプレじゃないですか。わかりやすいですね。それに、それをするには、下っ端の貴方は、上司の許可がいるはずです。流石に上に立つ人は馬鹿ではないでしょう?何か貴方も知らない策を練ってきているはず。ちょこまかと噂をされると面倒ですし、私、今ウルトラマンみたいに5時の時間制限があるので、ちゃちゃっと終わらせたいんですよ。ほら。さっさと案内してください。」

「・・・・?」

「要は、早く連れて行け言うことですよ。ほら早く。時間は有限ですよ。」

「・・・・」

ーーーーーーーーーーーー

「ここだ。」

「さも、アジトっぽい場所ですね!!気分が高揚してきました!それに、複数人いるみたいですね!ざっと、２０人程度でしょうか!まあ!小学生相手に卑怯極まりないですね!!」

「・・・恐れたりしないのか?」

「来るまで待とう、ホトトギスが当たったので、怖いものなしですね。今の所。恐ろしかった母も半年前に亡くなりましたし。」

「嫌なこと、言わせちまったな。」

「あ。気遣いなら不要です。母は、尊敬できる人だったので、なくなった後もちゃんと道標を示してくれたので～」

「遅かったじゃないか～スタリヴァ～!!!」

「頭座!!」

「あれ?もうラスボス出るんです?巻過ぎでは?・・・はっ!!!噂の!!」

「あ～。君がスタリヴァボコった子かな?凄いね～強いね～でさ～君に・・・・借り作っちゃったわけ。返させてくんない?」

「あ。借りなんて、作ってないんで。返さなくていいです。わ―イケメン～王子様みたい～」

「ははは。面白いね！スタリヴァと会ったときから見てたけど、本当に小学生かな～？それに…僕がこんなに威圧感出してるのになんでそんな怯えないのかなぁ？」
「・・・・」
遠い目をして、明日の方向を向く。
「とある、シスコンのせいですね。それに、見てたんですか？」
「うん。見てた。スタリヴァの息を整えてあげてたの。あれは、傑作だね。面白すぎて腹筋が痛い…！」
「まあ。来ることは予想通りだったので。まぁ。あんなに息が上がってくるとは思いませんでしたけど。」
「そこが、スタリヴァの面白いところだろう？・・・本当に不思議だな～会話が小学生ではないね！もっかい聞くよ。本当に小学生？」
「はい。小学生です。今は亡きスパルタな母親のせいで、高校の勉強内容は、もうほとんど終わってますが、小学生です。」
「ん～。返しが斜め上だった。だからか。だいぶ思考も行動も大人びている。・・・でもさ、体格差とかは、補えないよね！」
「それは、そうですね！なので・・・チェスをしませんか？頭座？である、貴方はだいぶ頭が回るような方なので。喧嘩で、本職の方に勝とうなんて烏滸がましいものですので。」
「烏滸がましいなんて。スタリヴァに勝っておいて？謙遜もよしてくれ。・・・でも、僕チェスは好きなんだ。いいよ。やろうじゃないか！」
「望むところです。では、私の名は、神風みらい。三門第三小学校６年。よろしくお願いいたします。」
「では、こちらも。僕は、王子一彰。三門第四中学校３年だよ。いいゲームにしよう。」
「はい。よろしくおねがいします。（わ～やっぱ、推しだった～!!!尖ってる頃の王子先輩だ～）」
礼儀正しく握手を交わし、いざ尋常に勝負!!心の中は、大荒れです!!
・・・・４５分経過。

「おやおや。いつの間にか、僕詰んでいるね！」
「転〇ラ見たく、陰謀に陰謀を重ねましたから。」
「転〇ラ？なんだい？それは？」
「イラストよし。物語よし。後から考えると陰謀にそれまた陰謀を重ねまくっている小説家になろう系の凄い小説です。」
「へ～。今度読んでみようかな！・・・・気付いているんだろう？どーせ。」
「あれ？いきなり自虐ですか？さっきのチェスではとてもスリリングなゲーム展開を見せてくれたのに。」
「よく言うよ。君の思惑通りだったくせに。それに，君ならば僕の今考えれば浅はかだった思惑も見抜いているんだろう？」
「なんのことでしょう？」
「まだ、しらを切る気なのかい？案外頑固なようだ。」
「ええ。だってまだ、子供の小学６年ですから。」
「・・・はあ。自ら喋るしかなさそうだね。多分君が考えたのと一緒。僕がチェスを受けたのは、時間時間稼ぎのため。そして、時間稼ぎをしたかったのは、「君に圧倒的な勝利をするために強力な仲間を呼ぶ」た・・・め・・・。やはり、気付いていたようだ。」
「まあ。血盛んな尖ってる奴は、大体圧倒的勝利を欲しがるものです。例えば、ヒ〇アカの爆豪〇己の様に。それに、組織の上に立つものは、私なんかに負けてしまえば、上には、いられない。だから、超安全策を取りたい。気持ちは分かります。」
「・・・恥ずかしいくらいに見透かされてるね。これでも、戦略には自信があったほうなのに。え～じゃあもう、ヤケクソだね。ここに入ら・・・」
「ないですねＷＷＷふふ。女の子を誘うなら、きちんと誘っていただかないと。それに、兄が許しません。」
「だよね～・・・本当はこんなやり方僕の好みでは、ないけども。皆待ちくたびれたね。さぁ。本領の発揮ｄぐふっ!!」
「ナイス！マリー。ちゃんと待てができたね！」

そこには、Ｙの格好をした、私とよく似たツリメの可愛い可愛い女の子。隠し玉である、マリーが、ドヤ顔でいた。
「はいっ！みらい様!!マリーちゃんと、待てができました！」
!!!
動揺が不良の中で起きる。頭座がワンキックで倒れてしまったのだ。それも、とても可愛らしい少女によってだ。無理もない。チェスを二人がしている４５分間。自分たちは、今か今かとマテ状態を耐えていた。それでようやくヨシと言われようとしていたのだ。動揺するのも無理はない。判断材料が多すぎる。それ故の動揺・・・
「頭座!!テメエ!!とりあえず頭座から降りろや!!」
してない者もいた。その者は、このチーム結成当時からいた、古参組。暁千星。喧嘩っ早いのは、玉に瑕だが、不良としては、もってこいの力である。多分、この回のみのオリキャラであろうことは、言うまでもない。
「あ。すみません。マリー早く降りて～」
「は～い。主～」
「なんなんだ！オメーは!!うち舐めてんじゃねーぞ!!」
「ウルサイですネ！よく吠える犬め!!それに…そっちから、仕掛けたくせに!!やりますかぁ？」
「はっ！ふざけんな！ただのガキが俺たちに勝てると思ってんのか？あ〝？」
「そっちのスタリヴァって人にはみらい様勝ちましたよ？」
「はっ！あいつは、四天王最弱…。じょーとーだ。いいぜ。お前は、俺が相手してやる。」
「そのセリフ…。なかなかやるようですね！良いでしょう。受けて立つ！」
「じゃ・・・そっちの女は・・・」
「俺がやるよ。」
「東海路!!・・・そこの女に負けんじゃねえぞ!!」
「はっ。言わせ。」
東海路快斗。思いつき出できた少年その２である。

「いざ…。勝負!!」
ボコボコ!!おりゃおりゃ!!なんて、可愛らしい勝負にはならなかった。
ひゅんひゅん飛んでくるみーぎ、ひだーりーフック!!!早いな～目にトリオン集めなかったら、当たってた～やべ～チッと舌打ちが聞こえる。
「「あたんね―ぞ（な）!!」」
「お前もか！東海路!!」
「ああ。コイツら回避能力が高えな。」
「あら。おしゃべりしてる暇があるんですかぁ～？」
煽る、マリー。
「あ゛ぁ～???舐めんな!!」
「ふふふ。一対一じゃなくて良いんですよ？ほら、そこの人もかかってきなさいな。」
「来んな！テメエら!!こいつの相手は、俺だ！」
「あちらは、盛り上がってますね。どうします？早く蹴りつけます？」
「吐かせ、こっちのセリフだ。がきに舐められて、不良やってられっか。」
「・・・あの。ちょっと、聞きたいんですけど。」
「あ？なんだ？」
「もしかして、東海路って、あの東海路じゃないですか？」
「もしかしなくても、そうだよ。お前だって、あの神風じゃねえか。」
「やっぱり！え～。あれですか？お金持ち御曹司だけど、グレて不良になりました的な？」
ピクっと止まる攻撃。そして、どんどん顔が赤く赤ぁ～くなる顔。
「それの何が悪い…。」
「いや、顔真っ赤…。」
「五月蝿え!!」
また、ひゅんひゅん飛んでくる攻撃。

ピン!!
「あ。１００円。」
おや。おっと。的な感じでかがみます。さすれば、後ろから鋭いケリが…。
「はぁ～ん???」
「あはは。」
東海路さんが、怒ってます。不意打ちがきかなかったのが、だいぶこたえたようです。蹴った本人…王子先輩はもう苦笑です。
「案外卑怯なことするんですね！」
「避けたやつが言うなよ・・・！」
「なんで避けれたのかな???」
「ワタシ勘がイイので!!ぬ～・・・いつまでもラチがあきませんね！さっさとおしまいにして逃げてくれればいいのに!!」
「うるせぇ!!それは、こっちのセリフだっての!!ちょこまかと逃げやがって!!」
「勘・・・良すぎないかい??」
マイペース。マイペース王子ですね…。
「気のせいですね！・・・はああ。もう！マリー!!トドメ刺しちゃって!!もうめんどい!!」
「オキードギー!!」
「せえのっ！」
「「はっ!!!!!!」」
トリオン圧縮をかけ、お腹あたりをワンパン。彼らは、倒れてしまった。あ。大丈夫。意識はある。あれだよ。ここで、役にも立たない豆知識。殴るなら、腹を。痕が残りにくいからな。それに、お腹だけは、いくら鍛えても駄目な時は駄目な場所らしい。前世の父が…？言ってたような気がする。
倒れた、３人をちょんちょん指差す。あれ～？意識は～？
「ホントに強いね～なんで僕生きてるんだろう～？」
「いや。ワタシ殺ししない…。」
「みらい様の慈悲の心のお陰ですね！」

「・・・完敗だな～情けもかけられているし…。で、望みは、なんだい？」
「では、２つ。三門市の治安が良くなるために君等に、不良狩りをして、治安の回復をしてもらいたい。あれだよ。ウィ〇ドーズブレイカーみたいなものですよ。三門の平和を脅かすものこの三門の王子が粛清する!!って。そして、２つ目は、望みというより、提案だね。ねぇ。ボーダーに入らない？」
「・・・」
「今は、即戦力が必要なんだ。まだ、作りたての組織だからね。ボーダーは、ネイバー相手に戦う組織なんだ。君たちの力を対ネイバーに向ければ、それは、悪でなく正義となるし、ちゃんと給料もでるんだ。どう？そっちにも、悪くない提案でしょう？」
「ふ～ん。面白そうな提案じゃないか！いいよ。受けよう。」
「頭座!!」
「考えてご覧よ。これから、ふるう力は、すべて正当なる力になるんだよ？ボコってもこっちは、全く悪くないんだ。メリットしかない。」
「あ。一応言っておくけど、ボーダーの試験は、ちゃんと受けてね。落っこちたら、街の平和を不良観点から守れ。じゃ。時間なんで。」
今日のご飯は、何にしよ～かな～

神風しゅうの暗躍

コツコツコツコツ…。

ふ～。緊張と不安が心を占めている。心做しか、手が震えている気が・・・する。

今日は、上層部と交渉日。真史叔父さんの手助けがあるとはいえ・・・大変な戦いとなりそうだ!!!

コンコン。

「失礼します。神風しゅうです。」

「入り給え。」

「失礼します。」

会議室に入ると、上層部の真ん中の奥に城戸司令、俺から見て、右手の奥に真史叔父さん。その他は、よくわからん。一人、明らかに上層部でなさそうな青の服を着た少年がいた。なんか、元気なさそうだなあいつ。

・・・怖～!!上層部の雰囲気鬼怖かよ・・・!いやまて。俺には、居たじゃないか!この雰囲気に負けず劣らずの・・・家の今はなき母が・・・!ふ～。落ち着いてきたわ。覚悟が決まった。やっぱ。遺書の時も思ったけど母強しだわ～。

ーーーーーーーーーー

「それでは、俺からの提案をさせてもらいます。」

その少年。神風しゅうといった少年は、語りだしたのだ。

「こちらからの提案…お願いは、俺の妹であり、忍田本部長の姪である、神風みらいについて。率直に言うと、彼女を彼としての入隊の許可の許しを願いたい。それに伴って、ボーダーの協力を仰ぎたい。その二点だ。」

少年は、臆さず言った。最初は、何かこの空気に飲まれているような様子であったが、突如何か悟ったような顔をして・・・考えた後、覚悟を決めたようだ。

「ほう。提案はわかった。では、こちらに対してのメリットはなんだね？」

こう私は、問い返す。

ーーーーーーーーーーーー

・・・・おお。あれ臆さず言えた。凄い！凄いぞ！と褒めちぎりたいところだが…城戸司令、なんでそうなったかは、聞かないんだ。なんで、男装しなきゃいけないのか…。あれか？気を使ってスルーしてくれたのか？ありがたいが・・・いや。あれだよ？俺だって最初は思ったよ？なんで、男装???する意味ある？いや、可愛いみらいを守りたいからとはいえ、ね～。俺、みらいが嫌がって、没ると思ったのに。みらい嫌がんないし。あれ？もしかして、俺好みの服着てくれるん???じ???わ～やっべ～。話がずれた。メリットを言わなくては。

「はい。それは、うちからの…神風からの資金的援助です。」

どわっと会議室の空気がなる。当たり前だろう。金は、人生においていくらあっても足りないものだ。それに、ボーダーという組織は、まだまだ未熟で、何もかもが不足している。そして、そこに金がいるのは、目に見えてわかる話だ。

ーーーーーーーー

会議室が湧いた。そりゃそうだ。ボーダーに圧倒的に足りてないものそれは、今現在金と人員だ。人員の方は、これから、どんどん入隊者が増えるだろうから、問題はないだろう。三門には、ネイバーに恨みを持つものが多い。しかし、お金だけは、湯呑のように溢れて来るわけではないそこは、…俺の仕事だ。

「ほう。・・・資金か…資金援助は、唐沢営業部長に意見を仰がなければ。」

「はい。良い提案だと思いますよ。しかし・・・こちらにメリットが大きすぎる。単純に見れば、ただ、男装をさせて入隊して辻褄合わせに協力してほしいこれだけに、大金はどう考えても割に合わない。怪しすぎますね。」

ーーーーーーーー

なるほどな。とは、思わない。当たり前だ。普通に割に合わない。

「・・・そうですよね～普通に考えたら割に合わない。怪しすぎる。当たり前だと思います。」

あ。真史叔父さんめっちゃ不安そうな顔してる。ウケる。ダイジョブだっての。
俺は、ニヤッと笑って見せる。
あ。青色服少年!!変な顔すんじゃねえ!!
「はぁ。じゃ、ちょっと腹くくって話しましょう。叔父さん、現ＫＡＭＩＫＡＺＥの社長は、そんなに考えなしでは、ないですよ。」
まぁ。あの人なら、みらいのためなら、何億でも詰みそうだけど。
「もちろん。ちゃんとこっちにも、みらい以外のメリットは、ありますよ。」
ふう。一呼吸置く。
「それは…ボーダーって、縦も横も繋がりが無いでしょ?だから、いろんな企業も様子見てんですよ。何処の企業も何処かに支援をしたほうが企業的にも高イメージなんで。それに、今大注目のボーダーに一番最初に支援をしたとしたら、イメージアップは、約束されたもんなんですよ。・・・だけど、そういうのって、繋がりがないとできない暗黙のルールできなもんがあるんで。って叔父さんがいってたんで。なので、1番初め、1番出資していると言う称号は、あなた方が思ってる以上の価値がある。・・・これが、こっちのメリットですね。」
これは、叔父さんの本望では、ない。なんか言われて時ように、それっぽいことを言わなくちゃいけないかもしれないからといって、それーぽいことを考えただけである。
「・・・・」
この返事に全てがかかっている。
ーーーーーーーーーーー
この意見を聞いて、ほんとに蒼也と同い年か?と疑った。出来すぎている。裏事情を話した事によって、信頼している、と思わせる効果もあるような気がする。お!俺今日調子がいいかもしれない。それに、この提案こっちにデメリットがなさすぎる。メリットしか語ってないから、気づきにくくさせようとしているし…。本当に疑わしくなてきた・・・。
ーーーーーーーーーーー

会議室は、シーンとなったまま。緊張～もし断られたら？多分叔父さんがボーダーをぶっ潰すと思う。過激派だからな・・・。あれだよ。トリオン技術だけ、取っておいて、上層部は国外追放なんて、普通にありえるぞ…。そして、そのトリオン技術で、新たな企業作っちゃったりして…。あ～怖い。ストッパー役のお母さんがなあ～亡くなてしまったからな～。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・良いだろう。その提案を叶えよう。」

ん～。タメなっが!!!

あれか、青服少年と内部通話でもしてたのか???

まあでも…

「ありがとうございます。」

ひとまずは良かった。それだけだ。

境界防衛機関

入隊式　壱

「おい。お前。歳はいくつだ。」
「13ですけど。(嘘)」
「何処の中学だ。」
「三門…ごほん!!六頴館中等部通信科1年…。」
「さっき話してたしゅうさんと・・・」
「ねぇ。二宮くんとばかり喋ってないで、私とお喋りしましょ。」
「おい加古。邪魔だどけ。こいつは、今俺と喋っている。」
「一方的に質問してるだけじゃない。それは、会話とは言わないわ。それに、年下にその態度はないんじゃない?ねぇ。貴方もそう思うでしょう?」
「うるさい。俺がどんな態度しようとも勝手だ。」
「あら。そんな態度じゃや、怖がっちゃうわよ。年下には。」
「チッ。怖がってないだろうが。」
「二宮くんには、わからないじゃない。そんな事。実は、怖がってるかもよ。」
なんで・・・イケメンと美女の言い合いの間に挟まってるんでしょう?

ーーーーーーーーーーーーーー

今日は、待ちに待っった、入隊日!!あの原作4巻で見た広場に集まっている!!感動!!
でも・・・
朝から鬼のどんちゃん騒ぎ…しれっと真史叔父さんまで来てなかった??わ〜わ〜と、朝から豪勢なご飯が振る舞われ、かなたお兄ちゃんはハイテンション。一眼レフカメラを一生懸命磨いてたな〜
何をする気なのかな???
・・・。

・・・。
なんか、めっちゃ目立ってるぅ～。あれか？白髪が目立つのか???
※違います。
だって、顔の上の方に視線がめっちゃ向いてるよ???やっぱ、白髪のせいなのか???
※違います。
※みらいは、とんだ勘違いをしてますが、ライの姿のみらいは、とんでもなく美少年です。それこそ、街をあると皆が振り返るくらい。（その事を本人はすっかり忘れているため、ずっと白髪のせいだと思ってます。）そして、顔の上の方に視線が集まるのは、顔が綺麗すぎて見えないだけです。そんな経緯があったので、注目を浴びているだけです。そんだけ。くそ。イケメンが。
・・・なんか、今、ヘイトを食らったのは、気の所為??
ざわざわと騒ぎ出す会場。視線は私から、ある男女の方へ。
あ・・・！あの声は!!!
二宮匡貴!!!
加古望!!!
まじか…！キャラがバチクソに強い人が同期じゃないですか…!!
遠く忘れ去られていた、ただ、推しを愛でたいだけの私の計画は成就するのか、怪しくなったきた・・・！ヤヴァイ!!
「おい。加古何故俺の隣にいる。」
「嫌だわ。二宮くんが隣にいるんでしょう??」
「あ〝？」
「そんなに嫌なら、離れれば良いんじゃない？私だって嫌よ？ほら見て、入隊式から悪目立ちしてるじゃない。二宮くんのせいで。」
「は？ふざけるな。目立ってないだろうが。」
「二宮くんほんとに言ってるの？相変わらずね、貴方のその周りが見えないとこ。ボーダーでやっていけるのかしら？」
「うるさい。お前に心配されることではない。」
「あら。そういう無愛想なとこ直したほうが良いわ。絶対損する。」
「は。お前のワガママに言われたくないな。」

ふわあああああ!!!喋ってるうううう!!推しが!!!もう、死んでもいい!!会話!!二次元創作で、穴が開くくらい見た、お二人の絡み!!ふ・・・嗚呼嗚呼!!感動!!やばい。命日かも!今日命日かも!!!

私は、愚かなことに気づかなかったのだ。入隊会場の二階から一眼レフで、私を連射してたかなたお兄ちゃんの姿を・・・!不審者を!!そのとなりで、秀次くんがドン引きしてた事を!!!

「ボーダーの忍田真史だ。

君たちの入隊を歓迎する。」

ニコッと私の方を見て笑・・・にやけてるな。あれは…。

「君たちは、C級隊員…つまり、訓練生として入隊するが、三門市人類の未来は、君たちの双肩にかかっている。

日々研鑽に正隊員を目指してほしい。」

「君たちと共に戦える日を待っている。

私からは、以上だ。この先は・・・風間隊員と東隊員に説明を一任する。」

「はじめまして。風間蒼也だ。」

「東春秋だ。」

「さて、これから、入隊指導を行う。まずは、ポジションごとに分かれてもらう。

攻撃手と銃手志望の者は、此処に残り、

狙撃手志望の者は、東さんについて訓練場へ移動を。

以上。」

ーーーーーーーーーー

「・・・改めて紹介しよう。俺は、攻撃手と銃手の担当、風間蒼也だ。六頴館高校2年だ。これからよろしく頼む。」

どっと驚きを表す、入隊生たち。そうだよね〜蒼也くん年齢詐欺行けると思うんだ〜でも、体の大きさ以上の男前なんだよね〜そこがめちゃめちゃ推せるんだけど!!!

「改めて、入隊おめでとう。忍田本部長もさっき、おしゃっていたが、お前らは、訓練生だ。B級に昇格して正隊員にならなければ、防

衛任務には、就けない。なら、どうすれば正隊員になれるのか。それを最初に説明しよう。各自左手の甲の数字を見ろ。」
私は、バイパー：２５３９でした。なんて、微妙な数字…３…９…。あの兄貴だな。よし。ランク戦でボコろう。そして、ポイントガッツリ貰おう。まだ、Ｂ級とＣ級は、ポイントの奪い合いできるバズだから。
「お前らが今起動させてるトリガーホルダーには、各自が選んだ戦闘用トリガーが一つだけ入っている。その数字は、自分が今そのトリガーをどれだけ使いこなしているかを表す数字だ。」
「そして、その数字を４０００まで、上げること。それがＢ級昇格条件だ。」
「殆どの人間が１０００ポイントからのスタートだが、仮入隊の間に高い素質が認められた者は、ポイントが上乗せされた状態でスタートしている。当然その分即戦力として期待されている。そのつもりで努力を惜しむな。」
私は、スカウトなので、仮入隊は、スキップされている。ということは、確定だね。うん。ボコろ！
「ポイントを上げる方法は、２つ。週二回の合同訓練でいい結果を残すか、ランク戦でポイントを奪い合うか。
まずは、訓練の方からだ。ついて来い。」
その時、そっと、蒼也くんに近づく。
「ねえ。蒼也くん。」
「みら・・ライか。ライ違うだろう。此処では？」
「・・・蒼也。このふざけたポイントは??」
「ああ。それは、忍田本部長、鬼怒田開発室長、あの阿呆しゅうからのささやかなギフトだそうだ。」
「へぇぇ～。しゅうお兄ちゃん…しゅうはボコる。」
「まあまあ。皆浮かれているんだ。多めに見てやってくれ。」
「む。蒼也くん…ごほん!!蒼也がそう言うなら…。」
「到着だ。まず、最初の訓練は…

対近界民戦闘訓練。
仮想戦闘モードの部屋の中でボーダーの集積データーから再現された近界民と戦ってもらう。
仮想戦闘モードでは、トリオン切れの心配は、いらない。力一杯己の実力を発揮しろ。
そして、今回戦うのは、
初心者レベルの相手、大型近界民。
訓練用に少し小型にしてある。攻撃力はないが、その分装甲が厚いのが特徴。
制限時間は、一人５分。早く倒すと高得点だ。自信のある者は、高タイムを狙え。
説明は、以上だ。」
「各部屋、準備ができ次第開始しろ。」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
―二号室　終了。　記録４５秒。―
ざわざわ。
二宮さんが終わったようだ。１分切った人が初めて出たため、周囲が騒いだ。
私は、１番最後なので、皆の記録を見てます。
「あら、二宮くんに先越されちゃったかしら。」
―５号室　終了。　記録３０秒―
お次目立った記録は、加古さん。
「俺より早いくせによく言う。嫌味か？」
「あら、二宮くん嫉妬？醜いわよ。負け犬の遠吠えってやつかしら。」
「あ〟？」
「ふふふ。」
「あれ～？あ！間に合った～？蒼也～ライまだ終わってないよね～？」
しゅうお兄ちゃんのビックボイス!!!

「うるさいぞ。しゅう。お前の手配で、ライは、一番最後だろう。」
「あ！蒼也!!それ言っちゃダメなやつ!!!」
ほ～う。やっぱり、ポイント剥奪の刑に処す♡
ギロッとしゅうお兄ちゃんを睨む。
「ひぃ!!!どうしよう。ライに睨まれちゃった…！俺どうなんの???」
「知らん。自業自得だろうが。」
「蒼也～～～!!!あ。でも、プンプン怒ってるライも可愛くね？」
「それは、そうに決まっている。」
ん？なんか喋ってたな？何話したんだろ??
・・・まあ。切り替えて、私も仮想戦闘訓練やりますか！
ふふふ。二人をびっくりさせちゃうぞ！
―3号室　用意―
―開始―

入隊式　弐

―3号室　用意―
―開始―
ポワーン。シュン!!
「みらいのやつ。初っ端なから、派手にする気だな。」
パシューン・・・パラパラ・・・。
―3号室　終了―
―記録0．2秒―
は????

ニヤリと美しい少年が笑った。
ーーーーーーー
訓練生は何が起こったのが、理解ができなかった。
理解が出来ず、イカサマだ!と囃し立てることも、喚くこともできない。
そして、ただ、ただ単純に見惚れていただけかもしれない。
美しい姿でネイバーを倒す美少年の姿に。
パンパンと手を叩き、
「これで訓練は、終了だ。皆、ラウンジへ。」
「おっと～蒼也～多分だけど、何が起こったか、話したほうが良いんじゃないの?」
「そんな事知らん。本人に聞く度胸があるやつだけ聞け。
それでは、ラウンジに行った後、合同訓練を行う。
皆ついて来い。」
「まっ。そうだね～」
その後…。
地形踏破訓練、隠密行動訓練、探知追跡訓練を終え、ランク戦へ!!
「ライ。お疲れ様。どの訓練もすごかったな。特に…隠密行動訓練。足音一つ聞こえなかったぞ。」
「ああ。あれはね!忍者の歩き方なんだよ～足音を全く立てず歩く

んだ～今度教えるね!!」
「うん。あっありがとう。でも、ライ。」
「何？」
「その喋り方は…可愛いが、男の喋り方ではないからな。気を付けるんだぞ。」
「あ。そうだな!!蒼也!!ありがとう!!」
「じゃ、ランク戦の説明をしていくぞ。」
「は～い!!」
「うっ！・・・今。いるのが、C級ランク戦ブースのロビー。空いているブースに入るぞ。」
「C級ランク戦は、基本的に仮想戦場での、個人戦だ。
やり方は、簡単。このパネルに武器とポイントが出てるだろう？」
「うん。」
「これが今ランク戦に参加している隊員。好きな相手を選んで押せば対戦できる。逆に向こうから指名されることもある。」
「ほうほう。」
「対戦をやめたい時は、ブースを出れば良い。」
「へ～。早くポイントを稼ぐには、どうすればいいの？」
「なんだ？早くB級になりたいのか？」
「うん。B級に上がると色々と使えるんだろ？それに、できることも増える。」
「なるほどな。わかった。説明しよう。ポイントが高い相手と戦えば良い。そうすると、ポイントが沢山もらえる。しかし、「逆に自分よりポイントが低い相手だと、勝った時、ポイントがあまり貰えなくて、負けた時は、沢山ポイントが取られてしまう。」だな。って、よくわかってるじゃないか。」
「うん。説明ありがとな。」
「・・・ふたりきりの時は、いつもどおりで良い。」
「？わかった。ありがとう！えっと…」
「名前は、ふたりきりの時でも、蒼也のそのままでいい。うっかり、

ボロが出てしまっては困るからな。」
「うん！蒼也!!」
ーーーーーーーーーーー
「よ～し。あのおふざけおにいちゃんをボコボコにするために、肩慣らしで誰かと戦うか～ふ～む。だれにしようかな～あ。」
僕と同じ射手の人だろうか？アステロイド：２２５６の人がいるではないか！よ～し。その人にしよう。ポチッとな。
キュイーン
お！転送された!!すごっ!!テンション上がるわ～
―対戦ステージ「市街地Ａ」 Ｃ級ランク戦　開始―
？みらい様!!?
おっ。マリーどしたん??
？ワタクシ、マリーは、戦闘中は、サポート役をいたします!!相手のステータスを表示することが出来ます。表示しますか??
マリーとっても言いづらいんだけど・・・???
戦闘中にトリオン操作のサイドエフェクトは、あんまり使わないようにするつもりなんだ。自分の実力で戦闘は、するつもり。
？えっと…それは・・・？
マリーのサポートは、いらないかな。
？さっ左様ですか。しょぼん。？
あ！でもね、マリーにやってほしいことがあるの！
？なっなんでしょうか!!なんでもお申し付けください!!?
マリー目線からの戦闘評価がほしい。あと、脳内でのシュミレーションで相手をしてほしいし…
?!!!　わかりました！お役に立てるよう、プログラムを準備し、がんばります!!?
うん！ありがとう!!
？では、ランク戦頑張ってください!!ワタクシは、準備に取り掛からせていただきます!!?

「さっ。やりますか。」

デデンデンデデンの音楽を脳内で流しながら、バイパーを駆使していく。

あ。

リアルタイムで、弾道は、引けました。トリオン操作のサイドエフェクトを持ってるからか、今世で、立体ゲームばっかりやってたせいかは、わからないけど～。

さあ。C級でもきちんと頭を使いましょうか。せっかくバイパーだしね。でも、やりすぎず…やりすぎず…。

よくありがちなんだよね～オリキャラ主人公がチート使いすぎて、変な噂たって、ポイントが全然稼げないの。

僕が考えた基本戦術は、こう。

1：キューブ出しまーす。

2：威力が落ちない程度に細かく割りまーす。

3：3分の2くらいまっすぐ飛ばしまーす。

4：敵のキューブの相殺と相手を動かして…

5：残りを遠回りさせておいて…死角から打ち抜きまーす。

はい。終わり。

この方法、ログとか、第三者の目からしかわからんのよね～

わかったとしても、死角からの攻撃なので、何処から来たかわからないし、そして、そっちに注意をしすぎると、前の3分の2にやられる。

うははは。

こんな調子で、ほいさほいさとやっていたら…バイパー：2539→3534までいきました～

やったね。

お。

こっちに申し込んできた方がおられる。
よ～し。返り討ちにしちゃうぞ!!!
ーーーーーーーーーーー
「ねぇ。城戸さん。うちのみらいは、どう?すごいだろ?」
「ああ。」
モニター越しにみる、少女…少年は、C級とは、思えないほどの立ち回りや、トリオンコントロールをして、敵をただ、黙々と倒していた。
「・・・あの子は、特別なんだ。だから、俺が守らなきゃ。ふふ。」
「ああ。」
そう、カラカラ笑う、少年。神風しゅう。その少年は、明らかにいつもと雰囲気が違った。
「ねぇ。城戸さん。俺はね、放任主義者って言われてるんだけど、」
「ああ。風間隊員から聞いている。」
「…実は、そうじゃない。ただ、面倒なことが嫌いなだけ。手を懸けたいのは、家族だけなんだ。まあ。蒼也と秀次は家族みたいなもんだけど…。・・・まぁ。それ以外どうでもいいんだよ。
だからね、城戸さん、俺は、かなたとみらいを駒の様に使われるのは、心底嫌だ。」
「・・・・・。」
「取引しようぜ。城戸さん。俺は、アンタの駒になってやる。」
「具体的には?」
「多分、この調子でいけば、派閥ができるぜ。
反ネイバー派と、
街を守るのが最優先派と、
旧ボーダーの後を継ぐ、ネイバーと仲良くしよう派。
俺は、その反対派のスパイになってやるよ。」
「・・・わかった。承諾しよう。」
「ありがとー城戸さん。でも、多分スパイとして、成果があげられるのは、少ないからな?期待しないでくれださいよ?
スパイって大変だし、バレやすいから～。」

「それは、わかっている。ここぞと言う時に頼んだぞ。」
「神風　了解。」

入隊式　参

―対戦ステージ「市街地Ａ」　Ｃ級ランク戦　―

―開始―

「さあ。行く…」「よお!!」

!!話しかけてきた!!

「あ。こんにちわ。」

「おう。お前、さっきの対近界民戦闘訓練で、０．２秒叩き出した、風神ライであってるよな?」

「あ。はい。そうですが…。」

「さっきの、０．２秒のネタ教えてくれよ。」

「・・・名前も知らない人に言うのはちょっと…。」

「あ〟?生意気なやつだな!良いぜ、教えてやる。俺の名前は、諏訪洸太郎だ。」

!!!!

ナ!!え…?諏訪洸太郎??」

マジ??まじか!!あの、クソマップじゃねえか!の諏訪洸太郎!?初キューブ化された???

「??おい。どうしたんだよ?」

あ!僕が驚いた顔してたから、不審に思われてる!!

「あ。いや～一分切ってた数少ない方だな～と思って～」

「あ〟?覚えてたのか?まあでも、０．２秒に言われたくないぜ。」

「あはは。ありがとうございます。」

「いや、褒めてねーから。で?ネタは?教えてくれんのか?０．２秒??」

「その言い方やめてください。ライで良いです。０．２秒も嫌だし、苗字呼びも嫌いなんで。

ネタの件ですが、分かりました。この１０本僕を楽しませてくれたら良いですよ。」

「あ〟?生意気なやつだ。ぶっ放してやんよ!!」

こうして戦闘は開始された。

一本目：あの戦法で勝った。
二本目：諏訪さんのゴリ押しに負けた。くっそう！
三本目：容赦なくバイパーの雨を降らしました。やったぜベイビー!!

？

最終結果　ライ　○×○○×○○○○○
　　諏訪　×○×○×○×
　　×○×○×
　　７勝３敗。

「は～楽しかった～」
「弱いものいじめは楽しかったか？コンにやろう。お前本当にＣ級か??」
「ひどいな～今日の入隊式居たじゃないですか～」
「そうだな～そういえばいたわ。白髪のやつが。」
「はっ!!やっぱ、それで目立ってたんですか!?」
「あ？お前それは違うだろう…って、忘れないうちに聞かなきゃな。楽しかったんだろう？教えろよ。」
「はいはい。教えますよ～あれは、チョー細かく早く分割しただけなんです。」
「どーゆーことだ？」
「射手って、キューブ出してから指示するんですよ。でも、それじゃ、めちゃめちゃ遅いんで、０．１、０．１くらいのスピードでするように待ち時間にいじったんですよ。そして、威力と弾速にトリオン全ふりして・・・」
「ちょっ、ちょっと待て！そんな事入隊初日でできるか??」
「あ。あれですよ。いじり方は、親戚に先にボーダー入った人が居て、その人に教わりました。僕その人のスカウトで入ったんで。」
「あ～訓練の時入ってきたやつか??」
「はい。そうですよ～蒼也…試験監督と同い年の人です。」
「まじ？試験監督と同い年??身長差ありすぎんだろ！てことは俺と同い年??」
「そうですね～。それに、蒼也って、年齢詐欺絶対行けると思うんで

すよ～
…あ。良い忘れてた！諏訪さんゴチです!!」
「お～お～そんくらいいいわ。それに、お前とは、これから良く関わる気がするしな～」
「ラノベの読み過ぎでは??」
「お。ライ、お前読書を嗜むのか？」
「あ！諏訪さんも？僕最新のネット発しか、あまり見ないんですけど。」
「はぁぁあ??それは、損してるぞ!!うちの本棚の本貸してやる!!」
「いや。良いですよ～僕自分が読もうって思ったの以外読まない主義なんですぅ～」
「うるせぇ！若いうちから色んなジャンルを読め!!」
「え～」
「え～じゃねえ！明日持ってくるかんな!!」
「は～い。」

は～あ。・・・・・・やっぱぁ!!諏訪さんと仲良くなっちゃったよ…。良かった～やっぱ、諏訪さんリアルで会ってもいい人～
と思って、何も考えずに、振り返ったのがまずかった。
ボフ。
「あ！すみま…せ…ん…。」
後の射撃の王、二宮匡貴の胸にぶつかった。
「あ…。その…」
「おい。お前。歳はいくつだ。」
はっ！この状況で答えさせる気か!!それは、いかん！(心的に！)なので、離れて答える。
「13ですけど。(嘘)」
「何処の中学だ。」
「三門…ごほん!!六頴館中等部通信科1年…。」
「さっき話してたしゅうさんと・・・」

「ねえ。二宮くんとばかり喋ってないで、私とお喋りしましょ。」
「おい加古。邪魔だどけ。こいつは、今俺と喋っている。」
「一方的に質問してるだけじゃない。それは、会話とは言わないわ。それに、年下にその態度はないんじゃない？ねえ。貴方もそう思うでしょう？」
「うるさい。俺がどんな態度しようとも勝手だ。」
「あら。そんな態度じゃ、怖がっちゃうわよ。年下には。」
「チッ。怖がってないだろうが。」
「二宮くんには、わからないじゃない。そんな事。実は、怖がってるかもよ。」
ああ。目の前にイケメンと美女。恐怖なんて、滅相もない。感謝しかない、ヲタク魂。
「あ。別に怖がって、ないです。ダイジョブです。で、お二人は、なんの御用でしょうか？あ。そちらの女性からどうぞ。名前も教えてもらえると光栄です。」
「おい、何故加古からなんだ。」
「あら。二宮くん。そんな騒がないで。うるさいわ。」
「あ〝??」
「あ～。喧嘩しないでくださいぃ～!!!
女性の方からって行ったのは、貴方がしゅう絡みのことだからです。」
怖い・・・！喧嘩しないでぇ～!!（恐怖が感謝を覆した。）
「ほらもう。二宮くんの早とちりじゃない。
私は、加古望。よろしくね。私が聞きたかったことは、訓練のネタの答え合わせをしたかっただけよ♪」
「二宮匡貴だ。聞きたかったのは、お前としゅうさんの関係だ。」
「ああ。そうだったんですか。とっても語弊をうむ言い方をなさる…。
しゅうとは、親戚でなんです。そして、ネタのほうは…」
諏訪さんと同じ説明をしました。
「へぇ～凄いわね！ねえ。一緒にランク戦やりましょう？あら。二

宮くんまだ居たの？」
「居て何が悪い。」
ニッコニコな加古さんと明らかに眉間にシワが寄りまくっている二宮さん。
気まずい状況では、あるが心を鉄にして、ある疑問を問うた。
「あの～少し訪ねたいんですが…なんでそんなにしゅうのことを知りたがるんです？」
「あ゛？」
「は～。二宮くん。質問にも怒りで返すの？原始人なの？もう。二宮くんがこんなのだから私が答えてあげるわ。
二宮くんはね、しゅうさんのファンなの。」
「？ファン??」
「あら、六頴館なのに知らないの？しゅうさんってとても人気でファンクラブがあるくらいなのよ？」
「は？」
「ふふふ。予想外って顔してるわ。家だと違うのかしら？
神風しゅう。いつもクールで、何事もサラッとこなす。成績は学年トップに常にいる王者。特に得意科目の化学は、１０００年に一人の逸材と言われれほど優秀。本当に非の打ち所がない人だわ。」
あれれ～??うちにいる時と全然違う…。放任変態主義で、料理は何を作ってもゲテモノしか作らないしゅうお兄ちゃんは???
「で、二宮くん、そんな完璧人間のしゅうさんに困っていたところを助けてもらって、そこから喋るようになって、薫陶を受けちゃったらしいのよね～」
「はああ。じゃあ、聞いたのって…」
「そう。嫉妬よ～。二宮くんも可愛いとこあるのね～」
「チッ」
「え、じゃあ僕がしゅうのスカウトで入ったって言ったら…あ。やべ。」
「・・・・・・ブースに入れ。」
あああああ!!やっぱり!!!

「しゅうさんが見込んだ実力。見せてもらうぞ。」
「駄目よ。二宮くん。ライくんは私とするから。」
「は？うるさいぞ。俺が先だ。」
「先に誘ったのは私よ？」
へっ平行線になってしまった!!!
「じゃあ、三つ巴にすれば良いんじゃないでしょうか???」
「「それだ（ね）。」」

入隊式　肆

またもや、デデンデンデデン♪の音が流れてきそうな戦闘が始まりました。

加古望ＶＳ風神ライＶＳ二宮匡貴の三つ巴バトル・・・。

射手３人の三つ巴となると・・・超ド派手な打ち合いバトルになるんですよね…。でも、皆今日は入ったばかりのＣ級。トリガーの種類は、それぞれ１種類しかありません。

手札はそれぞれ・・・

加古望：ハウンド

風神ライ：バイパー

二宮匡貴：アステロイド

となっている。

三人は、気付いていないが、Ｃ級ランク戦のモニター前は、ライブ会場みたいに、大盛りあがりだった！

「うお!!!すげー!!ド派手だな!!派手派手だな～!!!」

「今日皆入隊したのよね???」

「あのバイパーの操る精度えげつない……！」

そう・・・。皆自由に言っていたが、皆の総意は、一つ。

〝とてつもない新人が入ってきた!!〟

恐怖する者、準バーサーカーになっていて、歓喜する者、皆様々だった。

その隣のブースで太刀川慶と迅悠一が、熾烈なバトルをしていたが、今日入ったＣ級とは、思えないバトルを隣がしているため、影とかしていたのは言わないでおこう。

ーーーーーーーーーー

このバトル、簡単な勝ち方は、漁夫ること。うまいこと、加古さんと二宮さんが出会ってくれれば…。

ドンドン!!パチパチ!!

お。誰かが放ったようだ。こちらには…来てない。

ドンドン!!

あ。両方ともこっちに来てはない。ということは…勝利の女神は、僕に味方してるれたうようだ!!
二人は、バンバカ撃ち合いをしている。・・・ん～。このまま漁夫ってもなんか、後で言われそうだ…。それに、せっかく二人と戦えるというのに少し寂しい気もする。それに、待ち時間が暇だ。
今の僕にある選択できる行動は、３つ。
１：このまま、つまらないけど、漁夫る。
２：撃ち合いが終わって、勝者と後に１ＶＳ１で戦う。
３：両方とも公平に同時攻撃
ん～。よし。せっかくだから、３にしよう。
「バイパー」
予め玉トリガーをだしておいて、いざゆかん!!
家の屋根をぴょんぴょん飛んで、二人が見える位置へ。
よし。
リアルタイムコントロール。
二人めがけて、一直線に進んでいく。すかさず、二宮さんは、バイパーを避けつつ、守りに入る。加古さんは、相殺する気らしい。
しかし…
玉トリガーは、ボワッと分かれ、二人を蜂の巣にしようと弾道が、二人の前の寸前で変わる。
「!!」
ふたりとも驚いたようだが、これは、なんとか回避。ハウンドだった、加古さんは、余裕があったのか、反撃とばかりに、打ち返してくる。
怖い!!笑いながら飛ばしてきたぞ!!
こちらも負けじと相殺。
ぐぬぬ!!鬱陶しい!!
ええい！もう怒った!!怒ったカンナ!!ユルサナイカンナ!!橋本○奈!!!
ザザザザ!!!
ぎゃーあ!!アステロイドのスコールだ～二宮さんだな!!あわわわ

!!エグいエグい!!相殺しつつ、取り敢えず距離を置こう!!死ぬううう!!!

・・・・なんちゃって！

ボン!!ボン!!

アステロイドのスコールによって、爆発が起こる。

僕が、待機中何も仕込んでないと思って？

フッフッフッ…。なわけ無いじゃん!!

周りの家に置き玉を大量に仕掛けておいたのだ!!!

ガラガラ

その置き玉により、加古さんが瓦礫崩れに合い、動けなくなった。

そこを予測していたように、バイパーの雨がふり、加古さんがベイルアウト。

二宮さんは、加古さんのベイルアウトが分かり、すぐさまアステロイドを放とうとしていたが、一歩遅かった。

ライの仕掛け2、対近界民訓練と同じ様に威力と弾速に全振りされた、バイパーによって、すでにもうトリオン供給器官を射抜かれていた。

―活動限界　ベイルアウト―

「勝った。」

―三つ巴バトル終了!!。　勝者　風神ライ―

うおおおおおおお!!!とモニター前は、湧いた。そりゃあもう、めっちゃ湧いた。熾烈なバトルを繰り返していた、太刀川慶と迅悠一が出てくるくらいだった。

「お。なんだか、外が騒がしいな。」

「そうだね。太刀川さん。…あれ？こんな未来見えたっけ？俺読み逃がしっちゃったかな？」

「そうなのか？じゃあ、この攻撃も読み逃がすのか??」

「そこは、ちゃんと見えてるよ。太刀川さん。」

弧月同士で、熾烈なバトルを繰り返すこの二人。この勝負の勝敗は…？

「しゃ！俺の勝ちだな。迅！」
「あーあ。外に気を取られてやられちゃったよ。」
「負け惜しみか？迅。」
「よくそんな難しい言葉知ってたね。太刀川さん。」
―活動限界　ベイルアウト―
―ランク戦　１０本終了　引き分け―
「はあ～!!また引き分けか～」
「最後負けたのは、悔しかった…！」
「これで、１３４５勝１２４５敗７７７引き分けだな～」
「え・・・？太刀川さん覚えてるの…？」
「ん？これくらい覚えられるだろ。」
「その脳を何故勉学に使えない??その脳を少しでも勉学に使えば忍田さんとしゅうさんが大助かりするのに…！」
「ははは～」
ざわざわざわ
「あ。この注目の的が出てきたみたいだよ。」
ーーーーーーーーーーーー
「はあああ。疲れた。」
ブースから出て一言。ああ。甘いものがほしい!!!へろへろで、ボーダーの購買に行こうとすると、
「おい。」
「へにゃ??」
「何処に行こうとしている。勝ち逃げする気か。」
「あ。いやその…甘いものを…」
「あら。二宮くん。ウザ絡み??醜いわね～」
「あ、？ウザ絡みじゃない。…風神。もう一回勝負しろ。もう一戦すれば、わかる。」
「あ。苗字呼びはやめてください。嫌いなので。…ライで良いです。」
「わかった。ライ。もう一回勝負しろ。」
「嫌です。」

「!?…なんでだ。」
「疲れたからです。」
「は?」
「もう。二宮くん嫌がってるのに駄目じゃない。」
「うるさい加古。邪魔だ。消えろ。」
「あら。なら、二宮くんが消えてくれないかしら?」
「なんで・・・」
「ライいいいいいいいいい!!!!!」
「うるさい。かなた。しゅう。」
抱きついてきた。この阿呆兄弟。
「「すごかったな~えらいな~流石ライだな~」」
よしよし、撫で撫でしてきます。ヤメテ。
「あ~。うん。ありがとう。見てたんだね。」
「ああ。僕は、入隊式の時からな!あ。ライその顔は、甘いものがほしい顔だね!はい。あーん。」
「俺は…馬鹿を探しに来たらついでにな。何処だ。太刀川!!」
入隊式から居たんかい!でも、甘いもんくれたし良いや。
しゅうは、もう太刀川さんの子守させられてんだね。
そして、ボーダーよ。しゅうの一言で、しゅうから、太刀川さんへの道が開けるのは、教育されすぎじゃないか??
「げっ!」
「そこか。ちょっとこっち来いよ。迅もいんじゃん。」
脅しに渋々やってきた太刀川さん。迅さんもあちゃ~という顔でついてきています。
しゅうは、当然のようにアイアンクローを太刀川さんにして、言う。
「あがががが!!」
「高校の課題を終わってないのに何してやがる。あ。二宮。よ!」
「はい。しゅうさん。ボーダーで会えるなんて光栄です。」
あ。
二宮さんポッケから手を出して…!45度のお辞儀!!それを見て、加古さんがニヤニヤしてる。

…てか、アイアンクローしながら、話すの？太刀川さん瀕死状態よ??

「おう。お。もう、そんなポイント貯めたのか。凄いな！」

「はい。ありがとうございます。」

「頑張れよ。あ。そうだ。二宮同じ学年のこの阿呆の課題見てやってくれないか？」

「！はい。分かりました。」

「お～ありがとな。」

ポンっと二宮さんの頭に手を置く。それを見て、加古さんが、

「あ～。二宮くんばっかり話して、手もおいてもらってずる～い!!」

「お～お～加古ちゃん。ごめんごめん。」

と、二宮さんの頭から手を放し、加古さんの頭を撫で撫で。

ああ！二宮さんがすんごい不服そうな顔してる!!もっとなんでしてくれないんだ。みたいな顔…！

「しゅうさん。加古じゃなくて俺にしてください。」

「やだ。二宮くんさっきしてもらってたでしょう？」

「もう加古には、十分です。」

「二宮くんこそ、十分されてたじゃない。」

「はいはい。どーどー喧嘩やめなさい。ん～両方にしてやりたいけど、片手ふさがってるしな～」

いや。アイアンクロー解けばいいだけじゃん！

「まあ。それも、この阿呆の課題が終われば解決するからな。よし。いくぞ。二宮～」

「はい。」

「加古ちゃんも手伝ってくれる？」

「いいわよお～。」

「あ～。なんかがんばれ～しゅう～二宮さん～、加古さん～」

太刀川さんをアイアンクローしたまま行ってしまった。

そうすると、向こうから、今度は、秀次くんが。

「おい。かなたと・・・迅!!」

「お。秀次どうしたんだ？」

「これから、訓練しようと思うから、相手してもらおうと思って…なんでここに迅がいる…！」
「ああ。さっき、太刀川さんとしゅうがいたんだ。それでな。」
「そういうことか。」
あ、わかっちゃうんだ。多分日常茶飯事なんだな～。
ああ。そして、ここは、原作通りだな。なんか、空気が重い。
「・・・じゃあ、さっさと行こうぜ。秀次。」
「ああ。」
空気を読んで、かなたがいった。
迅さんを睨みながら立ち去る秀次くん。おっ重い…。
あ。今気づいたけど、迅さんとふたりきりだ。なんか、こちらをじーっと見てくる・・・！
「あ。それでは、僕も失礼します。」
「・・・・・・・ねえ。ライくん。ちょっと話そうよ。」

ーーーーーーーーーーーーー
玉狛支部の近くまでやってきた。
わあああああ！聖地!!
心の中は、ウッキウキです。
「人に聞かれてくなかったからね。
此処まで来てもらったよ。
ねえ。ライくん。

なんで、君の未来が見えないのかな？」

「ねえ。なんで未来が見えないの？」
俺、迅悠一は、初対面のコにそんな事を聞いた。
おかしいやつって思うんだろう。
未来が見える的な発言をした俺は。
「あ。それは、自分も未来視持ちだからっすよ。だからじゃないですかね？」
・・・・。
そんな軽く言うとは、思わなかった。
驚きもしないし。
て、え??
未来視持ってんの???
「「え？未来視持ってんの??」」
!!
心の中が読まれて!?
「言うと思いましたからね。普通未来視なんて持ってたら…
ええ!!!
って、なるでしょうから。それに、まさか相手も持ってるなんて思わないでしょうし。」
年下に、読まれている…！
なんかとても恥ずかしい!!
「ええ～。じゃあなんで、俺ライくんの未来見えないの??サイドエフェクト検査引っかからなかったの？」
「ああ。それは・・・
―トリガー　オフ―
僕…私は、巫女の一族だからなんですよ。
だから、サイドエフェクトではなくて家系能力だからなんですよ。
なんで見えないのかは…家系能力の方が力バランスが強いんじゃないんですか？知りませんけど。」

そこには、赤茶色のきれいな髪が夕日によって美しい金色になった可憐な少女がいた。
ポワッと頬が赤くなる俺だが…
「えええええええ???」
ラッライくんって、!!女だったの??」
今は、びっくりの方が勝っている。
「ええ。しゅうお兄ちゃんとかなたお兄ちゃんの妹です。」
「え？マジ？あの二人の??え？じゃあ歳は…？」
「ボーダーでの年齢の一つ下の今、１２歳です。」
「え？戸籍とかは??」
「唐沢さんに偽装の戸籍作ってもらいました。大規模侵攻後だったから作りやすかったって言ってました。」
「え。お尻触っていい？」
「うちのかなたお兄ちゃんは、シスコンですよ。ちょっと男子とお喋りしただけで、かなたお兄ちゃんとその後、お喋りしたらしいです。お喋り後、その男子は、精神を抉れた姿で帰ってきましたが。それでも良いなら。」
「え？なにそれ。怖っ！」
その話、実は、のちのＳ級隊員、天羽月彦の事を指していた。
まあ。本人は、話が怖かったのではなく、ただ単純にかなたのどす黒い悍ましい黒色に怯えてたらしいが…。
ーーーーーーーーーーー
その秘密を話した同時刻。ボーダーの一つの会議室で。
「おいっ!!!阿呆川!!寝るんじゃねえ!!」
「痛い!!しゅうさん!!ローキック、膝にしないで!!!」
「おい。クソ川!!何故こんな公式に当てはめることすら出来ない。小学校からやりないしたほうが良いんじゃないか？」
「あら。太刀川君。英語の採点したけど、文法も全然駄目じゃない。」
「おい!!阿呆川!!そこは、この公式だっってんだろ!!教科書開いてるのに、なんで、わかんね—んだ!!!」

太刀川さんは、しばかれてました。
ーーーーーーーーーーー
「そっか。俺たち未来視仲間だね。」
「そうですね。迅さん。これからは、貴方だけが未来の責任を持つ必要は、無くなりました。
　いわば、私達は共犯者です。」
人差し指を唇に当て、そう言って、妖艶な笑みを浮かべる。
また、俺は、赤く頬が火照る。
なに、振り回されているんだ。１２歳の少女に!!
ブルンブルン顔を振る。
正気に戻れば、彼女の言った言葉の重さが、脳が理解した。
「・・・・俺だけの責任じゃないのか。
　・・・・もう、一人で悩まなくてすむの？」
「ええ。そうですよ。
　いままで、貯めてた気持ち、全部教えて下さい。
　嫌な未来が見えたら共有しましょう。
　私になら、泣いていいんです。」
「ふふ、じゃあ聞いてくれる？」
「はい。」
彼女は急に立って、俺の前に来た。
何をするのかと思って、はてなマークを浮かべていると、彼女は、どん！と俺の前で両手を壁について、俺を覆う。
それは、いわゆる、壁ドンで…。
目と目を合わせて、おでこをくっつけて、壁ドン状態でこういった。
「遠慮しないでくださいね。
　もう、絶対一人で悩まないでください。」
彼女のきれいな赤い瞳が俺の心を捉えた。
それからポツポツと恥ずかしかったがその状態で喋る。
ーーーーーーーーーーー
また、ボーダーのとある会議室にて…
「あ！太刀川君もしかしたら、栄養が足りてないから、勉強がはかど

らないんじゃない？」
「そうだね。加古ちゃん。こいつは、脳に栄養がいってないからこんなにも勉強ができないかもしれない。」
「「俺（私）が作るよ!!」」
「お！しゅうさんと加古の料理？」
「しゅうさんの料理!!」
「主に俺が作るから、加古ちゃんは、手伝ってくれるかい？」
「わかったわ。しゅうさん。」
しゅうと加古さんが離脱中。
「おい。太刀川。課題は、進んでるのか…って、二宮か。ご苦労。」
「こんにちわ。風間さん。３分の２くらい進みました。」
「おい。太刀川。早く終われ。」
「待ってよ。風間さん。俺栄養不足なんだ。だから、飯食ったら、やるから～。」
「うだうだ言わず、さっさとやれ。創立して、半年のボーダーの汚点にならないよう、努力しろ。」
「いや～。まってよ～今しゅうさんの飯待ちなんだよ～」
「何？しゅうの飯だと・・・？」
「はい。今このクソ川にしゅうさんがありがたいことにご飯を加古と作ってるんです。」
「そうか。ふたりとも頑張れ。俺は、たった今用事が出来た。」
「？せっかくですから、食べないんですか。」
「いや。遠慮・・・」
「出来たぞ～おっ。蒼也もいるじゃん。一緒に食べるぞ!!同い年の諏訪も連れてきたんだ！」
「遠慮する。今は、お腹がいっぱいだし、用があるのでな。」
「嘘つくのへただな～蒼也は。ほら食えよ。」
「いや…。やめ…グフッ!!!」
バターン!!
無理に食わされて、風間蒼也は、倒れてしまった!!
「「・・・・・」」（諏訪・太刀川・二宮）

ーーーーーーーーー
俺は、全部話した。
初対面の子にする話では、絶対なかったけれど。
俺は、途中で泣いてしまった。
でも、少女は、相槌を打ちながら、ただ、無表情で聞いていた。
無表情の彼女は少し怖かった。
「話してくれて、ありがとうございます。
　それでは、私のことも話さなければ。」
彼女も、話しだした。
主は、大規模侵攻進行で起こったことだった。
悲しい…。ボーダーの人間じゃなかった者なのに、ボーダーの人間と同じくらいの悲劇のお話だった。
「そっか・・・。」
「あ。そういえば、私の名前言ったませんでしたね。
　私の名前は、神風みらい。みらいって、呼んでください。」
「俺は、迅悠一。これからよろしく。」
「迅さん。この力のことは、上層部に話さないでくださいね。二人だけの秘密です。」
「なんで？」
「あまり話すなって、本家から言われてるんですよ。」
「ホッ本家？」
「ええ。生家とも言えるかも。」
「・・・案外神風家って、すごい家??」
「いや？普通ですよ？」
「？」
「??」
話がずれた。

風間さんが倒れた後…。
残された、男三人は、緊急会議を開いていた！
※《》の中は、内線通話の内容です。しゅうには、聞こえていません。
《えええ???あの風間さんが倒れた???》
《しゅうさんって、そっち系（加古と同じ）だったのか!!》
《俺、まずいところに連れてこられた??》
「おい～。お前ら～早く食べろよ～味見したけど、美味しいぞ？」
《まっまずい!!おい。二宮!!しゅうさんのファンなんだろ？ファン愛で乗り越えろよ!!》
《いやいや。元は、クソ川のために作ったんだ！お前が食え!!》
《いや！お前ら！そんな事言ってる場合じゃねえ!!逃げる方法考えねえと!!》
「お！諏訪。食べたそうな顔してんな？食べてみろよ!!うまいからさ！」
「いや…。しゅう、俺は…！グフッ!!」
バタン!!
諏訪さんが死にました。
「「諏訪サーン!!!」」
ーーーーーーーーーーー
「話がずれちゃったから…戻すね。
秘密の件は、わかった。」
「ありがとうございます。
迅さん、私は、迅さんの味方です。
ボーダーをぶっ潰したくなったら、言ってください。手伝います!!
それに、死にたくなったら言ってください！
迅さんを膝枕とか…コスプレとか…なんとかして、迅さんを癒やしますから!!

だから・・・もう絶対！一人で悩んじゃ駄目です!!
それでは、失礼します！」
「うん。なんか、物騒な事（？）聞こえたけど、ありがとう。
これから、未来視仲間としてよろしく。」
みらいちゃんは、ニコッとして、行ってしまった。
今日は、とても心が軽くなった気がする。
・・・・。
振り返って思う。
最近太刀川さんとバトってめちゃめちゃ楽しくて、ちょっとだけど、気持ちが軽くなって。
そして、今日、同じ未来視を持つ少女に会って。
神様はいるのかもしれない。
初めて確信した。

そして、玉狛支部に帰ると彼は、淡い淡ーい恋心を抱いたことを気付いたかもしれない。
「ねえ。レイジさん。ゆりさんを見つめる時って、どんな気持ち～？」
「!?」
「お。ついに迅にも春か？」
ーーーーーーーーーーーーーー
男二人は、修羅場であった。
目の前には、逃れようもない殺人兵器とニコニコで、殺人兵器を差し出してくる普段は尊敬できるしゅう。
後ろにちらっと見えるのは、初対面で死に顔を晒した諏訪さんといつも男前な風間さんの生き死体。
初めに、風間さんが死んだのは痛かった。
あの!?という動揺が凄いのだ。
「あ！そうだ！俺、今ご飯食べると眠くなっちゃうかも！後で食べるよ!!」
「!!（このっ！クソ川!!!）」

勝ち誇った顔をする太刀川。
「そっか～。それは、そうだな。眠くなってしまっては、元もこうもない。
あ！でも、弟のかなたが眠気覚ましに兄貴の少量のご飯は、良いって言ってたな！逆にバッキバキになるかも！」
《いやもうそれ！毒！毒って思われてるよ!!覚醒剤かなんかなのか!?》
《クソ川!!お前もう食えよ!!》
《やだよ!!死にたくねえ!!》
《・・・はあ。仕方がない》
《?どうするんだ??》
「・・・しゅうさん。実は…俺もなんです。ご飯を食べるとねむくなってしまうので、残念ですが、俺もこのクソ川の課題を終わらせて、食べたいと思います。」
「そうか…。」
明らかに落ち込むしゅう。お前・・・!?という顔で、見る太刀川。不本意だがそうするしかないと腹をくくった二宮。
《おい!!二宮!!何パクってんだ!!》
《パクってねえ。有効活用しただけだ。それに…》
二宮は気付いていた。これは、ただの延命に過ぎないと。
この阿呆の課題が終わってしまえば死ぬ運命なのだと・・・！
「いや。まて、見た感じ後少しなんだろう?それだったら、俺だけで太刀川見てられるし。
二宮！良かったな！食えるぞ！はい。」
「いやっ！しゅうさん！太刀川は俺が見ます。しゅうさんの手を煩わせる訳には・・・！」
「そんな！なんて、先輩思いな奴なんだ！ありがとな！でも、もうダイジョブだぞ！」
「あの・・・！だから・・・！あ!!グフッ!!」
バターン!!
二宮が死にました。

「二宮ーーーーー!!!!」

太刀川は、手が完璧に止まった。唖然としたのだ。

なんでそんなにピンポイントにしゅうさんは口にスプーンを突っ込むことができるのかとか、まず、何を入れたら、殺人兵器が作れるのか等、太刀川の脳をMAXまで、稼働させた。

しかし、悲しいかな。自分には何一つ答えは、出なかった。

もう、腹をくくって、課題をやって死ぬか。そう思って、課題をやり始めた。

ああ。死ぬ前の課題はいつもより、早く進むなあ～。

・・・迅と戦っている時の緊張感を感じる。

俺は一体何と戦っているのか・・・。

そんなことを考えていると、課題が終わった。

もうこれは、時間稼ぎだ。とわかっているが、太刀川の生存本能が行動を起こす。

「ねっねえ、しゅうさん。これ、何入れたの?」

「ん?ああ。勉強が捗る栄養素の粉だ。」

「まさかそのまま・・・?」

「ああ!入れたぞ!こねこねして、カレーの液にぶっ込んで・・・」

「ああ。もう良いよ!!説明ありがとう!!」

太刀川はヤケクソだった。説明されてもよくわかんないし、まず、粉??

よくわからん。

「ほら、太刀川!食えよ!美味しいぞ～!!」

「うあああああ!!グフッ!!!!!!」

「慶!!!!」

忍田本部長が弟子の危機に駆けつけた!だが・・・!

「あっ・・・!忍田さん・・・!!」

「慶!!死ぬな!!!」

「あ・・り・・・が・・・・と・・・・・・。」

「慶ーーーーーーーーー!!」

「あ。真史叔父さんじゃん。叔父さんも食べる?」

「いや、私は遠慮・・・」
「はい。」
「グフッ!!!」
ボーダー最強の虎死す。

贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ．風間蒼也　ｉ

「鬼怒田さ～ん!!!」
ヴァアアアン!!!
と豪快に扉を開けて、開発室までやってきた。
「お。ライじゃねえか。」
「ヤッポーです～冬島さん。」
開発室のエンジニアだけの冬島さん。
彼は、女子高校生が苦手だが、今は、ライの姿。なんとも思われない。
初対面は、しゅうを通じて。この人がまきまき（真木理佐）に屈服するのか～とマジマジ見てしまった。頑張れ！と念を今から送っている。塵も積もれば山となる。念も積もれば、守護となる…。いや、冬島さん普通にいい人だから。
そう思いニマニマしてると…
「なんだ？ライ。嬉しそ―な顔しやがって。こんなオジさんに笑顔を向けても飴しか出てこないぞ。」
「飴が出てくるんだね！やった!!あ!!これ、僕が好きって言ってた柚子はちみつ飴!!ありがとー冬島さん。
あ。そうそう。忘れてた。鬼怒田さんにようがあるんだけど。」
「ああ。鬼怒田さんね。奥の部屋にいるよ。なんだ？もうＢ級に上がったのか？」
「そうだよ～!!大正解!!」
ニカッと笑って見せる。
「わっ!!若い!!そんな若いみずみずしい笑顔を俺に向けるんじゃない!!」
「いや…。冬島さんいくつよ…。」
「２５・・・。」
「まだ、華の２０代じゃん!!」
「うるさい～駄目なんだよ～俺は～」
「もう。冬島さんは～。あ！最近ちゃんとご飯食べてる？寝てる

？」
「・・・」
「まさか・・・！今何徹？」
冬島さんは、指を二本立てた。が・・・
「嘘でしょ。」
「ヴッ!!」
「こら～!!ちゃんと寝なさい!!また、強制的に仮眠室行きですよ!!それに、メテオラで、ＰＣぶっ壊しますよ!!」
「!!それだけは…！それだけは…！勘弁して～!!」
「なら寝てください。トリガーの調整が終わったら食堂に一緒に食べに行きましょう。」
「はっは～い。」
「なんじゃ。騒がしい。」
「「鬼怒田さん!!」」
「おお。ライくんじゃないか！どうしたんだ？」
「Ｂ級に上がったので、トリガーを…」
「もう上がったのか！凄いな!!よ～し。開発室長のわしが直々にしてやろう！」
「わーい!!ありがとうございます!!」
「なになに。お安い御用よ。いつもトリオンやバランスの良い食事もらっとるし、このぐらい逆にさせておくれ。」
「鬼怒田さん…！」
マシュマロボディーに飛びつく僕。ぎゅーとハグします。
鬼怒田さん大好き。
こんなに優しいのに、トリオン開発めちゃしてて、すごすぎる…！
本編では、オッサムに強く当たる鬼怒田さん。でも、ホントはとっても優しいのだ！部下のことはちゃんと見てるし、トリオン取るときに毎回労ってくれるし。模範生徒には優しいタイプ。オッサムは、鬼怒田さんと相性が悪かったとしか言いようがない。オッサムはオッサムで、ペンチもって来ちゃうやべー奴だからな～。
そんなことを思っていると、オーダーしたトリガーが出来たらし

い。流石、開発室長。仕事が鬼速！

そして、早速使いました！B級特典!!C級の時は、訓練生用の指定の服だったが、B級は、服のカスタマイズが可能!!今は、そもそも隊というグループが出来ていないので、皆各々好きな格好をB級はしている。なので、僕も、戦闘服を作ってもらいました！

「トリガーオン!!」

まあ！なんて言うことでしょう!!C級の訓練生用の服から、やたらかっこいい格好に！

詳しく説明しよう!!

まず、首には、ベルトの金具が付いたチョーカー。服は、白いノースリーブで、首元には、金の襟。腕には、黒のあの～あれ、お母さんが日焼け防止でつけるやつみたいなの～そう！アームカバー!!!をつけて、ズボンは、黒のクチャクチャっとしたやつで、足首辺りで、キュッと縛ってあるどんなズボンか名称は知らんね。

「お～!!流石!!イメージ通りだよ。ありがと～鬼怒田さん!!」

「ヴッ！良かったな!!」

「よし！冬島さん食堂行きますよ！」

「げ！忘れてなかったか！」

「ほらほら早く～」

食堂に移動しました！

「冬島さん何食べます？」

「あ～何しよ。すき焼き定食にしよっかな～。」

「すき焼き!!美味しいですよね～僕もそれにしよ。」

料理が来ました！

「もぐもぐ。冬島さんもぐもぐ。美味しいですねもぐもぐ。」

「ああ。食べ終わってからもぐもぐ。喋れよもぐもぐ。」

「冬島さんもぐもぐ。こそもぐもぐ。」

「こら。ライ。喋りながら食べるんじゃない。」

「ふぉーや。ごっくん。ぷはぁ。ごめんごめん。」

「ん。以後気をつけるんだぞ。あ。冬島さん。こんにちわ。」

「お～。風間。大丈夫か？胃の方は？聞いたぞ。えらい目に会ったって。」
「…思い出させないでください。食べた後、記憶が無いんで。」
「??」
「おっ恐ろしいな…。」
「…そんなことはおいておいて、ライ。B級昇格おめでとう。」
「ありがと～あ！そうだ！蒼也、B級初模擬戦してよ!!トリガー沢山でやってみたい!!」
「ヴッ!!いいぞ。ブースに移動しよう。」
「やった～。すき焼き定食も食べ終わったし、行きますか！じゃあね～冬島さん。」
「おう～」
ブースにて・・・
「よ～し。取り敢えず、２０戦!!やろ～」
「ああ。それは良いんだが…。」
「？」
「その服露出が多くないか？」
「？そんなことないよ～かっこいいでしょ～？そんなことより、早くしよ～ほらほら、ブース入って～」
なんかもっと言いたそうな顔の蒼也を無理にブースへ押し込む。
そんなノースリーブ駄目？でも、嫌なんだもん。ジャージ。
パン！と頬を叩いて、戦闘開始!!

―ランク戦　終了。　勝者　風間蒼也。―
「は～強かった～流石蒼也だね。」
「ライも初とは、思えぬ強さだったぞ。」
「へへへ～ありがと～
…時間が経つのは早いねえ。
大規模侵攻から、もう半年くらい経っちゃった。」
「そうだな。あの時、ライが助けてくれなかったら、俺は、どうなっ

ていたわからなかったかもな。」
「あの時は、珍しく、無敵の男前蒼也が弱気だったからねえ～。」
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
これは、大規模侵攻のちょっと後の話。
「蒼也くん。大丈夫？」
ただの何気ない会話にいきなり幼馴染みであり、気になる子からそんなことを言われて、困惑してしまった。
俺、風間蒼也。
「ああ。いや、最近元気なさそうだったから。大丈夫かなって。」
これは、鋭い。思わず、感心してしまった。自分でも、少ししか感じてなかった部分をこうも当てられてしまったから。
「ああ。でも、だ「いじょうぶではないでしょう？」」
「・・・」
「もう。大体、大丈夫っていう人は、大丈夫じゃない人が多いんだよ？
ねえ。話して。人に話すと少し楽になるんだよ。」
彼女がちょっと泣き目で言ってくる。本気で心配しているようだ。
…それに、彼女の泣き目は、心にとても来る!!
「ヴッ！わっわかった。話すから。」
俺は、話した。
一つ残らず。
今の心情と復讐と兄について。

贖罪のメサイヤ　ＶＥＲ・風間蒼也　ii

最近は、心にぽっかり穴が空いたようだった。
何かがおかしい。なにか違う。
家も。街も。周辺の人も。自分の心さえも。
そのことに、気づかないふりをして。誤魔化して。自分にも嘘ついて。
騙せていたつもりだった。
あいつも気付いていたような素振りをしていたが、あいつは、両親を無くした。自分のことで精一杯なのだろう。それでも会うたび、何回も大丈夫かと聞いてくれた。
でも、それにいつも通り、いつも通りに返すと、あいつは、泣きそうだった。

「蒼也くん。大丈夫？」

神風みらいという人間は、天然の人たらしで、細かすぎる所に気付く女の子。
年齢に合わない大人なところを持っていて、でも、やっぱり年相応の反応のギャップが愛おしくて。
ほしい言葉を真っ直ぐにくれて。
ちゃんと話を聞いてくれて。
「俺は、止めたんだ。迅が…迅の予知で死んじゃうからって。
いかないでって。
でも、進兄さんは、遠くへ消えていくように、俺を置いてってしまって。
あの夜、もう、進兄さんの姿は、見えなくて。
泣いちゃダメ。泣いちゃダメ。って思って…でも視界が崩れていくんだ…。」
「・・・」
「結局、進兄さんはいってしまって。

その日から、少しずつ可笑しくて。変で。
みらい…。俺は、本当は、言いたかったかもしれない。
行っちゃやだ。いかないで。進兄さん、死なないで。一緒に生きて。
本当は…。本当は…。」
「蒼也くん。ねえ。復讐したい？」
「・・・」
「私は、両親が両方亡くなって。今の所実感が沸かなくて。
蒼也くんは知ってるでしょう？私の一族のこと。
私の両親は、自分たちよりも私達を選んだ。
死に飛び込んで行ったようなものだよ。
愚かだとは、思いたくない。
事前にわかってて、自己犠牲を選んだ。その選択は、傍から見たら、さぞ立派だろう。
でも、私は、ワガママだから、生きていてほしかった。って思う。私も思う。
ネイバーは、許されない存在だよ。だから、この大規模侵攻で、攻めてきたネイバーを私はぶっ殺してやる。
これは、復讐。両親にそんな選択をさせて、殺したことの恨み晴らし。は、したからね。
私は、偶々出来た人間だ。だから、出来なかった人間を救済する。
それが、私の復讐であり、母の遺言。
これから、
私が、すべきこと。」
「蒼也くんは？
何をしたい？
何をすべきなんてことは、言わせない。
だって、私は、蒼也くんを救済するから。」
「俺は・・・。
ボーダーの命令を忠実にこなす。
それが俺の復讐みたいなものだ。」

「うん。蒼也くんらしくて私は好きだよ。」
私は、ニコッと笑った。
・・・
・・・
「私達は、残された側の人間だ。残された側の人間は、どんなに苦しくても逝ってしまった人間の繋いだ命を紡いで行かなければならない。
だからね、私は、蒼也くんがどんな選択をしようとも、応援しようって思ってたの。進さんも、絶対後悔のしない道だったのなら笑顔で送り出してくれたと思う。
大丈夫。辛くなったら、私を頼って。」
「ああ。みらい。ありがとう。」

「でも・・・俺は、守られるより、守りたいからな。」
蒼也くんは、私の目の前に立ち、肩を掴みながら言う。
「今度は、俺がみらいを守る。
もう絶対に悲しい想いはさせない。」
かあああああ!!と顔が赤くなったのは、言わなくてもわかるだろう。
「?なんだみらい?顔が真っ赤だぞ?」
「蒼也くんのせいでしょう!?」
「(脈アリか?そういえば、進兄さんがよく言ってたな。好きな子には、押せと。)ふふ。」
「あー!!蒼也くん!ようやく笑った!!」
＝＝＝＝＝＝＝＝
「そんなこともあったな。」
「中々見えない蒼也の弱い時が見えて楽しかったな～。」
「ふ～ん。最近は、忙しそうだったから控えていたが・・・」
そう言って、蒼也は、僕の手を自分の手に絡ませて、恋人つなぎをして・・・
「これからは、遠慮しないぞ?」

と言って、手の甲にキスをした。
「!!」
そう、あの日から、そうやって僕をからかってくるのだ!!
僕は、ぷく～と頬を膨らかすと
「そう怒るなよ。ライ。」
ニヤッと子供みたいに無邪気に笑うのだ。
「怒ってない!!」
この一連の動作を見て、一部の隠れ腐った女子が湧いたのは、僕は全く知らない。

天の羽衣と弾馬鹿族襲来

「お。みら…ライ。よく来たな！」
「真史叔父さん今の言葉、危ないよ。気をつけて!!」
今の感じは、もろにみらいと言ってしまっているからな…。
「ああ。すまない。すまない。」
「で、何の用？」
「ああ。もうそろそろ入隊式があるんだ。今回は、しゅうの担当なんだが…良ければ、サポートに入ってくれないか？」
「？なんで？別に、しゅうって、六頴館の生徒会長やってるくらいだよ？そんな、人前が苦手ってことはないバズ・・・。」
「・・・大変言いづらいんだが、しゅうがライに自分が頑張っている姿を間近で見てほしいらしい。」
「・・・は？そんなことで、真史叔父さん使ってんの？親戚とはいえ、真史叔父さんは、ボーダーの本部長なんだよ？ボーダー最強指揮官の！」
「面と向かって言われるのは恥ずかしいなあ。」
あら！真史叔父さん意外と乙女!!
「いや。あの…誕生日プレゼントは、それが良いっていうもんだから…。」
「そんなになのか!?」
「あはは。」
忍田さんは言えない。
ことの始まりは、しゅうがライの入隊式を風間蒼也が担当したことを実は、ずっとずるいと思っており、駄々をこねた結果だということを・・・。
「まだまだ、しゅうも子供なんだな。」
「？なんか言った？真史叔父さん？」
「いや。なんでも。」
ーーーーーーーーーーーーーー

＊ボーダー入隊日当日!!
「ボーダーの忍田真史だ。
君たちの入隊を歓迎する。」
から、お決まりの歓迎セリフが始まり、
「君たちと共に戦える日を待っている。
私からは、以上だ。この先は・・・神風隊員と東隊員に説明を一任する。」
で、締めくくられ、しゅうと東さんにバトンが渡される。
「はじめまして。神風しゅうです。」
「東春秋だ。」
「さて、これから、入隊指導を行う。まずは、ポジションごとに分かれてもらう。
攻撃手と銃手志望の者は、此処に残り、
狙撃手志望の者は、東さんについて訓練場へ移動を。
以上。」
此処ぞとばかりに、クールキャラを見せつけてくるしゅうお兄ちゃん。いつものあのはっちゃけぶりはどこへ…?と私に存分に思わせる。でも、反対に家では、ちゃんと心休まっているんだなと感じ取ることができる。
まあ。事情を知っているのかは、わからない東さんは苦笑してたケド。
「こんにちわ。改めて言おう。俺は、神風しゅう・・・」
しゅうお兄ちゃんが、テンプレを話し始めた。

じーーーーーーーーーーーーーー。
・・・。
天羽月彦…天羽くんが私のことをめちゃめちゃ見ている。しっ視線が…!!痛い…!!
小学校で、クラスが違うため、最近会わないから、全く話してないのだ!うううう!!多分バレてるよ…!なんでそんな格好してるんだ?的な疑惑の視線が…!!絶対そんな趣味が?とか、思われてる…!コス

プレは、したいから、あながち違っては、いないんだけど・・・！
うじうじしてたら、訓練室についた。
―５号室　開始―
そして、僕の時と同じ様に訓練が開始される。
え？一人称がバラバラだって？まあ。一応意味があって、分けているんだけど…気にしない、気にしない!!
―終了　記録　３５秒―
あ。一分以内の人が出たようだ。会場が沸いている。
ってあれ？二宮さんと太刀川さんが二階にいる！うわあああ。二宮さん、眉間にシワが寄りまくっている。いがみ合ってんな～なのに、よく、つるんでるんだよなぁ～。二宮さんは、同年代だから渋々。太刀川さんは、からかって、楽しいという感じか。
ん？なんか、今の一分以内の人を指さしてる。あ～。才能がある人間好きからすれば、一分以内は、興味対象か。え～っと、どれどれ～??誰だ～？い、ず、み、こ、うへい・・・出水公平!?
わ～。まさかの方が登場したぜ!!弾バカと比喩されるが、才能は、本物。高いトリオン量と、柔軟な発想を誇り、合成弾の生みの親である、ナンバー２の射手。
それに…ヒロ○カでは、飯田○哉くんや、境界のりんねでは、六道○んね、ハイ○ューでは、影山○雄!!ぼけええ!!って、言ってくれないかな～!!!
話がずれた。…今期から、ボーダー入りなのか!!なら、是非お友達になりたいなあ～!!合成弾誕生の瞬間を見てみたい!!よし！訓練終わったら、話しかけてみよう!!

あっという間に、時間は、経ち、今回の入隊式は、終了した。
「よし！出水公平に喋りかけに行こう!!」
ガシッ!!!
「え？」
「ちょっと来て。」
「あぎゃーーーーーー!!!」

引きずられて、自坊販売機の前まで連れてこられた。
「しくしく。」
「ぞんな下手な鳴き真似僕に通じると思ってんの？」
「あ。バレた？」
「うん。バレバレ。は～。で聞くよ？君、神風みらいでしょ？」
「・・・・・・・・・」
「そっぽ向いたって無駄。早く、言って。」
「・・・・・・・・・ソウデス。」
「やっぱり。僕が君の色間違えるわけ無いだろ。色々聞きたいことあるけど、なんで、最近会いに来てくれなかったの？」
「へぇ？」
「五年生までは、違うクラスでも会いに来てくれたじゃん。なんで？僕…寂しかったのに。」
「？最後なんて言った？」
「なんでも無い!!早く質問に答えて!!」
「天羽くん、なんでそんな怒ってんの？」
「フンッ！」
「え～。じゃあ、答えるよ。ボーダーでちょっと忙しかったからってのもあるし、神風みらいとして、目立っちゃいけないから、コソコソしてたからなんだ。」
「ふ～ん。そ。でも、僕には、会いに来て。ボーダーでも、学校でも。」
「はあ。」
「何その返事・・・・じゃあ、なんで、その格好に？」
「ウッ!!それはですね～」
全部話しました。
「そういうこと。わかった。僕も秘密にしてあげる。」
「ありがとう!!あっ！あのね、ボーダーでは、ライってちゃんと呼んでね!!」
「はいはい。わかったから。じゃあ、これからよろしく。ライ。」
「うん！」

僕は、天羽月彦とお話を終え、かなたを探しに行きました。
天羽は、初日にがっとポイントを貯めて来ると言って、ランク戦のブースへ。もうサボって帰っちゃうのかな？と思っていたから、意外だった。
「ええっと、今何処？っと。」
ピコン！
「食堂で秀次と勉強してる。ライも来る？」
「行く！」
かなたとのボーダーの連絡は、すぐ既読がつく。最近ちょっと怖い。
でも、連絡がすぐつくのは、便利だからなんとも言えない。
慣れた足取りで、食堂へ向かう。
「あ。ライ来たな！」
「ああ。入隊式の監督補佐お疲れ様。」
「うおっ！入隊式の時から思ってたけど、超絶美少年！」
!!
「え？秀次??なにそれ？ライの監督補佐??聞いてないぞ？」
「あれ？聞いてなかったのか？」
なんで・・・
「はー??聞いてないんだが!?はー??」
「どしたどうした、かなた！情緒不安定かよ！」
「なんで・・・」
「「???」」
「どうしたんだ？ライ？」
「なんで、此処に、出水公平が居るの!?」
「おっ。俺有名人??」
「調子に乗るな。入隊生。」
「一分以内だから、目に止まっただけじゃないか？」
「なんでそんな辛辣なんだよ!!ふたりとも!!」
「あ。僕は風神ライ。よろしく。ライって呼んで。」
「おおう。俺は、出水公平。出水でも、公平でもどっちでも良いぜ。」

「「じゃあ。出水だな。」」
「いや！なんでだよ！皆名前呼びなのに俺だけ苗字呼び??」
「なら、公平って呼ぶ！」
「ライ～」
「おい!!!公平!!俺のライに触るなあああああああ!!!!」
「わっ！かなた！ライの強担かよ!!」
「ヤメテ。かなた。」
「ハイ。」
「あ。そうだ～なんで、俺のこと知ってたの？あれ？二人が言ってたみたいに今日の訓練で一分切ったから？」
「ううん。そうじゃないよ。初めて同年代で射手仲間ができるかな～って。えへへ。」

「「ヴッ！」」
「何だあのかわいい生物は!?」
「美少年と可愛さのダブルパンチだぜ!!」
「フッ！うちの妹は、ライの女バージョンだ。良いだろう!!もうっ！可愛すぎて、マジ天使!!」
「はああ!?なんだそれ！会わせろよ!!」
「はああ!?やだね！」
「えっと～何の話を・・・!?」
「「ん～？なんでもない。」」
「そうか！それなら、この宿題終わったら、射手練しようぜ～」
「うん！やろ～ランク戦もガンガンやろう!!」

「ぜぇぜぇぜぇ。サッ流石に3時間連続はきちーわ。弧月組は…死んでるわ。」
地獄の特訓を経て、出水公平と仲良くなった！
「そういやあ、ライって入隊式の対近界民訓練何秒だった？」
「え？0．2秒。」
「は？」

パーフェクトって、そっちの道もはいるんですか!?

ガシッ!!
「え?」
「ライ!ちょっと来てくれ!!」
「え?あっ!あ♡あああああ!!」

＊同時刻、ボーダーのラウンジで。
「はっ!今、みらいのエロい声が聞こえた気がする!」
「なんだと!?みらいは何処だ!」
ちゃんと男の子のかなたと秀次がちゃんと男の子をしていた。
しかたない。好きな子のあれこれは、気になっちゃう。
ーーーーーーーーー
引きずられて目を覚ますと・・・目の前に可憐な美女がいた。
「ここは??」
「あら。起きたのね。ここは、中央オペレーター室よ。はじめまして。私は、月見蓮。よろしくね。」
「あよろしくお願いします。月見さん。僕は、神風ライです。ライって呼んでください。」
「わかったわ。ライくん。よろしくね。」
わ〜。綺麗。ワールドトリガーの高嶺の花!!
いや。高嶺の花と言われる理由がわかるわ。
仕草からわかるお上品さ。知的そうな、言葉選び。雰囲気から、わかる、優しそうなこと。教養があると、わかる身のこなし。
本当にあの太刀川さんの幼馴染みだろうか?いや、ちがう。そう思いたい!と思わせるほどの気品があるのだ。
本当に何故、太刀川さんにこの気品が移らなかったのだろうか。あの人の駄目っぷりは、謎を増やすばかりである。
「ええっと…。今日は、何故僕は、ここに??」
「あら?忍田本部長から聞いてなかったかしら?」
可憐に小首をかしげる月見さん。わあ。にじみ出る高嶺の花感…。

そして、後ろに出てくるきなこもちを食べて、にやけている太刀川さん。やめろ!!!高嶺の花を汚すんじゃない!!貴方は、戦闘シーンは、めちゃかっこいいのに!!

「そうなのね。ごめんなさい。一からちゃんと説明するわ。最近ようやくボーダーにも隊が組めるくらい隊員が集まっているのは、知っているかしら?」

「ああ。そういえば。ランク戦も入った頃より盛んな気がします。」

「そうなの。それでね、もうそろそろ、隊を組ませてみないか。って話が上層部で出ていて。」

「あ~。なるほど。でもあれですよね?オペレーターってまだ、他に比べてあんまり居ないって聞きました。」

「よくご存知なのね。そう。だから、オペレーターになる人を探してたの。で、そのときに、忍田本部長が、ライくんがパーフェクトオールラウンダーになりたいって、言ってた。というお話を聞いてね。」

「はあ。」

「一応、オペレーターは、女性の方が並列処理に優れてるって言われてるから、女性が主流なんだけど、今後、もしかしたら、男性でも得意って人が出てくるかもじゃない?だから、ライくんに、初男性オペレーターになって欲しいのよ。」

「そういうことですか。でも、僕下手かもしれませんよ?」

「大丈夫よ。忍田本部長が、ライはなんでもこなせる器用な子だからっていうお墨付きがあるから。」

「真史叔父さん…!!」

「ふふ。頑張って。さっそく、今日から、やってもらうことになるから。よろしくね。」

「あ。今日からなんすね。はい。」

「じゃあ。オペレーターの訓練をする前に、オペレーターのことを学びましょうか。まずは・・・位置情報解析処理ね。これは・・・」

そうして、言われたオペレーターの主な役割がこちら。

・位置情報解析処理：狙撃ポイントや、敵の位置、逃走経路、敵隊員の移動予想、戦術展開図など、必要な位置情報を瞬時に判断して表

示。
ＥＸ：狙撃手の狙撃ポイントのあらいだし。弾道解析等。
・感覚共有支援・視覚や聴覚など五感に纏わる様々な情報を処理し、攻防両面をサポートする。一部のサイドエフェクトの特異能力をも共有可能。
ＥＸ：隊員が実力を発揮できる様に、濁流や暗闇等で遮られた視界をクリアにする。
・戦闘データ交信：戦いの一部始終を記録した映像をフィードバック。強力な未知のトリガーを持つ敵と戦う戦闘員にとって、貴重な情報になる。
ＥＸ：直前に行われた戦闘記録を瞬時に視界に映す。
ふむむむ。案外大変やぞ。これ。瞬時にが２つもある…。慣れなきゃいかんやつや。
「あら。凄い顔してるわね。大丈夫よできるわ。」
「何処から来るんですかその自信…。」
「いろんな子を最近指導してるからかしら?なんか、勘でわかる気がするの。この子は、すぐ手が離せそうって。」
「まあ。オペに近いようなことをするゲームは、よくやってるので…。まだ、やってないけど聞いた感じ、そこの勘を使うしか無いって思ってます。」
「なら、早速やってみましょう。」
目覚めた部屋から、訓練用の部屋へ移動する。
女性が多いだろうか。ネカフェとか、ゲーム屋みたいにパソコンバーン!椅子!はいそれ、みっちり!!って感じではなく、小綺麗なカフェのようなオフィスのような…。まあとにかく、綺麗な感じである。ゆとりがちゃんと机と机の間にあるし。
僕は、月見さんに指定された机の椅子に座り、コールセンターのお姉さんが付けているようなヘッドホンを装着し、いざ訓練開始。
主な訓練内容は、情報処理シュミレーションをしてみたり、筆記で位置情報処理のテキストを解いてみたり、自分の目に戦闘データを映してみたり、実際に防衛任務のオペを本職の人の隣でやってみたり。

中々、色んな種類がある。
一通りやってみて、慣れが必要だと感じた情報処理シュミレーションと視覚支援をいかに早く行うかのランダム訓練を2～3時間くらい永遠にやっていた。
え？長いって？いやいや。これ結構慣れれば楽しいんよ。ＦＰＳのゲーム感覚で出来る。やる主人公ポジではなくて、サポートに徹するポジ？って感じ。そういうポジが結構戦場をコントロールしやすいんだよね！ヒーラーって、見方を変えれば、アタッカーの生殺与奪の権握ってるんだし。回復するもしないもヒーラー次第…ふふふ。あ。やばい。ＰＳＹＣＨＯ―ＰＡＳＳだ。これ。
そんなこんなをしていると、大分時間が経っていたようだ。隣の初見で鼻で笑ってきた強気なお姉さんがランチから帰ってきたようだ。一ミリも動いていなさそうな僕を見て、びっくりしてた。
ぐるるるるる。
・・・。
あ！わっ忘れていた。ずっと、お腹すいてたんだ…。いや～空腹のその向こうのゾーンへいったと思ったんだけど…。
クスッと、さっきの強気なお姉さんの隣の優しそうなお姉さんが笑った。
はっ恥ずかしい…！
「これどうぞ。」
笑った優しいお姉さんが、微笑みながらおにぎりを差し出してくれた。
めっ女神ぃ～!!!
「あ…ありがとうございます!!今度、何かお礼します！」
「良いよそんなの～ずーっとオペ練してたのは、見てたから～。」
「そんな事言わないでください!!是非！お礼させてください！ええっと、名前聞いてもいいですか？」
「ああそういえば、名乗ってなかったね。私は、三上歌歩。で、こっちは…」
「真木理佐」

「三上さんと真木さん…あ!えっと、僕は…」
「「風神ライくんでしょう?知ってる。入隊式で0．2秒だした子。」」
「あ。お二人共ご存知でしたか…。」
「うん。オペでも有名なんだよ～」
「へぇ～」「早くおにぎり食べなさいよ。」
「あ。はい。」
「ちょっと理佐ちゃん!」
「じゃあ、ありがたくいただきます!あーん。はむっ!!」
ーーーーーーーーーーーーーー
＊その頃ブースで・・・
「ラッライがいない!!!」
「今日も一緒に射手練しようと思ったのに!!」↑出水(最近のライとの射手練が楽しい)
「はあ?今日は、僕とランク戦すんの!!」↑かなた(最近、ライを独占できず、イライラが募りつつも、皆で切磋琢磨することが楽しいので葛藤が凄い)
「一緒に、新しいネイバーの惨い殺し方を…」↑三輪(姉が生きていても、神風兄弟によって確実にネイバーぶっ殺マンになってきている)
「チッ。ライのやつ、昨日は居たのになんで、このバカしかいないんだ。」↑二宮(トリガーセットを変えてきたので、撃ち合いたいご様子)
「おい。二宮～やろうぜ～そしたら、ライも来るだろそしたら乱戦すりゃあ良いじゃん。」↑餅川(怒られてもやめられないＢｅｒｓｅｒｋｅｒ)
「おい。阿呆川?課題は、終わったのか?」↑しゅう(また、学校から電話がかかってきたことの衝動で探しに来た)
「げっ。しゅうさん!!」↑餅川
「俺も居るぞ。」↑風間(しゅうと同様。出会い頭に後ろから、ヘッドロックをかます小型高機能)
「わっ!!背後に!!ぐえぇえ!!」↑餅

「おや？ライは居ないのか？」←風間　「ぐえええ!!!」←餅
「本当だわ。ライくんは、不在なのね。」←加古（なんか知り合いがわちゃわちゃしてる―楽しそ―でも、ライくんは居ないのね）
「げっ。加古!!何故居る。」←二宮
「あら？居ちゃ悪いかしら？そんなに私が嫌なら、ブラジル辺りに行けばいいじゃない。私を視界にいれなくてすむわよ。」←加古
「は？何故俺が行かなければならない。お前が行け。加古。」←二宮
「いやよ。二宮君が消えれば良いんだわ。解決よ。解決。」←加古
「なんだ、この怖い会話!!」←出水
「気にするな。いつものことだ。」←三輪
「そうそう。六頴館の風物詩らしいからな」←かなた
皆で、わちゃわちゃしてた。
ーーーーーーーーーーーーーー
「はむっ。はむっ。はむっ。」
私は、真木理佐。ちょっと前に、ボーダーへ入隊し、オペレーターになった。
「はむっ。はむっ。はむっ。」
そして、今日も中央オペレーター室というところで、訓練していたのだが…

かわいい！

目の前ではむはむおにぎりを食べる姿は、さっきまでの猫背でずーっとカチカチＰＣを動かしていた面影は一切無い。かわいいを権化した様な姿になっている。
なっ！なんだ！この姿は…！
なんだ！このギューッと締め付けられる胸は!!!
隣にいる三上とは、明らかに違うなにかがある・・・！
じいいいいいいいいっと彼を見つめる。可愛い。
時々視線に気付いたのか、ん？っとこちらを見てくる。可愛い。
そして、真木理佐は、心に決めた。この二人は、私が守ると！

パーフェクトって、そっちの道もはいるんですか!??

真木がひっそりと決意を固めた時、三上歌歩は、この状況を微笑ましく思っていた。

気難しい真木は、どうやら考え込んでいるようで、ライくんは、もぐもぐ愛らしい様子でおにぎりを食べているからだ。

真木は、三上の目から見ても他人にも自分にもとても厳しい。そのため、よく怖がられてしまうのだ。本当は、相手を思っていっているのに。真実は、ちょっと言葉足らずで意味が伝わっていないせいなのだが。

はむはむ。はむはむ。

ん～。可愛い。小動物の様な愛らしさがある。

「はむ。は～あ～!!美味しかった～ありがとうございます!」

「いいよ～とっても美味しそうに食べてくれるから、あげた甲斐があったよ～。ね。真木ちゃん。」

「うん。(可愛いな)」

こんな感じで一日目は終了した。

ーーーーーーーーーーーーーー

二日目。

今日もまた、訓練である。そのため、昨日のデスクに行こうとしたのだが…。

「あの!ライくんであってました?あの0．2秒の!!」

「あ。はい。そうですが。」

「きゃあああ～!!」

僕のデスクに他のオペレーター達が群がって…ごほん。そんな言い方良くない。集まっていたのだ。女の子達は、キャアキャアしている。

あー。ふーん。なんとなくわかってしまった。初めに説明したようにオペレーターは、基本的に女性である。それ故、此処には、男は僕しか居ない。(いや。本当は女なんですが…。)要は、こんな状態。それは、女子校の修学旅行…。その旅行先で超絶イケメンが居たとし

よう。そうすれば、男に飢えた女の子は…恐ろしい悪魔に豹変するのだ!!やれ、彼女は!!好きなタイプは!!これが、人間の生存本能なのか!!と思うくらいガツガツ攻める。怖いくらいに攻めるのだ。

※必ずしもそんな人ばかりでは、有りません。そういう人が少なからず居る。それだけを認識してください。

「凄いですね!!え～カノジョさんとか居るんですかぁ～??」

「あはは。(二次元の可愛い女の子なら沢山!!)」

「え～好きなタイプは～??」

「えっと…。(君等みたいにガツガツ行かない人ですかねえええええ!!!)」

「はい！好きな料理は～？」

「えっと…お肉料理とか…。」

「え～!!男らしいぃ～!!」

質問攻めの嵐だ。怖い…。

ゾクゾク!!!

!?

何この恐怖!!はっ!!真木さんがお怒りだあああ!!目が!!目が!!こわいよオ!!

「あ。あのお。もう。いいですかぁ。」

辻ちゃんの気持ちがわかったよぉ!!彼には、優しくする。心に決めた!!

でも、恐ろしい悪魔には残念ながら届かない。

「元々、カノジョさんは居るんですかぁ～??」

「記念日は大切にする派ですかぁ？」

「兄弟は居るんですかぁ？」

怖えええええ!!なんで、そんな突っ込んだ質問できるんだ!!

そして、どんどん怖くならないでえええ!!真木さんんんん!!!

そんな、僕の願いが届いたのか、とある質問で、女の子の流れが変わる。

「オペのこと教えてくれませんか？」

はっ！悪魔たちはなった。

そうだ！そうすれば、彼を独占でき、親しくなることが出来る!!
・・・・手に取る様に女子の思考がわかる。もうヤダぁ。
いや。これは、チャンスかも知れない。女子を（精神的に）一網打尽に出来るかもしれない!!
「わかった。良いよ。」
またもや、キャーッとなる女子。
「じゃじゃあ、私か…」「ここで、皆説明するね。」
「「え？」」
「ん？何かおかしいことといった？個人的に教えるよりこうして全体的に教えたほうが効率がいいじゃん？」
明らかにあわあわしだす乙女たち。
フッ。私は、君たちみたいな女子が前世死ぬほど苦手だったのさ！心の中で、唯我尊の様に前髪を掻き上げる。
真木さんは皆に説明するねといった時、怒りが消え、効率的といった時は、フン。と得意げになっていた。ヨカッタ。機嫌が直ったようだ。
「いいよね？じゃあ説明するね！」
いいよね？と半分脅しを懸けて、明らかに僕より先輩なのにオペの説明をご丁寧にした。
お昼によくやった。と真木さんに言われた。ヨカッタ。
ーーーーーーーーーーーーーー
四日目
今日は、一昨日のようにならず、滞りなく訓練を行い終了した。
最近よく、三上さんと真木さんとご飯を食べるので日々の楽しみになっている。
や～可愛い子と食べるご飯は、割増で美味しいなあ～そして、今日も福眼でしたなあ～目の保養～
今日は、平和だ。とぼんやりしていると、
「やあやあ。噂のライくん。君。メガネを掛ける気はないかね？」
「あっ貴方は…!!!」
「お！私のことを知っているかね！」

「いや…。誰？」
困惑の表情のライをものともせず、キラーンと星をだして、その少女は、言う。
「なら、紹介しよう。私は、宇佐美栞。ライくんと同じオペレーターだよ～。メガネ人口増やそうぜ～」
!!!
!!!

宇佐美栞。
世界中が眼鏡になあれのキャッチコピーを持ち、ボーダーメガネ人間協会名誉会長と務める。メガネを愛し、愛される娘。そのメガネを布教する活動の傍ら、今は、まだだが。今はまだだが、風間隊をＡ級に導いた輝かしい実績を持つ。そして、好きなことに人の世話という、聖母の様な素晴らしい性格の持ち主。そう！玉狛の聖母なのである!!
心の動揺を隠しつつ、答える。
「へえ～。こんにちわ。ご存知かと思われますが、僕の名は風神ライです。どうぞよろしく。」
「うんうん。よろしく～。よし！お近づきの印にメガネを掛けないかい？」
・・・・・。
わ～!!!待って、今、玉狛の聖母からメガネかけようぜ勧誘を受けている??ゼータク。なんてゼータク。ワールドトリガーを愛するその他多勢、略して、ワ民の名において、この勧誘を断ることなんて出来るやつなど居るのか!!いや、いない!!
「はいぃ。喜んで。」
感動と最大級のヨロコビをなんとか心に抑えて不自然なく言った。頑張った。エライ。ライくんトッテモエライ。
「ふむ。よろしい。なら、この伊達メガネを!!」
「わ～。常時裸眼生活者に配慮したメガネだ～ありがと～。
失礼します～。」
ピカあああああああ!!!

「うわあああああああ!!!」
「どっどうしたの!!宇佐美さん!!」
「栞でいいよ…。ライくん…。」
奇跡的相性(マリアージュ)。
この世には、色々な意味で合わせてはイケナイ組み合わせというものが存在する。例えば、加古さんとしゅう。二人の好奇心と才能に料理をさせれば、あの菩薩、来馬ですら殺す。
今回の場合は、ライとメガネ。その御姿は、魔性のオーラが漂っていた。モブであったなら、即死。宇佐美だったからよかった。従兄弟が前髪を下ろせばイケメンになる人が居たからだ。彼が居なければ宇佐美も危なかった。
「大丈夫?栞ちゃん…?さん…?」
「ああ。ちゃんでもさんでもどちらでも良いから早くメガネを…!」
「あっ!そうだね!!外すよ!あっ!」
宇佐美運が今日は悪かった…!メガネを外そうとした瞬間、ライが後ろから押されてしまったのだ。
ドン!!!
それは、女の子なら憧れるシチュエーション。壁を背にして相手の正面に立ち、相手の背後の壁に手をついて、立ちはだかる・・・。
壁…「あああああああ!!!早く外してえええええ!!!」
サッとライからメガネを取る。賢明な判断だった。
「まさか・・・眼鏡に殺されそうになるなんて…!」
「栞さん???」
「ライくん。」
「はい。」
「人前で眼鏡をかけちゃ駄目だよ。」
「???」
「駄目だよ。」
「わっ分かりました。」
「ふむ。ならよし。…はあ。初対面からこんなことになってしまっ

たけど、オペレーターは、何でも聞いて!!」
「分かりました!!ありがとうございます!!」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
五日目
「ライくん。オペレーターは、どうかしら?」
「月見さん。ええ。だいぶわかってきました!」
グッと親指を立てるライ。その姿に月見は、ふふふ。っと笑みをこぼす。
「なら、実践練習してみましょうか。」
「え?」

*ある支部で。
「なんでええええええええ!!!!!!」
「ん?どうかしたの?」
ライは、困っていた。いや。その…わかってきた!で、ここまでいくとはふつう思わないのだ。そう!まさか、あの玉狛支部でオペレーターなど!!!
「ん?どうかしたの?じゃないですよ!!迅さん!!なんで、オペレーター歴五日の僕に…!ちゃっかり、支部まで来てるし…!!」
「あ〜あはは。実践練習って、大事だよ?」
「大事ですけど!?大事ですけど!!別に支部まで来る必要有りますか〜???」
「テンパってるなぁ〜
(そう言いつつもしっかりオペできてるのは、凄いことなんだけどなぁ〜。)」
迅は感心していた。何やら、文句は言っているようであったが、カタカタとオペをしっかりこなしていたのだ。ビュンビュン情報処理をして、随時更新されている。
「もおお!!迅さんっ!!南西方向二体です!!」
「はいはーい。」
「・・・迅さん未来予知あるからオペいらないんじゃないですか?」

「そんなに未来予知も完璧じゃありませんよっと。これで、全部？」
「はい。もうそろそろ、交代の時間です。お疲れさまでした。」
「はーい。お疲れ様～そっちへ戻るね。」
迅は、なんとかぼかした。
最近ライは、オペの練習のためブースに来ない。（そのため、ブースが少し荒れているのは別の話だが…。）
そこで、実践練習という名目でライに会うという作戦を思いついた。それには、ライと会うだけではなく、ライの初オペ…いろいろと独占できるものがあった。それ故、月見に自分のオペ初心者の有能さを示し、今空いてるからどうだ？っ的なことをいって実行した。玉狛支部に連れてきたのもバレないようにするため。その作戦がうまくいき、ルンルンな迅は、軽い足取りで玉狛支部まで向かう。
また、何も知らないライは・・・

「ふーう。」
実践練習が終了した。中々疲れるもんだな～。と呑気に今回のオペを振り返っていた。
そこに、女の子が降りてくる。
「あら？貴方誰よ。」
「!!えーっと、僕は…」
「何？不審者なわけ？…ってなわけ無いかオペしてたみたいだし。どーせ迅でしょ？」
「あ。はい。」
「ふーんそ。」
この後、迅さんとご飯食べて、終わりました。何だったんだ??
ーーーーーーーーー
六日目
「今日は、本部で実践練習よ。早くライくんには、卒業してもらわなくちゃいけなくなったの。」
「はぁ。」
なんだかよくわからないが、そういうことらしい。大変だなオペ

レーターも。
「理解してくれて嬉しいわ。今日の先生は・・・」
「こんにちは～羽矢です。よろしくね。」
「はい。よろしくおねがいします。」
今日もレッツプラクティス!!!!
?
「ですよね!?あの方の素晴らしさは言葉で…!!!」
「そうよ！言い表す方が失礼だわ!!」
「お姉様!!!」
「ライくん!!!!」
実践練習中、僕らは意気投合していた。いや？あれだよ？ちゃんと実践練習してるから。毎回喋る時は、内戦通話きってるからね？
ことの始まりは、実践練習の休憩中に来た、ある通知だった。そう。推し漫画のアニメ化通知。そこで、僕は、感動が抑えきれず、「え？ええええ??＄％＆＃＄％?!％％＄??」と言葉にならない叫びをしまった。
・・・仕方がない。だって、しょうがないじゃないか!!
無理だよお!!だって、アニメ化だよおおお???ワ民だって、４期が決まったら、叫ぶだろおお???
「・・・・」
なんとも言えない空気が流れる。あ～。パンピーとヲタクの差が・・・!!あれ？いやまて、確か今一緒にいるのは、羽矢さん…。ん？あっ！あの！二次創作物で、ヲタク夢主の味方じゃないか!!
よし！羽矢さんの方見てもじゃいじょゆぶじゃないか!!
チロ。…！　チロ。
二度見した。
羽矢さんは、泣いていた。
「はっ羽矢さん？」
「あ…ごめんなさい。ちょっと、諸事情がね…。ううっ。」
「・・・・!!」
なんて！美しい心!!!泣いている理由は知ってる。さっき羽矢さん

のスマホの画面はちらっと見えた。僕が叫んだ案件と一緒だ。
「ううっ。あ…ライくんはさっき叫んでいたけど大丈夫?あはは。泣いてる私が何いっているんだって感じだけど。」
「あ。僕は大丈夫です。羽矢さんは…いや、お姉様と呼ばせてください!お姉様は…美しい人ですね。貴方なら言えます。僕が今叫んだ理由。それは・・・・。」
「それは・・・?」
「賢い犬リリエンタールのアニメ化です。」
「はあっ!!」
羽矢さん、お姉様は、スマホ画面と僕を何度も見た。ぶんぶん首振ってる。
「まさか…!!まさか…!!ライくん…君は…!!!」
「はい。僕は…」
「「ヲタク。」」
「ライくん。話してくれてありがとう。その敬意を無駄にしないよう…。

語りましょう。

取り敢えず、履修済みの作品を教えなさい。今日は寝かせないわ。」
「はいっ!!!お姉様っっっっっっっっっっ!!!!!!!」

ーーーーーーーーーーーー

7日目

「とっても眠そうなライくん。オペになって一週間。どうだった?」
「はい。とても有意義な一週間でした。」
「そう。よかったわ。これで、一応一人前のオペよ。まあ。訓練は、とても駆け足だったけども。」
「ご指導ありがとうございました!」
「ふふ。こちらこそ。じゃあ…。」
「じゃあ!?」
「ええ。ライくんには、落ち着くまでアタッカーをしながら、新人育

成も少しやってもらうわ。」

「・・・ライ。了解。」

「俺、今日から狙撃手になるわ！」「「!?」」

ガヤガヤガヤ。

此処は、ボーダーのランク戦のブース。

今日も皆切磋琢磨して、己の技を磨いています。ある者は、さらなる高みへ。ある者は、早くB級になるぞと奮闘し、ある者は、課題もせずに戦闘の予感を感じてフラフラとブースを彷徨いていた。

そして、ういーんと小型高機能がある者を捕獲しようとブースへ来ていた。

「?何故この、ういーんという効果音がなる?まさか！しゅうのせいか!!アイツ!!・・・そんなことは、置いておこう。まずは、あの救いようがない阿呆だ。」

その赤い瞳でブースに入っていく救いようもない阿呆を捉えた。

そして、音も立てず、暗殺者のように背後に忍び寄る。最近これを戦闘でも使えないかと考えていたが、使えそうだ。しめしめ。と思いながら、目標の背後を取り確実に仕留める。

「ぐえええ!!!」

「おい。阿呆川。授業中の成績態度と試験成績についてと課題提出についての電話が入った。どういうことだ?５００文字以内で、反省の意を俺に示すように述べろ。」

「ぐえええぇぇ…。５００文字…?ええ?」

「早く答えろ。」

「ちょ！風間さん！腕といてよ！そのまま実行しないで!!って!?あれ?しゅうさんは?」

「しゅうは、今日用事があるそうだ。」

「へえ。そうなんだ～じゃなくて、放してよ!!風間さん!!」

「これで、別に良いだろう。もう喋れているんのだから。ほら。早く。５００文字。」

「ウッ!!!!ぐうううう!!!」

ランク戦のロビーは、通常運転だった。

ーーーーーーーーーーーーー

一風変わって、此処は、狙撃手訓練場。
狙撃手人口は、オペレーターと同じくらい。要するに…少ない。今の所代表と言えるのは、狙撃手の祖である、東春秋しかいない。そのため、この訓練場が混雑することはなく、比較的静かで、少しばかり銃声がなるだけであった。そんな、静かな中、身長１８７ｃｍの長身の男性がバンバン撃っていた。
コツコツと足音がなる。
「ふう。……東さん。狙撃手がそんなに足音鳴らして良いんですか？」
「よお。しゅう。・・・・普段は、勘弁してくれよ。」
「ははは。普段からしとかないといざっていう時出来ないって言われますがね。」
「・・・相変わらず、よく回る口だ。」
「ありがとうございますぅ～。」
「褒めてないぞ。」
「どうです～俺の腕前は。」
「露骨に話題をそらしたな。」
「だって、東さん褒めてくれないから。」
「・・・・・。よく、的の中心を当てているよ。初日にすれば、いい出来だ。しかしこれは…。」
ボコボコボコ!!!
東の見た的は、綺麗に真ん中を射抜いていた。しかし、それは真ん中以外を見たときである。真ん中の周りを見ると…。ボッコボッコである。
「荒削りといったところか。」
「うん。そうです。やっぱり、上手くは行かないや～。」
「いや。しゅう3日目だろ。これだけできれば十分…。」
「フッ。俺を舐めちゃ困るぜ。東さん！こんなところで止まる俺ではないんだ！」
「いや、だから！何処から来るんだその自信は!!」
「え？実績。」

「ムカつくなあ～。」
ドヤ顔かます、しゅうに本気ではないもののイラッとムカついた東。
「でも、実際問題、何が足りてないのかは、わかってるんだよねぇ～。」
「お。俺が言うまでもなく解析済みってことか？」
「そういうこと～
ねえ。
東さん。
重い狙撃トリガーない？」
「・・・知ってるくせによく言うな。しゅうは、どうせ開発中のあのトリガーの事知ってるんだろ。そして、試作者になりたい。わかった。用意するよ。でも、なんで重いのがいるんだ？」
「それこそわかってるくせに。よく言う…。」
「やり返しだな。」
「ムッ。
はいはい。しょうがないから言うよ～俺の今の問題点は、安定性。見ての通り、狙撃に安定性がまったくない。その証拠として、中心以外にボッコボコに穴が開いてる。でも！ちゃーんと真ん中に穴が開いてる。
そして～ここから、導き出せることは・・・・」
「イーグレットが軽すぎるということだな。」
「あ！東さんひどーい!!俺のセリフ…！」
「あはは。」
「もー。あはは。じゃないんだけど…。
・・・・。
そうだよ！東さんの言う通り、イーグレットは俺には軽すぎる。だから、安定性を増すために重いのが欲しかったんだ。
で～そのことを開発室の人に相談したら、色々と喋ってくれまして～。」

「そこで、しゅうは聞いたと。もうちょっと情報統制するべきだったか…。」
「フッ。東さん。俺は、東さんが重いの以外に軽いのを作ろうとしてるのも知ってるし、迅が何やら新しい攻撃の武器作ってるのも知ってるから、俺には、情報統制なんて無理なんだぜっ！」
キラーン。
三輪が出せなくて困っていた星を軽々と出すしゅう。東は、苦笑するしかない。
流石、神風の人間と言ったところか。
このまだ小さな世界であるボーダーでも情報戦はちゃっかりこなしているのだから。
情報。
それは、時にお金より価値がつくもの。
例えどんな人間でも弱みとなる情報を握られてしまえば、思いの儘となる。脅し、恐喝、支配なんでも、ある程度の人間には可能になるだろう。
東は、しゅうは敵に回してはいけないと心に刻む。そして、利用する。
「そうか。そんなに知っているなら開発を手伝ってくれないか？その方が早く進む。」
「いいよ～。開発者側に進めば、隠し機能とか追加できそうだし。」
「・・・」
いや。これは、逆に利用されてしまったか。と内心ハラハラしたが、気にしないようにしよう。
ヤケクソに結論づけた。
ーーーーーーーーーーー
＊開発室
「こんにちわ～。」
にこやかな笑顔で開発室に入室するしゅう。しかし、そこには・・・
「「「カエレ!!このイケメンが!!!」」」
しゅうのアンチがたくさんいた。

それもそう。開発室には、エンジニア達、つまり、男性しかいない。そのため、何徹もして、臭いのは当然だし、目の下には、隈が何重にも出来ている。しかし、最近はある男の子のお陰で改善は少しされてきているのだが…。

話が逸れた。そんな苦労人な人々には、健康的で、いいルックス、六頴館の生徒会長、おまけにクールのモテる四拍子が揃ったしゅうは目に毒だ。そのため、嫉妬、恨み、尊敬を超えて、また嫉妬、恨みの域に入りアンチをしている。

「お前のようなやつが…！こんな所に居て言い訳がない!!さっさと立ち去れええええ!!!」

「わあ。今日もアンチが酷い。」

「女の子でハーレムでも作っとけやあああああああ!!!!」

「いや。モテナイシ。それに、俺は、家族の方が大事なんですってば。」

「嘘をつくな!!イケメンンンン!!風間から聞いたぞ!!まあまあなかなかモテるってえええええ!!!ってか、家族の方が大事とか…！そこっ!!モテるとこおおおおお!!!」

「やめろ!!地力で勝負すんじゃねえ！」

「そうだぞ!!余計に傷つくだけだ!!」

「今日何徹なんです？寝たほうがいいですよ。」

「「五月蝿え!!仮眠室で寝ようとすると、７２時間くらい寝ちゃうんだよ!!７２時間もロスするなんてもったいないだろう!!」」

「わー。開発者魂。」

「それに最近は、ライくんが強制的に寝かせようとしてくるから。」

「え？何て？」

遠い遠い目をしている開発者達。

「ライくん。温かい栄養満点なご飯、お風呂中外で待機してくれて、寝てたら起こしてくれて…それでも寝ないと、バイパーでＰＣを貫通させるよ。って脅して…。」

「え!?何やってるの!?ライは!!??本当に何やってるの??」
「ショタには逆らえない体になってしまったんだ…。たまに耳元でメス声も出してくるから…。」
かあああああああ。っと両手で真っ赤な顔を隠す開発者達。ＰＣで作業していた者も、一回確実に手が止まっている。
ライは…いや、家の妹は、みらいは完璧に開発室の皆を調教っ…ゴホンゴホン。色々な方向から労ってるんだな…。
「あ。しゅう。此処に居たのか。東が奥で待ってるぞ～。」
ジト目で冬島さんを見る。しゅう。
「なっ。なんだよ。しゅう?」
「いや～ぁ～。冬島さんもライの施術を受けてるのかなーって。」
「しゅっ!!しゅう!!そのことを思い出させるんじゃねー!!照れちゃうだろうが!!俺は…!!俺は…!あんな辱め…!!中学生に優しくされる辱め…!!」
「めちゃ施術を受けてるんじゃん。めちゃ癒されてんじゃん。」
「ＪＫに弱い俺が…あんな可愛い声をヤローから聞いて…嗚呼!!」
「大丈夫ですか!冬島さんんんん!!!（ヤローではないんだよなぁ～）」
「俺達の努力の結晶を…屍を…超えていくんだ…!!」
そう言って、トボトボと自分のデスクへ戻っていく冬島さん。此処で倒れず、自分のデスクへ戻っていくのは、開発者クオリティ・・・。
そんな、冬島さんに背を向けて開発室のある一室へと入った。
「東さーん。遅くなりました～。」
「おう。しゅう。よく来たな。」
「で～?どれくらい進んでるんです?」
「ああ。此処までだな。」
「ああそれなら、［なんか小難しい集積回路の仕組みの話］の方がいいんじゃないですか?」
「そうだな～その方がトリオン効率がいいかもしれない。でも、［また、なんか小難しい話］もこういうメリットがあるぞ。」
「あ!その方が軽くなるのか!流石に、少しぐらいは持ち運べたほ

うがいいですもんね～。なら、切り替えるようにすれば…。」
？
5時間経過
「はー。実案完成…。こっから、起こしですね…。もうひと頑張り…。」
そこからまた10時間程度…
「おい。しゅう。もう朝だぞ…学校は…」
「ハッ!!まずい…でも…トリオン体だから、大丈夫だっ…!」
「そうだ…高校生から何徹もしちゃいけないぞ…。」
「東さんも大学でしょう？大丈夫なんですか？講義とか…。」
「今日は、午後からだからな…。」
「大学生ずるい…。」
「はは。しゅうももうそろそろだろう…。」
「まあ。親が大学と仲が良かったんで、この学科来いって、指名が来てますけどね。」
「もう推薦話か。」
「ええ。ぶっちゃけ、自分のよりあのアホ川の方が心配なんです。」
「ああ…。」
なんとも言えない空気になってしまった。
「じゃあ行きますね。お疲れさまです。」
「お～。」
半分死にかけの東が見送ってこの日の開発は終了した。
＿人人人人人人人人人人人人＿
＞そこから3日の月日が経過した！＜
？Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ Y^
Y？
「「ついに…ついに…できたーーーー!!!」」
薄暗い開発室の一室で男二人が雄叫びに近い声を上げて、喜びを表

した。
「「アイビス。」」
「ようやく、完成したな。」
「ええ、東さん。とても長かったです。途中であのアホ川のせいで呼ばれて作業のスピードが落ちて…。」
「あははは…。」
苦笑いするしかない東。
しゅうと関わると必ず顔を出してくる太刀川。
どうにかしてほしいものである。
「じゃ。東さん、試し打ちしてきまーす！」
「ちょっと待とうか。しゅうくん。」
「なんですか？」
「もしよかったら、軽い方も手伝ってくれ。アイビスを作るのも楽しそうにやってたから、いいと思うんだが…。」
「・・・。」
「貸し一つで頼むよ。最近は大学の方が忙しいんだ。頼む。」
手を合わせてお願いする東。

「・・・その言葉待ってました。」
にやあっと口を三日月にしてワラウしゅう。
「!?」
「俺は、東さんからのお願いを待ってたんですよ。その方がただトリガー作るよりメリットがあるって、考えたんです。情報を聞いた時から。それに、東さんにもあの通知来たでしょ？なので、その下準備をしようかなーっと…。
今、一つの貸し今使いますね。
俺が狙撃初めたって皆に秘密にしてくれませんか？その方が楽しくなると思うんで。」
「・・・わかった。」
「ありがとうございます。じゃあ、行きますね。軽い方の詳細は、またデータ、パソコンに送ってください。」

しゅうは、いつも通りの爽やかな笑みで去っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ふーふふーん。大方予想通りに進んでいったな。東さん、疲れるとボロが出やすいな。やっぱり、東さんも人か…。

弱みを掴んだはいいけど、もっかい俺がすると警戒されやすいからあの子にも流しておくか。

初期という時間のメリットで結構俺好みにカスタマイズ出来たし、うんうん。なかなか上々。」

「全ては、俺の目的のために。」

忍田本部長の計略

「すまんな！ライ！」
「ぐえっ！って・・・またこれぇ????」
ーーーーーーーーーーーーーー
「二宮！」
「はい。なんでしょう？って・・・わあああああ!!!!」
ーーーーーーーーーーーーーー
「加古！」
「はい。なにかしら？え？嫌ですけど？え？・・・きゃあああああ!!!!」
ーーーーーーーーーーーーーー
「三輪！」
「はあ。分かりました。良いですよ。場所は何処ですか？え？何泣いてるんですか？」
ーーーーーーーーーーーーーー
・・・。・・・。ん!?此処は？
「うおおおおおお!!!!東!!しっかりキャッチしろよ！今二宮生身だからな！落っことしたらやばいぞ!!」
「ええ!?忍田さんんんんん!?」
「ほれ!!」
「わあ!!」
「次も来るからな！」
んんんんん!?なんで、二宮さんが忍田さんに生身でオーバースローで投げ込まれて東さんがキャッチしてんの!?
・・・・・・あ！これ夢か！そうだな！さて、もう一眠り…。
「次来たぞーーーーーーー東ーーーーーーーー!!」
夢じゃないな。これは。
目の前で、加古さんがサイドスローで投げられている。夢・じ・や・な・い。
「え??これは???どういう状況ですか!?東さん!!」
「なんだ。ライ。忍田本部長から聞いてないのか？」

「秀次!!」
おおおう。なんか、凄いメンツが揃ってしまったぞ。ん?ちょっと待て?このメンツって・・・。
旧東…「俺から説明しよう」
「これから、隊員が増加することを予測して、集団戦法を展開していこうという動きがあってな。忍田さん指名でモデルとなる隊を作るために4人に集まってもらった。」
「へえ。」
「これからは、チームだ。よろしくな。」
ニコッと東さん。うん。優しい雰囲気の人だなあ。
「・・・。集められた理由は分かりました。ですが、なんで加古と一緒なんですか。」
明らかに眉間にシワを寄せ、ムスッとしている。
「あら?二宮くん。忍田本部長からの指名になにか文句でもあるのかしら?」
「はぁ?お前のワガママ言わなければ良い話だろうが?」
「あら?私がワガママ?それは、二宮くんでしょう?」
「あ〝?」
「だって、このモデル部隊に文句をいっているんだもの。私は、言ってないわ。そりゃあ、二宮くんと隊を組むのは嫌よ?でも、わざわざそうしたってことは、何か訳があるんじゃないかしら?」
「「・・・」」
二宮は、論で詰められ何も言えなくなってしまった。
その会話を止めようとした東は、組んだ訳〝問題児三人に戦術と連携を教えるため。〟という本人に言えないような理由のため黙ってしまった。
「じゃあ、その訳は、隊を組んでわかってくるんですね!」
メシア、ライ。唯一の東のサポート役。気を失って忘れていたが、この隊を作った理由もちょっと前に教えてもらっていた。すかさずのサポートで東を救う。
「ああ。そうだ。チームとして頑張ろうな。」

そこから、チームとしての色々な準備を行った。
まずは、隊結成の書類。そこでもまだ、二宮さんが苦い顔をしていたのは見ないふりをしよう。
そして、僕がオペレーターの欄に名前を書くと、その時ようやく気づかれたようだ。僕が戦闘員として、この隊に居ないことに。
「は？何故、戦闘員ではない？」
「そうよ！ライくん!!何故戦闘員ではないの？」
なんて、小言をもらってしまった。いや～よう言えば、僕もなんでかしらないや。
面倒なので、誤魔化した。実は、知りませんよ～なんて言えるはずもないからだ。
その後は、隊服を決めた。そこでもまた、二宮さんと加古さんの揉め事があったのは、目をつぶろう。
隊服は、ジャージをカスタマイズしたもの。なんて、ダサさかったので、チャイナパーカーを僕がデザインした。色は、黒で、袖には、赤のラインを入れ、背中には、中国のかっこいい紋章を適当に。
・・・・
・・・
お気づきだろうか？
二宮さんにパーカーを着せているのだ。二宮さんにだぞ!?ほとんど本編でスーツの二宮さんが！誰か描いてぇ～!!
頑張った！めちゃめちゃ文句を言われてしまったが、それなら、僕に勝ってみろ!!っと模擬戦をした所圧勝！はっ！オタクの創作意欲舐めんなあああ!!!
そして、その次は、隊室の内装デザイン決め。これは、僕は、全く干渉しなかった。
あとから見たが、凝った作りにしなかったようだ。あ。でも、キッチンは、ある。あれ？寒気が…。
とっとにかく、隊として無事東隊が結成された。
ーーーーーーーー
翌日、隊としての初めての防衛任務を行う。

これがまあ、ひどかった。

敵としては、モールモッドが数十体と多くはなかったが…

いつも通りに加古さんと二宮さんの口論が始まる。東さんは、ため息をついていて、説教。そして、ライ（僕）が慰める。

すると、運悪くモールモッドが出現。秀次が我先に駆逐しに行く。しかし、数が多く、苦戦を強いられる。

そのため、ライ（僕）が即座に援護が出来る射手組に依頼。依頼された射手組は、自由気ままに援護。

「「秀次(くん)そっちへ幾つか飛ばしたぞ(わ)。適当に回避しろ(してね)」」

二宮さんが、ハウンドの嵐で敵を殲滅し、加古さんが残りの敵を撃ち漏らさず殲滅するがごとく、ハウンドの追跡機能強めで、放つ。

この作戦事態良いように思えたのだが、援護側の動きでは無かった。

なんと、この援護で、秀次はベイルアウト。

どんな援護が来るかわからなかったので、さばきながらもどんな援護が来ても対処出来るよう、構えてはいた。そのため二宮さんのハウンドの嵐は、少し傷は負ったものの回避に成功。傷を負ったため、立て直してから撃ち漏らしたモールモッドを倒そうとした時、加古さんの追跡機能強めのハウンドと遭遇。秀次は、そのハウンドに気付いたが、二宮さんの嵐で負った傷もあり回避出来ずベイルアウト。

そこで、防衛任務は終了。交代の時間となった。

神の嫌がらせか。交代でも一悶着あったのだ。問題は、その交代相手であった。

その相手…真なるバトルジャンキー馬鹿、太刀川慶。

彼は、来た時はこってり絞られたのかすこしやつれた顔をしていたが、二宮さんと加古さんのなんとも言えない顔で何かを察したのかニヤニヤし始めた。そして、彼は、こう発言した。

「あれ～？二宮ぁ～。なんでそんな顔してるんだ～？あれ???昨日結成した、チームの一人がいないぞぉ～???もしかしてぇ～ベイルアウトさせちゃったとかぁ～???あの自信に溢れた二宮がぁ～???あっれれええ～???」

そう！彼は、渾身の煽りをしてきたのだ！いつもの恨みと言わんばかりに!!!

流石に二宮さんもブチギレる。

「あ、？アナボコにしてやろうか???」

何故かいつも自信に溢れている二宮が自信がなさげだと言うことに優劣感があり余裕を醸し出している太刀川さん

VS

最悪な奴に痛いところを突かれていつも通り完璧ではなく、余裕が全くない二宮さん

のフリーラップバトルが起こりそうになったのだ!!これはまあ、完璧に太刀川さんが悪いんですけど。それに、太刀川さんがフリーラップバトルしたら、語彙のなさですぐ負けそうだけど。

いつもなら、こんな均衡に全くならない二人。その二人のドンパチ争いが起こりそうな瞬間・・・

「こらこら。ふたりともやめなさい。」

フェアリー東が止めた。

「二宮。今はこんなことをやっている場合か？よく考えろ。

太刀川。そんなにバトルがしたいなら、課題が終わった状態でブースでやってくれ。」

「・・・」

「はーい。」

二宮さんは、神妙な面持ちで本部へ歩みを進め、

太刀川さんは、チェーっとつまらなさそうな顔をして持ち場へ。

「太刀川随分つまらなさそうな顔をしているな。別に俺は、良いんだぞ？この後、隊のことが終わったら、神風と忍田本部長とお話をしても。」

急に青ざめる太刀川さん。

「まっ真面目にします。」
その太刀川さんの一言で、第一期東隊の初防衛任務が終了した。

ーーーーーーーーーー
じゅうじゅうじゅう。
「あ。東さんサンチュ食べたいです。」
「おおわかった。飲み物は…。」
「僕は、りんごジュースがいいです。秀次は？」
「僕も同じものを。」
「そうか。ふたりともわかった。二宮と加古は？」
「俺は、ジンジャエールを。」
「私も、りんごジュースで。」
「わかった。すいませーん。」
シーンと重たい空気が流れる。まあ。あの両親が亡くなったときよりかマシだけど。
・・・そりゃあそうだろう。この手のタイプの人間は、失敗なれしてない。なれなくてもいいんだが。でも、失敗から立ち上がるのは案外サクッとする。そういうとこムカつくんだけど…。けど、何しろ今日は、運が悪かった。まさか、僕も初手でこうなるとは思わなかったからな～。これは、東先生の頑張りどころかな？いや。此処は、フォローするか。最初だし。お尻を叩いてやりますか！
「肉は、最初にセット頼んで、その後は自由でいいか？」
「「「はい。」」」
「じゃあ、今日の反省をしていくか。」
「!!!」
「まずは、ん～。ライから。」
「はーい。せっかくの焼肉が美味しくなくなるのは嫌なので手短に。今回の一番の反省点は、ズバリ、ホウレンソウでしょうね。報告、連絡、相談がきっちり出来てなかったことです。それに、僕のオペレートも不十分だと思いました。もうちょっと具体的に指示するべきだったと思います。や～今日は様子見だったんですけど、ひどかっ

たですもんね～。」
「らっライ…。」
「二宮さん、加古さん。
　辛気臭い空気は嫌いなんで、いつもの二人に戻ってくださいよ。そんなに重く考えることはないです。だって、今回が初回なんですよ？失敗して当然です。
　知ってますか？ある人が言っていたんです。本当の失敗は、そうやってウジウジして、ずっと下を向いていることです。つまりは・・・早く立ち上がってください。ふたりとも。今回はたかが防衛任務です。」
「「・・・」」
「でも、ライ。これが本番だったら・・・」
「秀次～イフ想像は考えないの！意味ないから!!」
「ふふふ。ありがと。ライくん。あーあー。悩んでたのが馬鹿みたいだわ。」
「え!?加古さんが悩む・・・？」
「あらぁ？ライくん？」
「なっなんでもないです。」
「フンッ。」
「では…次は、二宮。」
「はい。俺の行動は合ってました。」
「あら。二宮くん。生意気ね。」
「加古さん。どーどー。」
「フンッ。でも、俺の反省点は、繋ぐ攻撃をしなかった。放った後どうなるかを考えてなかった点だと思います。」
「そうだな。ソロとチームで大きく変わるところだ。次からは、報連相である、連携を心がけていこう。次加古。」
「そうねぇ。私も二宮くんと同じ様な点かしら。付け加えるとしたら、とても嫌だけれど、二宮くんとも口論してないで連携するべきだったのかしらね。」
「うん。戦闘中に口論するのは、いただけないな。今の結成したて

連携は会話が必須だ。少しずつでもやっていくように。次、秀次。」
「はい。俺は、トリオン兵が居たからと言ってすぐに飛び出しすぎました。それこそ、もっとライと相談して、加古さんや東さん、二宮さんと連携するべきでした。」
「いや…」
「秀次。それは、違うんじゃない？」
「・・・。」
「それだと、攻撃手である、秀次の強みが死んじゃうよ？」
「どういうことだ？ライ？」
これは…と東は、思った。ライがこの隊における役割である。この問題児たちをまとめるのは、俺だけでは難しい。だから、第二のまとめ役として、三人からある程度信用されているライが選ばれたのだろう。その証拠にライを先陣に話させることにより、空気が良くなって、よりよい意見が出た。
「まず、攻撃手っていうのは、射程が短い。ということは、ある程度敵に接近しなければ攻撃は、始まらない。だから、まずは、敵に近寄ることが最重要事項だね！」
「うん。」
「だ・か・ら、秀次のトリオン兵が居たからすぐに飛び出していったという行動は、あながち間違いではない。攻撃手としては、最適解であったんだよ。自分の間合い（テリトリー）に自ら作りにいったんだ。じゃあさ、何が問題だったと思う？」
「・・・。」
「一つヒントを出そうか。これは、皆の共通の課題といえる。まあ。始めっから出来るなんて、よっぽどの信頼がないと無理だけど。」
「・・・。あ。加古さんや二宮さんの弾トリガーの見極め。」
「そうそう！それだよ!!
言葉を変えれば、弾トリガーをどの様に放って援護してくれたか考えて、秀次がそれに合わせた行動をすること！うんうん。えらいえらい～。」
「???」

素直に撫でられ少し照れる三輪。それを微笑ましい顔で見つめる保護者ズ。
「おまたせしましたー。みかどんどん焼肉セット5人前で～す。」
「ありがとうございます。」
「秀次については、ライにほとんど…いや。全部言われちゃったから、言うことはないな。
肉も来たし、食べるか！」

「「「ハイっ!!!!!」」」

「わ～美味しそ!!加古さん!!タン！タン食べたいです!!」
「秀次。これを食うか。それとも、こっちか？」
「あ。えっと…二宮さん…俺は…。」
「ライくん食べ盛りでしょう？沢山食べましょ～」

焼肉をめっちゃ食べた。

「なんだか、財布が寂しくなった。」
ーーーーーーーーーーーー
チームにもなれてきた3日後…。
ある、通知が来た。

『ボーダーチームランク戦、エキシビションマッチのお知らせ。
第1試合　東隊ＶＳ神風隊ＶＳ忍田隊
詳細は、後日連絡。
また、この試合は、新規入隊生、訓練生へのリクリエーションとする。
以上。』

C級によらないC級のためのエキシビジョンマッチ①

あああ。
あのふざけた通知が来てから早2日。
我が東隊は、大荒れです。

「おい。加古。連携はどうした。俺の言うことを何故聞かない。」
「じゃあ、なんで二宮くんの言うことを聞かなくてはいけないのかしら？意味がわからないわ。それに、二宮くんの作戦は、連携ではないから言うとこを聞く必要性が感じないわ～。」
「・・・その方法の方が手早く片付く。」
「あら？スピード重視？火力だけでブイブイ言わせるのは、不服だし、面白くないわよ。」
「作戦に面白さはいるのか？加古？」
「はあ。二宮くんははっきり言わないとわからないのね。面白くないってのは、工夫を凝らしてないってこと。火力は、大きな力だけどそれだけじゃいつか限界がくるわ。ねえ。三輪くん。」
「はい。俺もそうだと思います。」
「！」
「そうよね～。そうよね～。あんな力押しのトリオン持ってる人なら誰でも出来る作戦なんて、嫌よね～。」
「いや。でも、あれはあれでトリオン兵を撲滅するやり方としては、ざまあみろって感じで、素晴らしいと思います。」
「・・・。」
中学生あるある尖りに何も言えない加古さん。
いや、そうじゃない。と言いたげな顔だった。
秀次くん…お姉さんが助かったのにネイバーぶっ殺すマンに何故なってしまったのか…
※主に主犯は、かなたとしゅうです。

「話し合いは終わったか？」
我らが隊長東春秋が秀次くんの作った沈黙を破る。
いや、東さん。完璧に口論でしたよ。というツッコミは心にしまい、オペレーター用のデスクから出る。
「すいませーん。遅くなりましたー。引き継ぎ終わりましたー。」

この男（女）、嘘をついているのである。

引き継ぎなんて〝二宮が何故連携が出来ない？〟っと問いかけた時点で終わっていた。
それなのに、何食わぬ顔で、今までのことは関与してませんよーという雰囲気を出しているライ。
面倒な雰囲気を察知して、引き継ぎをなあなあに伸ばしていたのだ。
そして、この絶妙なタイミング。天然とネイバー殺し以外は、気付いてはいたが黙っていた。

大人である。
「おう。おつかれ。それじゃあ、今回の…」
ピコン！
「・・・反省は、後だな。ライ、モニターに映してくれ。多分・・・」
「あー。はい。東さんの予想通り、エキシビションマッチの詳細ですね～」
『ボーダーチームランク戦、エキシビションマッチのお知らせ。

第1試合　東隊　東春秋
風神ライ
加古望
二宮匡貴
三輪秀次
ＶＳ

神風隊　宇佐美栞
　　神風しゅう
　　風間蒼也
　　諏訪洸太郎
　　寺島雷蔵
ＶＳ
忍田隊　出水公平
　　忍田真史
　　太刀川慶
　　月見蓮
　　沢村響子

この試合は、今後のチームランク戦を想定したものとする。
そして、この試合は、今後のランク戦の順位には全く関係のないものとする。
～ルール説明～
上に表記された三チームの三つ巴で戦う。
ランク戦は、ポイント制であり、最終的に獲得ポイントが一番高かったチームが勝利となる。
他のチームを一人倒せば１Ｐｔ、試合を生き残れば、生き残ったチームに生存点ボーナスとして２Ｐｔ、加算される。トリオン漏出で敗れた場合は、最も損傷を与えた隊員のポイントとなる。
マップは、市街地Ａとする。
制限時間は６０分。

注意事項
市街地Ａのマップより外へいった場合は、ベイルアウトと同じ扱いとする。
自発的ベイルアウトは、可能。
しかし、半径４５メートル以内に以内に敵隊員が居る場合は出来ない。

また、時間切れになって、決着がつかなくなってしまった場合は、そこで試合終了。生存点ボーナスは入らない。
勝利したチームには、今回の試合で個人ポイントの５００ポイント贈答がある。
それに加え、ランク戦でも、個人と同様に個人ポイントの増減がある。

訓練生、入隊生へのリクリエーションについて。
この試合は、リアルタイムでランク戦ブースへの放映を行う。
そこには、現在Ｂ級の隊員やＣ級の訓練生や今期入隊の入隊生へのランク戦やボーダーの説明も含まれている。

以上。』

「結構ルールが細かいな。」
「そうだねぇ。だけど、ここまで決めておかないと、曖昧なところが増えちゃうからね。曖昧すぎると審判が大変なことになるし。」
「あ～。そうか。それはそうだな。ライ。」
「秀次！そ・れ・に！細かいだけじゃなくて、面白いところもあるよ～リアルタイムでランク戦ブースへの放映を行う。ってとこ。これって、ミスったら公開処刑ってことでしょう？下手なことをしたら、新人に舐められちゃうね～」
「ふ～ん。面白そうね～。ねぇ。二宮くん。二宮くんが即落ちたら大笑いしてあげる。」
「あ〟？そんなことあるわけ無いだろ。」
「あ。二宮さん、それフラグだ～。」
「ははは。そうだな。大恥をかかないように作戦を立てていかないとな。」
「「「了解。」」」
「では・・・作戦を考える上で考慮する点は、すり合わせておこう。秀次。ランク戦と個人戦で異なる点は？一つでもいいから挙げてみ

ろ。」
にこにこと優しい笑みで答えを求める東先生。
いい先生だね！学校の先生もこのくらい物腰柔らかくしてくれる人がいればいいのに…。
「・・・人数の増加による個人の戦力上昇ですか？個人戦は、１ＶＳ１が多いのでその人個人を攻略すれば、いいですが、チーム戦法となると個人戦で足りない部分をチームで補って個人の力もアップするのかなと。」
「おお。いいところに目をつけたな。チーム戦は、個人戦とは異なり、戦略がより複雑になることが予想される。しっかり、相手の力量を予想して戦略立てをしていこう。」
にこにこ。
にこにこ。
次を指定せず、ニコニコする東先生。
あっ？あれ？どうしたんです・・・!!!
あ。わっわかってしまった。
わかっちゃったあ～。東先生が秀次に求めるさらなる答え…!!・・・最年少に答えてほしいんですね。僕みたいに初々しさを欠如してしまった生徒ではなく、まだ中学生の初々しさを残した秀次に・・・！仕方ない。
ちょいちょい。ちょい。
東先生をちょいちょいと指を指す僕。秀次気付いて！お願いだから!!と心で叫ぶ！
ランク戦と個人戦で大きく変わるのは・・・！
「あっ！狙撃を狙われる可能性が大きく違います！」
勝った!!!
「おう。そうだな。」
にこにこ。

確実に周りに花が咲いている。
「あ。他にポジションとう言う視点で考えると…ほっ他には、オペレータのサポートですか…？」
「あっ！そうだね！秀次！ありがとう！」
「？
　ああ。」
ふふふ。なんか嬉しいな。秀次にオペレーターとしての存在を認めてもらった気がして。
「うんうん。いい感じで意見が出たな。それでは、次、二宮。」
「はい・・・。」
・
・
・
「よし。それでは、二宮、加古、三輪の三人に課題を出そう。今回のチームランク戦エキシビジョンマッチについてだ。」
「あれ僕は？」
「課題・・・それは、三人には、戦術を考えてもらう。」
「あれー？僕無視ですかー???」
「戦術をイチから考えるのは難しい。だから、少し助言をしておこう。
　初めに、戦術とは、作戦または戦闘の直接目標を，最も効果的に獲得することをねらいとして行われる方法的技術。のことを言う。
　そして、戦いとは、なまものだ。一秒一秒で、戦況が変わる。だから、その戦術を成功したからとて勝利するという約束は出来ない。
　それに、完璧な戦術はこの世に存在しない。必ず穴があり、欠点がある。
　だからこそ、臨機応変に考えてくれ。」
「「はい。」」
「そして、お待ちかねのライくん。（小声）」
「は～い。（小声）」
クワッっと目を見開いて東は（アイコンタクトで）言った。

「(フォロー、ヨ・ロ・シ・ク。)」
「(はい・・・・。)」
「それでは、解散。」
ーーーーーーーーーーーー
「・・・で、さっきの話だが、加古。」
「あら。なあに?二宮くん。またさっきの話を掘り返すのかしら?そんなことしても平行線よ。」
「それは、お前が・・・」
高校生組がやんややんやし始めたぞ・・・
「ねえ。秀次、この後どうする?ランク戦にでもいく?」
「ん~。とりあえず、東さんからの課題に少し取り掛かりたい。戦術をイチから考えるなんて初めてだしな。」
「了解。じゃあ、僕の部屋行く?食堂で考えてて、出水とかに見られたら意味ないし、僕、自分の宿題終わらせたいから。」
「よし。そうしよう。」
「じゃあレッツゴー!」
隊室を出て、誰も居ない穴場の自動販売機の前に二人で移動する。
「ここまで来れば誰も居ないね。」
「ああ。」
ピッ。ピッ。ガチャン。
ミニ紙パックの明○のフルーツオレを買うと、目の前に半透明なパネルが出てくる。
チュー。
カタカタ。
ー435372522 20ー

チュー。
ぷはっ!はー。
☒■■■■■☒
パスワードを発した。
?パスワード　認証?

ピシュンッ!!
ある一つの部屋についた。
此処は、ボーダー内にある神風みらい兼風神ライの為にある部屋。
オープン型の部屋で、キッチンと居間が筒抜けになっており、居間にはどでかいモニターがついている。
その前には、大きなちゃぶ台と座り心地が良さそうな大きなソファーが置いてある。
ここは、とてもシンプル。
さらさらさら。
私は、宿題を流れる川のように、淡々と作業のようにこなしている。
それと対照的なのが秀次くん。
さっきからうーん。うーん。と唸っている。
そこに、年相応さが出てかわいいのは、気の所為ではない。
横顔きれい。かっこいい…。
推し愛でてる…。
・・・ゴホン。
・・・話を戻そう。
まぁ。そりゃあ、そうなるだろう。
私みたいに前世でこの隊を攻略するならこうじゃないか？いや、この隊と三つ巴になったら…とか考える立派なワ民ではないからな～。
宿題です。さあ相手チームを殺すｏｒ貶める作戦を考えてください。
なんて言われてサッと作戦が出てくる中学生なんていてたまるか。
サイコパスすぎる。
でも、原作だったらそうだったのかも。
あんないいお姉ちゃんがなくなったとしたら悲しくて恨んで憎んでしまう気持ちも分かる。
三輪秀次のネイバー絶対殺すマンになったのは、そりゃあ、憎しみや悲しみもあっただろう。
その２つの感情はとっても類似してるから。
でも、一番は焦り。

急に変わってしまった現実への焦りだ。
焦りからのどうしようもない怒り、憎み、恨み。
そして、何故憎むのか？
それは、人為的に姉が亡くなったからであろう。
もし、自然的…例えば、災害などでなくなった場合は？
これは、私と僕が好まないＩＦの話であり、現実には違うかもしれない。
・・・あー。
やめやめ。
やはり、ＩＦ話は嫌いだ。
考えたところでどうもならない。
客観的にものを見る。という点や様々な可能性を考える。という点ではいいかもしれないが基本後祭り。
意味ないし、無駄。
それに・・・本人の前で本人の考察なんて恥ずかしい・・・！
だけど、それでも、考察はやめれないよねー。
目の前に答えがあると知っていても、そのワクワクやドキドキしてる時間が楽しんだから。
でも、恥っっっっず!!
あーはずー。
話がクソほどずれた。
そうそう。戦術！考えるのをフォローしなきゃ！
「どうしたんだ？みらい？顔が赤い気がするが…。」
「!?なっなんでもないよ!!!それより…秀次くんの課題はどう？」
「ん～。まだあまり進んでいないな。やっぱり…難しい…ム…。」
!!!
何!!!可愛い!!
その、ム…。は卑怯では!?
てか、そんなキャラでしたっけ？秀次くん???
丸くなった・・・？
やばい。脳内で話が脱線しすぎてる。

時を戻そう!!
「そうだね…。やっぱり、作戦立てるのは難しいよね…。
なら!この、神風みらいが教えてあげよう!」
「おお!」
「ではでは~みらいちゃんのぉ~
ぼーだーえきしびじょんまっちのせんじゅつたてこうざ~
いぇーい。ぱぱふ~
では、いくよ~。
秀次くん!作戦立てに必要な情報は何かね?」
「敵の情報。」
声が低かった。
目にハイライトがなかった…。
のほほ~ん。な雰囲気な私とは大違いだよ…。
でも大丈夫。
もう慣れてるから。
「そうだね。
でもね秀次くん。
ちゃんと見て。
大切なこと見落としてる。
もう一回聞くよ。
作戦立てに必要な情報は?」
「・・・わかんないな。」
「・・・彼を知り己を知れば百戦殆からず。」
「あ!仲間の情報か・・・!」
「そうそう。
これが一番大切。
もー東さんに口酸っぱく言われてるでしょう?
連携が鍵だだの、大切だだの~。」
「う・・・。」
んんんんんんん!!!
何なんだね君はぁ!!!

今日は秀次くんの可愛さがバク上がりなんだが!?
「私の一つの助言で気付けたんだから、そんなに落ち込むことないよ。」
も～なんか、可愛いなあ～。
ヨシヨシ。なでなで。
「！」
秀次くんは、びっくりした顔をして下に俯いてしまった。
あ。ちょっと拗ねたな…。
顔赤いし、口とんがらかしてるし。
「よーしよーし。
ほらほら。
敵の情報は、あつめたんでしょう？
そしたら、最近のログ見て、味方の情報集めよ～。
ね？」
「・・・ログを見る。」
「ログ出来て、便利になったよね～。
ログがあると技とか練習してる時の様子を客観的に見れるから完成度とスピードが格段に上がる。」
「確か、発案はかなただったか？」
「そうそう。かなたお兄ちゃんのＳＦと関係があって、そのＳＦを十分に活用できるよう、かなたお兄ちゃんが開発したんだよ。」
そう。〝ログ２万回見ました！〟のログの誕生秘話は、こうであった。
私が入隊した時、ログ制度はなかった。
いや。正しくは、制作途中というべきだろう。
それっぽい原型は出来ていた。
しかし、その時は、今と違いボーダー初期。
第一優先の環境設備を整えるのに大変だったため、ログ機能なんてものには、皆基礎だけ作っておいて後で完成させようと思っていたらしい。
そこに現れたのは、贋作のＳＦ持ちである、我が兄神風かなた。

※贋作のＳＦとは…簡単に言えば、見様見真似がとても上手。
技の向上のため、いつでも皆の戦闘シーンを見れるように、見て自分の手札を増やせるように…など色々かなたお兄ちゃんなりの考えがあり、ログ機能が誕生した。
そのログ機能。
今となっては、個人ランク戦には欠かせない、相手の情報収集の手段であり、自分のバトルスタイルを客観的に見たりなど…とても重宝されている。
そう思えば、あのシスコン（かなたお兄ちゃん）もすごいのだろう。
普段は、全く見えないのだが・・・。
ＩＮ Ａｍｅｒｉｃａ
「へくしゅ。ん～。・・・みらいが僕のことを思ってくれたのかな～？」
「Ｋａｎａｔａ，ｗｈａｔ，ｓ ｗｒｏｎｇ？（かなた、どうしたんだい？）」
「Ｏｈ． Ｉｔ ｓｅｅｍｓ ｔｈａｔ ｍｙ ｄｅａｒ ａｎｄ ｃｕｔｅ ｌｉｔｔｌｅ ｓｉｓｔｅｒ ｔｈｏｕｇｈｔ ｏｆ ｍｅ．（ああ。愛しの可愛い僕の妹が僕のことを思ってくれたらしいんだ。）」
「Ｒｅａｌｌｙ？ Ｔｈａｔ，ｓ ｇｏｏｄ．（本当に？それは、良かったね。）」←冗談だと思ってる。
「Ｙｅａｈ． Ｉ ｆｅｅｌ ｓｏ ｇｒｅａｔ． Ｌａｕｒｅｎ．（うん。とても素晴らしい気分だよ。ローラン。）」←おや。これは、布教出来るな。と思っている。
？戻って日本の三門市
「ブルッ!!なんか悪寒がする…。」
「大丈夫か？みらい？」
「ふぁ～。眠くなってきたのに変な感じ…。」
「ああ。副作用か…。寝るか？」
「うん。寝る。ふぁ～秀次くん。背中貸して…。」
「ん。」

「おやすみ～。」

そこで、私の意識は、温かい夢の中へ・・・・。

やりたいからやるんだ番外編！：バッ　バッ　バグトリガーバク!!!

～入れ替わり編～

それは、いつもと少し変わったメンツで起こったことであった。

「「あ。」」

「「「お。」」」

偶然か、必然か、ご都合主義か、ご都合主義か。

真実は、定かではないが、そこには、風間蒼也、風神ライ、神風しゅう、諏訪洸太郎、太刀川慶、二宮匡貴、寺島雷蔵の異様なメンツが出会った。

「「「おい。太刀川。課題は終わったのか。」」」←風間、神風、二宮

太刀川さんがいれば必ず第一声はこれ。（※太刀川さんを叱れる人が人がいれば）

ボーダーに入れば、二番目くらいに覚えることである。

え？一番目は何だって？

あ～。

それは、太刀川さんの激ヤバな成績が明るみになったその瞬間、神風しゅうと風間蒼也による、対ＴＡＴＩＫＡＷＡ講演が行われた。

その講演は、主に太刀川さんのことをしゅうか、蒼也が呼べば一本道を開けることを刷り込まされる。という、一種の洗脳であった。

特にしゅうの熱意は年々増しており、〝実力や技は、真似してもよいが、成績だけは、絶対に真似してはいけない〟と口酸っぱく講演中語っている。

真似するな。に始まり、真似するな。で終わる。

それが、ＴＡＴＩＫＡＷＡ講演・・・。

ボーダーの闇・・・。

話がそれた。

「おい。ライ。あの小説の新刊読んだか？」↑諏訪
「Ｆッッ。諏訪さん。ナメないでください。かっぱ同盟様の小説を僕が逃すと…でも？」↑風神
「おお。
流石だな。
いや～。新刊エグかったな…。
ネット発だから、ナメてたわ…。
ＷＥＢ版と書籍版で二度美味しいなんて…ずりいじゃねえか！
でだ・・・ライ。
俺が貸した小説は読んだか？」↑諏訪
「グッ…。半分くらいは…進みましたよ…。」↑風神
「あ〝？まだ読んでねえのかよ!!
あの名作を!!」↑諏訪
「しゃーないじゃないですかぁ～!!
かっぱ同盟様、悟口山先生、歌の小説化の本とか…瀬伏さんのおおおお本とかあああああ…。
めちゃめちゃ一気に新刊が出たんですよ!?
嬉しいけど、いじめですよおおお!!!
（まじの作者の実話）」↑風神
「え？諏訪。こんな美少年に小説貸してんの？
そんな面で??」↑寺島
「ビショウネン??ビショウネン???」↑風神
「うるっせいぞ!!雷蔵!!
小説貸すのに面は関係ねーだろうがっ!!」↑諏訪
「いや…世間体とかさ…？
あれだよ。諏訪。そういうのは、ボーダー内だけにしときなよ？
スタバとかで、ヤンキーみたいなのとこんな美少年が喋ってたら、スタバ内がザワつくし、事案になるかもよ？」↑寺島
「あ〝あ〝あ〝???」↑諏訪
「も～諏訪さん～怒ってばっかりですよぉ～。」↑風神
「眉間にシワが寄りまくってますよぉ～。」↑寺島

「よしお前ら。ブースに入れ。ギッタギタにしてやるよ。」←諏訪
「「望むところだ。」」←風神＆寺島
「こいよ。Ｍｒ．ノーマルトリガーの諏訪!!!」←風神
「あ。諏訪さんブース入るなら俺も!!!」←太刀川
「「「おい。太刀川!!逃げるんじゃねえ!!!」」」←風間、神風、二宮
「ひへええ!!」←太刀川
「トリガーオンしてでも、捕まえて、今日こそ課題を!」「こんにちわ。ライくん。」「こんにちわ。寺島さん‼(にっこりスマイル)」「ヴッ!!ビショウネン…。」「？さっきは、いいノリツッコミでしたね！」「ソウデシタネ。」「雷蔵…よしトリガーオンするかって…!おい!!太刀川!!こっち来んじゃねー!!」「助けてよ!!諏訪さん～」「太刀川あああ!!」「しね。課題を迷惑かけずに行ってしね。」「まずは、動けないよう足。その次は…っとその前に太刀川。トリガーオンしろ。ほら。」「殺意高え。」「皆で一緒に～!!」

「「「「「トリガーオン!!!!!!」」」」」

〈活動体実態スキャ…ー…ン……アボン。〉
!?
もくもくもくもくもく～もくもくもくもくもく～もくもくもくもくもくもくもくもく～
「わっ！なんだこの煙!!」
「トリガーバグなのか！
データだ!!データを取るんだ～!!」
「これが、トリガーの発展に繋がるはずだ～データを!!」
「うるせいぞ！雷蔵!!しゅう!!」
しゅーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーう。
煙がだんだん収まり、辺りの景色が鮮明になっていく…。
「皆さん大丈夫ですか？」
「「「「え？」」」」
「お？」

「?どうかしましたか?」
「「「「なんで俺がいる???」」」」
「へ?皆さんおかわりないように思えるんですけど・・・?
あれ?でも、立ち位置が違うか。」
「うおっ!背ひっく!やべえ。皆が高い。首痛った〜
って!これ、蒼也のトリオン体か!!」
「俺は、逆に背が高いな。フッ。」
「俺のイケメンフェイスがこんなヤンキーみたいな顔に…。」
「おいっ!らいぞー!!ざっけんな!!!
人の顔をディスんじゃねえ!!!」
「諏訪はまだ黒髪だから・・・マシだ!」
「風間…って!
それフォローじゃねえから!!」
「諏訪…血迷っても大学デビューで金髪なんかにすんなよ。
めちゃくちゃ似合いそうだが。
お前、碧眼じゃねえから、イケメンにはなれないんだぜ!!
あっ。あれな?金髪イケメンの条件、金髪碧眼だからな。
めちゃくちゃ似合いそうだが。」
「うるｒｒｒｒせえよ!!」
「でもあれだな。諏訪は、性格がイケメンだな。」
「「それは、そうだな。」」
「この前、C級の訓練生にガンナーのこと教えてたろ。」
「困ってるやつが居たら、さり気なく助けたりしてたな。」
「よく、夜食持ってきてくれるし。」
「「「諏訪は性格は、イケメンだな。」」」
「お前ら…でも、性格は…のはは、余計なんだよ!!!!」
尊い…21歳組…。
そのくだり、支部で2万回見たよ…。
生で見れるなんて…。
幸せ…。
「おい。クソカワ!!!!早くベイルアウトしろ!!!

俺の顔でそのムカつくニヤリ顔をすんじゃねえ！」
「二宮あ～。なんでそんなに怒ってるんだよ～。
トリガーバグだろ？俺のせいではない。キリッ!!
俺は、いつもそういう顔だしな！
それに…せっかく入れ替わったんだから…愛想の悪い二宮の代わりに俺が愛想振りまいてやるよ!!
ついでに、加古にも連絡するか！面白そうだし！」
「やめろ。馬鹿。いつも冴えてねぇ頭をここで使うな。勉学に使用しろ。
そして、あいつだけは、やめろ。馬鹿。
嫌な予感しかしねえ。」
「馬鹿馬鹿、うるせえな。
いいだろ～？別に呼んだって。
仲がいい同期でいないの加古だけだぞ～？」
「別に仲良くない。」
「・・・。（なんでそんなツンデレヤローみたいに…？は！まさか…二宮は加古のとこ…」
「お前…気持ち悪いな。
だし、加古とはそんな関係ではない。
全くな。」
「はあああ???気持ち悪い???
言葉足らずの奴に言われたくない!!
この前だってC級が困ってただろ。
え…？え…？ってC級が無表情の二宮の前で子鹿みたいにふるえてんの…！
あれは、面白かった。」
「アホ川…今日は、冴えてるんだな。
会話に比喩表現が入っていた…。」
「ん？ひゆひょうげん・・・???」
「訂正する。お前は、阿呆だ。」
「んん??そういえば、誰が誰になったんだ??」

「図にして書くか！」
・トリガーバグ入れ替わり関係図
神風しゅう→風間蒼也のトリオン体　風間蒼也→神風しゅうのトリオン体
諏訪洸太郎→寺島雷蔵のトリオン体　寺島雷蔵→諏訪洸太郎のトリオン体
二宮匡貴→太刀川慶のトリオン体　太刀川慶→二宮匡貴のトリオン体
となった。
「二人ペアで入れ替わってるみたいだな。」
「二宮…災難だったな…。」
「風間さん…!!ひどい!!」
「ひどいのは、お前の成績だろう。
当然の報いだ。」
「しゅうさんまで・・・!!!
う～。ひどい…俺に味方は居ないのか…!!!」
「「いるわけねえだろうが。」」
「ぴえん。」
「死ね。」「俺たちに苦労をさせるな。」「馬鹿みたいな成績取らなければいいだけだぞ???」
「そういえば、ライくんだけ入れ替わってないね。どうしてだろ？」
「あ～。多分それは、僕、ボーダーは入ったらすぐトリオン体になるはなんで～あの時…皆が一斉にトリガーオンした時に僕だけ既にトリオン体だったから？かな??」
「ああ。なるほど～。
ということは、一斉に近くでトリガーオンしたことがトリガーバグになった原因なのかな？」
「その可能性が高いですよね～活動体スキャンの時にバグが起こったような音声が聞こえたので。」
「おお～。分析能力高いねぇ～エンジニアになる予定でもあるの？」

「いや…。特にないですが、開発室にはよく行ってますよ。」
「え…？なんで??」
「・・・エンジニアの人って、不規則なんですよね。何もかも。例えば、食事も睡眠も…。
それを一番偉い人…鬼怒田開発室長が容認していて…。まあ。本人もそんな日常なんで…。
でも、それって、新設のボーダーとしては、だめじゃないですか。
なので…エンジニアの人に健康的な食事と定期的に睡眠チェックをするために行っているんですよ！」
「ううう。めちゃくちゃいい子だな。ライくんは。」
「おい。雷蔵。俺の顔で泣くなよ。気持ち悪い。」
「うるさいよ。諏訪。諏訪がこんなヤンキー顔なのが悪い。」
「やっぱ、喧嘩売ってんな？お前だけ、夜食持ってきてくれるだもんな???」
「おぼえてんの??重っっっ!!!
え～未来の彼女大変そ～」
「いやいや～。諏訪さん面倒見がいいから、彼女さんも適度に甘えてなんか程よい関係性を保てそうですよね。」
「ライ…やっぱり、いいやつだな。」
「諏訪は、ちょろいね。」
「あ〝あ〝??」
「はいはい。諏訪～落ち着けぇ～。喧嘩している場合じゃないだろ～。
ん～。まじでどうやって元に戻るかな。」
「エンジニアに頼むか。」
「おいおい。蒼也。高身長になっておかしくなったか？
目の前を見ろ。」
「ああ。俺の姿をしたテンペストウィークと諏訪の姿をした寺島がいるな。」
「おい!!その二つ名言うなよ!!(※Ｔｗｉｔｔｅｒのアカウント名)
じゃなくて…その二人は、未来のエンジニア候補だぜ!!

トリガーバグくらい直してやる。」
「流石しゅうさん！どうすればいいんですか？」
「ん～。どうしようね。二宮…。
片っ端から調べる他ないと俺は、思うんだけど…。」
「やっぱり、わかったないじゃないか。なら、本職の…」
「うるさいよ、蒼也！…じゃあ。とりあえず、トリガーオフ出来るかやってみよう。」
「「「「トリガーオフ。」」」」
・・・
「だめ…そうですね…？」
「ヴッ!!そうだね。ライ。」
「次は、ベイルアウトしたら治るとか？」
「よし！ブース行くぞ!!」
「急に元気になる太刀川さん。」
「まるで、小学生だな。」
「頭脳もそのくらいなので、小学生だと思います。」
「二宮さん…太刀川さんの恨み強すぎですよ。ふふふ。ふふふ。」
「(にじみ出る育ちの良さ…どっかの阿呆とは大違い…。)」
？ブース
「入れ替わったペアで模擬戦でいい？」
「了解。そうだな。
俺としゅうのペアは、武器にそう変わりがないからいい。
が・・・後の2ペアは、ポジションが大きく違うから、皆で混戦となると、公平ではないからな。」
「そっか～。
今、二宮のトリオン体だから、俺射手なのか！」
「そうだ。
だから、俺の体でアホな事は言うな。絶対にだ。」
「あほだの、ばかだの…なんだよ…。
人には、優しくしなきゃいけないのを親から言われてないのか？」

「お前は、例外だろう。」
「・・・よーし。ボッコボコにしてやる。
ついでに、加古も呼んでやる。」
「やめろ。切実にいじられて終わりだ。だから、やめろ。
それに、しゅうさんと風間さんの模擬戦が始まる。」
「そういうこと早く言えよ～」
ピコン
「チッ。」

「一つ下組は仲がいいんだね。諏訪。」
「おい。雷蔵。あれのどこが仲良しこよしなんだ？」
「ゑ??」
「え??」

―神風しゅうＶＳ風間蒼也　模擬戦　５本　開始―
しゅうと蒼也の模擬戦は、一言で言えば、
ただ、すごい。
最初は、いつもと少し違うトリオン体とトリガー編成、チップの場所のせいで二人共おぼつかなかった。
特に、最初の方は傑作だった。
蒼也は、いつもより長い手足のせいで…ふふふ。
あはは…!!
具体例を出すなら、一戦目。
ふふふ。あはは!!やばい。ツボったかも…!!!
ふふ。
・・・ゲフンゲフン。
それは、一戦目の初め、狭い部屋の中での戦闘だった。
最初、しゅう（蒼也の姿）が待ち構えていた。せっっまい部屋の中で…。
いやなんか…しゅうの底意地の悪さが伺えるというか…。
そんな底意地の悪いしゅう（蒼也の姿）の元へ蒼也（しゅうの姿）は、

一目散に向かっていく。
その時の顔は、すごい顔だった。
蒼也は、しゅうの顔でそんな顔出来るんだ…っていうレベルの般若みたいな顔だった。
弧月を使って壁を切り込み、穴を開け、部屋に入り、戦闘が始まった。
そして、弧月を振りかざそうとすると・・・
ぴとっと止まる蒼也（しゅうの姿）。
天井に弧月が刺さって抜けないのだ。
悪魔なしゅう。
蒼也の顔でしゅうがニッタ～っと笑い、
「　　」
何か言葉を吐いて・・・
蒼也（しゅうの姿）の首を刎ねた。オフ・ウイズ・ユアヘッド!!!!
仮想戦闘フィールドの声は、外には聞こえない。
え？
説明の仕方がシリアスでどこが面白いかって???
考えるな。感じろ～☆（暴論）
まあ、そんなこんなで１０戦を終えて・・・
結果・・・元には戻らなかった!!!
「いや～。戻らなかったな～。」
「仮想戦闘モードだったからか？」
「あ。なら、今度は、警戒区域内でしよーぜ。らいぞーと諏訪が。」
「そうだな。俺たちだけ恥を晒すのは気に食わん。」
「じゃあ。僕は、許可をもらって来る～。」
「ありがとぉ～♡ライ～♡」
「うううううわぁ。しゅう声ヤバ。」
「あ〝？ライはかわいいだろうが。」
「ライくんは、カッコいい派なんで。同担拒否なんで。」
「うるっせえ。今日あった癖に。」
「この話を書いている間にお外の世界では、２ヶ月越えてるからも

う、俺らは、親友だよ。」
「メタい事言うんじゃねえ。」
「あれ？太刀川と二宮は？」
「あ～。太刀川がウズウズしちゃって、二宮をブースに無理やり連れ込んでた。」
「諏訪…字面がエグい。」

「許可おりたよ～
鬼怒田さんが怒ってたよ～。なんで開発室来なかったんだって！
でも、貴重なトリガーバグだから、色々試してから開発室来いとも言ってた。
取り敢えず、バグを直して、その結果をまとめてから開発室に来て。だそうで～す。
お姉さまに呼ばれてるから、僕は行くね。」
「ん。しゅう、了解～。」
「え～。レポート～???」
「開発者なんて、論文とにらめっこ生活みたいなもんだろ。」
「早期から夢を壊さないでいただきたい。」
「しゅうは、変なところでリアリストだからな。」
「そういやあ、弟のかなたもそうだろ。あの年で、だいぶ冷めきった思考してたから、俺も覚えがある。」
「うちの弟は、すごいからな！」
「そして、適度なブラコン。」
「適度・・・？」
「蒼也。いらんこと言わなくてよろしい。」
？警戒区域内（ボーダーの外）
「うおおおおおおおおお!!!
すげー!!!雷蔵素早～い!!
弾は一切当たってないけど!!!」
「しゅう。語彙が崩壊してるぞ。」

「チッ!!!全然当たらない!!!」
「雷蔵!!!軸がブレブレだし固定が甘いぞ!!!」
「うるさいよ!!!本職!!!
諏訪だって、弧月スカってばっかでしょ!!!」
「それは、お前がすばしっこくてあたんね―んだよ!!!」
「なんか、猫の戯れに見えてきた。」
そこは、カオスオブカオス。
大と小の男子二人組がいて、片方は、ゲラゲラと笑いながら観戦しており、もう片方は、真面目に見ている。
見ているものも可笑しい。
周りは、廃墟のようなボロボロの状態ではないものの、明らかに使ってない蛻の殻状態。
「ん?しゅう。何を撮っている???」
「玉狛支部で愛しの想い人林道ゆりさんを眺めているであろう、あのリア充…木崎に送りつけて、同級生の阿呆を犠牲に距離を縮めてもらう。名付けて…恋のキューピットになって、恩を売ってうまーい飯にありつけよう作戦だ!!!」
「いや。そんな上手くはいかんだろう。」
「いや。ＤＫが猫みたいに戯れているんだぞ??ゆりさんの気を引きまくりだろう!!!」
「木崎が同級生の阿呆を晒すやつだとは思えんが…。」
「まーまー。そんなことは、気にしない！気にしない！」
「学校の奴らに本来のしゅうを見せてやりたい。」
「ん～???蒼也くん何を言ってるんだ???」
「お前は、ボーダーに来るとクールキャラを何処かにおいてくるよな。」
「・・・。やめろ。結構キツイんだ。
諏訪ー!!!雷蔵～!!!
レーポート終わりの食堂の夜ご飯かけてゲームするぞ～!!!」

このあと、入れ違った体でツイスターゲームして、負けた諏訪がみんなに奢ることに。
他人の体でツイスターゲームなんて、するもんじゃねえ。
いや。マジで。
蒼也の体の小ささ舐めてたわ。
んなこと思ってたら、タイキックされた。
痛覚切ってるから大丈夫っと思ったそこの貴方。
諏訪が恨みを晴らすぜ。みたいな顔で痛覚オンにしてた。
後でしばく。
「しょうは、奢り何にするんだ?」
「あー俺?ナスカレー。」
「は?そこは、カツカレーだろ。」
「は???茄子が優勝なんだが???」
また一悶着あった。

あーそういえば、入れ替えは、どうなったのかだって?

んん~~~~~~~~~~~~~~。

出水とライの超特大アステロイドで木っ端微塵だ。

そう。

爆破オチ。